
MAINE TRAFFIC

紫電改

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

MAINE TRAFFIC

【Zコード】

Z0514X

【作者名】

紫電改

【あらすじ】

静岡県に住む鉄道大好き少年。この小説は彼の生きがいを小説にしたもののです。

中学生の彼の心が回り始める。
目標は・・・一人前の運転手。

なおこのシリーズでは岸川高校鉄道研究部のエピソードです。

1列車 鉄道少年（前書き）

この小説はフィクションです。

なお、鉄道に興味のある方にはこのことを頭の中に入れて読んでいただければ幸いです。この小説には現実と違う個所がござります。どうかご了承ください。

1列車 鉄道少年

僕は静岡県に住んでいるビニールでもいる中学3年生。スポーツは全くダメ、勉強はできるとは思いたくない少年である。そんな自分であるが、一つだけ自分を輝かせることができるものがある。それは鉄道である。

僕の将来はもう決まっている。それもそこ以外考えてもいい。だが、そこへ行くためには高校をかまざなければ行けないことも分かつている。もちろんその高校生活にも鉄道が絡んだ方が面白いと思っているのは事実。そのためにはどこに行つたらしいものがずっと考え悩んでいるが、めったにパソコンでそんなこと調べていない。だが、暇があると自分の家にある離れにこもつて、模型で遊んでしまっている。中学3年生の6月となれば、僕は最悪の中学生かもしれない。いや、そうに違いない。

と、ここまで前振り。ここから本題に入るのだが、まだ自分の名前を言つていなかつた。ながしまともき永島智暉。これが僕の名前である。

6月8日。今日は久しぶりにフリーな日だ・・・。久しぶりといふのはウソ。本当は毎日フリーなのだ。いつものように離れに行つて模型を走らせている。言つていなかつたが、僕の離れに展開しているのは新幹線と複々線ふくふくせんの在来線しんらいせんが走つている鉄道模型。周回の大きさは実物にたとえて10キロぐらいになるというほどの大きさ。車両は別の部屋に置かれている。ここには折りたたみケースに入つた鉄道模型が30箱入っている。内訳は22箱が父のもの。3箱が祖父のもの。2箱が従兄のもの。いどこ3箱が自分のものだ。レイアウトは大きすぎだし、車両は持ちすぎではと思っているかも知れないが、自分の持つている量などまだひよこ。いや、卵にもなつていなければ・・・。世の中にはそう言う人もいるくらいだ。ここで前述した通りの時に遊んでいる。もちろん、やっていて飽きたことは一度もない。

遊んでいると離れたドアが開く音がした。顔を上げてみると女の方がそこに立っている。僕と顔つきはよく似ている。

「ナガシイ。6月14日に岸川つていう高校で文化祭があるんだけど、見に行かない。」

第一声はこれが・・・。彼女は坂口萌。さかぐちもえ。僕の理解度が一番いい人だ。

「ええー、文化祭。行くの面倒くせえじやん。」

「そう言つと思つたよ。・・・でも、これ見たら行くべきやないでしょつてなると思うな。」

「どういう意味だよ。」

聞き返すと萌は何のためらいもなくモジュールを置いている長机の下をくぐつた。ためらいがないのは当然だろう。小学校の時はほぼ毎日。中学になってからだと土日はほぼ毎回と多いからだ。僕の近くまで来ると、手に持っていた岸川高校のパンフレットを差し出した。受け取つて中をサラサラとみてみる。するとあるところが田にとまつた。

「でしょ。」

「・・・。」

「ねつ。だから行こうよ。絶対満足できること間違いなしだから。確かにそうなのだが。この手の部活があるところのは今初めて知つたことだ。」

「よしつ。決めた。行こうか。・・・で、何日だけ。」

「忘れるの早いねえ。6月14日。パンフレットの裏に書いてあるけど、遠江急行の涼ノ富か遠州鉄道の助信から行くのが近いんだつて。どうする。」

「じゃあ遠州鉄道で行つて遠江急行で帰つてくる。」

「なんでもいいよ。そこは任せる。」

「つうかその文化祭何時から始まるんだよ。」

「あつ、言い忘れてた。9時からだよ。それで終わりが15時。」

「15時終わんのかよ。もうちょっと長くやれよ。」

「まあ、そこ文句言つてもしょうがないし・・・。じゃあ行くつて

」とでいいね。」

言い終わるとグルッと部屋の中を見まわした。ほぼ毎日来ている状態で見るものなんてないはずなのだと思つてゐる人は分かつていな。この部屋にあるのは鉄道模型のモジュールレイアウト。つまり探しているのは・・・。

「ナガシイ。あすこに走つてる寝台特急何。」「北斗星」・・・じゃないか。「やくら」かなあ。それとも「あさかぜ」。

目的のものを見つけて僕に問い合わせた。

「出雲」だよ。

「えつ、「出雲」。」

今度はじっくり見て、走つてゐるものを見つける。その姿がはつきりしてくると、

「あつ、ホントだ。よく見たら24系引つ張つてたのがEF66じゃなくてEF65だつた。」

「だろ。EF66とEF65じゃまず見た感じが違うんだから。」

「そう言われればそうでした。EF65は箱つていう感じだもんね。その箱つていう感じで赤いのがEF81だつけ。」

「・・・そんな感じでいいよ。」

立つて、長机の下をくぐつて車両庫のほうへ歩いて行く。

「えつ、もう車両換えるの。換えるんだつたらわあ「カシオペア」にしてよ。」

「うーん・・・。どうしようかな。」

車両庫の奥に入つて従兄の箱を見つけて中身を出す。

(あれは貨物を取つてくるね。かもつ高速貨物かな。それともタンク貨物。タキいや、紙・・・。)

12両編成用の箱を見つけて2つ取りだす。とりあえず中身を確認して、次は機関車を探した。機関車は地元のEF210(桃太郎)をはじめとする機関車を大勢引つ張り出した。機関車の次は機関車に対応する車両を探す。例えば、EF210が貨物列車を牽引している時は313系や223系など東海道本線を走つてゐる車両。E

F64が重連でタンク貨物を牽引している時は383系「特急しなの」など中央本線を走っている車両という風にする。その車両を一つか二つ見つけて、戻った。

「やっぱり「カシオペア」は持つてくれないんだ。」

「その代わりにもっと面白いもん持つて来たぞ。貨物だ。」

「また26両やる気。準備するだけでも疲れない26両って。」

「26両以外走らせる気ないし。それに萌が手伝うからそんなに関係ないじゃん。」

車両の入った箱を萌に渡して、机をぐぐる。中に入ると萌はすでに着発線荷役方式の貨物駅について車両を並べ始めている。その並べるのに合流して、4両5両と並べていく。その数が26になつたところで、その前に機関車を連結する。スタートはDF200（レッドベアー）だ。

「レッドベアー」だっけ。

「ああ。」

「ブルーベアー」とかいないのかな。雷ものは「レッドサンダー」と「ブルーサンダー」でちやんといふの。」

「まあ、作らなかつただけだる。じゃあ、もつひみつとしたら出発だぞ。」

今まで走っていた「出雲」を駅で止めて、車庫まで回送する。その回送が終わると貨物の番だ。貨物列車が停まっている線路に電気が行くようになって、コントローラーのブレーキを解除。マスコンを入れて、貨物駅を発車する。発車した後は放つておくだけ。走つていいくところを子供のように追いながら、その工程を見守る。やがて貨物列車は新幹線の高架橋の下をくぐり、また新幹線の高架橋をくぐる。坂を上つて鉄橋を通過。次に坂を下つてこのレイアウトの緩行線の下をくぐる。緩行線の駅を通過した後また坂を上つてこのモジユールで一番大きい駅を通過。やがてまた元の貨物駅に戻つてくる。しばらくこの動作を繰り返して、EH500（金太郎）にバトンタッチ。また動作を繰り返して次の機関車へとバトンを渡していく。

く。

「そろそろEF210（桃太郎）に変えない。」

「EF210（桃太郎）はまだ。次はEF510の北斗星色に引かせるんだから。」

「なんでそこでそれ。EF510の北斗星色も貨物引くけど、ED75から引き継ぐつていうことはないでしょ。つうか東北本線通つてきて常磐線に入る貨物なんてあるの。」

「あるわけねえだろ。究極にありえない貨物やつてんだから。」

「・・・ねえ、ナガシイ。気になつてはいたんだけどさあ、日本で一番長い貨物つてどこからどこ結んでて、どこの通つてるの。」

「知るか。多分東京から西鹿児島あたりまでじゃない。」

「こういう貨物列車もあるだろう。だが、この貨物列車は日本一ではない。日本一は札幌貨物と福岡貨物を結んでいる列車。走行路線はない。札幌から千歳線、室蘭本線、函館本線、江差線、津軽海峡線、奥羽本線、羽越本線、信越本線、北陸本線、湖西線、東海道本線、山陽本線、鹿児島本線の順だ。」

「それって「はやぶさ」というやつになつてない。」

速攻でツッコまれた。

「そうだな。でも、これって仕方ないんだよなあ。駿兄ちゃんも貨物マニアじゃないし。分かる人いないんだよなあ。」

「へえ。駿兄ちゃん貨物の模型結構持つてるから一見すると貨物マニアって感じするけど、違うんだ。」

「ああ、本人が言つてた。」

「ふうん・・・。」

お互ひ走つている車両に目を向ける。今走つている貨物列車は26両のコンテナ貨車にコンテナを満載している。当然ずつと満載では面白くない。

「そろそろ牽引機変えるか。」

「変えるんだつたらコンテナ満載もやめない。」

「そうだな。じゃあ、長いタイプのコンテナと載せ替えるか。」

貨物駅に列車を止め、そこまで赴く。まずここまで牽引してきたED75を貨車から切り離し、ケースにしまう。次に後ろに続いているコンテナ貨車のコンテナを必要数外し、20フィートコンテナに載せ替えていく。この20フィートコンテナは1両の貨車に3個載る。載せ方も何パターンがあり、満載。12フィートコンテナを20フィートコンテナで挟む形。その逆。いうこった方法。もしくは満載されているコンテナすべてを外し、そのままにするということだつてある。僕は26両中18両にそれを施した。そのうち10両を何も載せていない状態にした。編成は満杯から一気にスカスカになつた。

「空コキ多いなあ。」

「なんか別なほうがいいのか。もつと空コキ増やすか。」

「なんでそうするんだよ。もうちょっと空コキ減らすべきだね。」

「常磐線だつたらこんな感じなんじゃないの。あれ、EF510の

北斗星色は。

萌の手にチラッと青い物体が見えた。真ん中には金色っぽいラインが入っている。

「おい、それ返せよ。」

見つかっているところが分かっていたようなのですぐに応じると思いまや、

「せめて、あと2両増やしてくれないとヤダ。」

「空コキ。」

「違う。コンテナ載せてあるコキ。」

「外すのより載せるほうが面倒くさいんだよ。」

「知るか。載せろ。」

5秒ほどいがみ合つて、

「最初はグー。ジャンケンポン。」

「あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あいこでしょ。あ

「いやでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。」

12回目でよひやく決着。

「ヤッター。」

「チヒ。」

「ほら、舌打ちしないで、早く空コキ2両減らしてよ。」

「へいへい。」

貨物駅のコンテナホームに置いたコンテナをランダムに選出。空コキ2両のうち1両に12フィートコンテナを5個。もう1両には30フィートコンテナを真ん中に乗せ12フィートコンテナでそれをはさむ形に積載した。

「あー。ジャンケンになると俺が負ける確率高くなるじゃん。」

「ぶつぶつ言つてないの。思考パターンで私に勝つなんて100年早いわよ。」

「ほら、約束通り2両減らしだぞ。」

「まだまだ。」

「・・・。」

「最初はグー。ジャンケンポン。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。あっこでしょ。」

「はい。それ返せ。」

「えー。」

「ジャンケンに負けたんだから返せよ。プラス^{じゅうさん}空コキは2両減らした。」

「はあ。分かつたよ。」

萌^{もえ}からEF510を受け取り、コキ100形26両の前に連結する。コントローラーに戻つて、ブレーキを解除。ゆっくりとしたスピードで貨物駅を発車。また何分か放つといて、EH200（ブルーサンダー）に交代。そして、EF64の重連^{じゆうれん}に交代。そして、「よひやつとEF210（桃太郎）か。」

「そうだな。東海道本線つて言つたらEF210（桃太郎）の王道だもんな。」

「その隣は313系。・・・ねえ、ナガシイ。5000番台（313系）2編成連結して、1・2両編成やつてよ。223系みたいに。」「気持ち悪い。やめる。」

「やつてよ。面白いじゃん。」

そう言いながら、萌は僕に近づき、わき腹を指でなぞつた。

「やめる。くすぐったいから。」

「ナガシイがやるつて言つてくれればやめるよ。み。」

「お前・・・。」

「ねえどいつもやつてくれるの。」

「はあ。今日だけだぞ。」

そう言つと萌のくすぐり攻撃は約束通りなくなつた。車両庫に行つて313系の箱を探す。車両庫には父の313系5000番台と従兄の313系5000番台がある。それを探し出して、車両庫から戻つてくる。

「はいよ。やるとは言つたけど、並べるとは言つてないからな。」「・・・。並べてくれたつていいじゃん。」

「ダメ。」

この言葉で萌はあきらめたらしく。自分で313系を並べ始めをつき言つた通り1・2両編成にした。並べ終わると萌はコントローラーの位置まで来て、

「外回りは借りるね。重つとくけど、出してる間に貨物がぶつかるつてことないようにな。」

「大丈夫だつて。さつき貨物駅通過したばつかだから。今鉄橋のところにいるし。」

「了解。」

車両基地のポイントコントローラーで313系が止まっている線路に電気を行かせる。次にコントローラーのつまみを回して、313系の発車を促す。それを確認すると、自分の運転するコントローラ

ーのブレーキを解除。マスコンを入れて、出庫していく313系を本線に乗せるよう電気をとる。313系が本線に乗るといつ聞いてきた。

「ナガシイ。313系、脱線しないよねえ。」

「知るか。脱線するんだつたら、どつちかの編成にモーター、ぶち込めばいいじゃん。駿兄ちゃんの「スーパー雷鳥」みたいに。」

「そうだね。もし、脱線したらそういうよ。」

「そういう・・・まさか、自分じゃやりたくないって思ってない。」

「チエッ。ばれた。^{もえ}」

どうしても萌はそうしてほしかつたらしい。舌打ちをした。

「チエッ。ばれたじやなくて、自分でそれくらいできるだろ。」

「あー。何も聞こえません。」

「ウソつけ。」

このあと30分間ぐらいい313系とEF210牽引の高速貨物列車を運転した。

他にも223系1000番台の12両編成と223系2000番台の12両編成の新快速。京浜東北線の209系と山手線のE231系など。いろんな列車を走らせていたらもう時間は5時。いつも思うことだが、気付くともう夕方ほんの時間だつたりする時もある。時間が足らないのだ。

「ヤベ。家帰ないと。ナガシイじゃあね。明日学校でな。」

時間に気付いて萌が離れのドアに向かつ。

「6月14日忘れんなよ。」

ドアを半開きにした状態で行つた。

「忘れねえよ。これ見ちゃったんだから。」

パンフレットをかざすと、ニッとした笑つて帰つていつた。

「岸川かあ・・・。」

裏付ける思いで、つぶやいた。

人物
永島智暉
ながしまともき
さかじまちもえ

誕生日 3月11日 血液型 O型 身長 161cm

1列車 鉄道少年（後書き）

感想が「じゃこましたらお書きください。」

2列車 見に行きます 文化祭（前書き）

6月1~4日。岸川高校文化祭を見学しに行つた永島と坂口。そこには今まで見たことのない編成と個性的な先輩たちが・・・。

2列車 見に行きます 文化祭

6月14日。岸川高校の文化祭に向かつた。岸川高校は遠州鉄道の助信から西へ歩いて25分ほど。岸川の正門についた時刻は9時03分だった。もうすでに受け付けは始まっている。受付をスルーしてからはすぐに鉄道研究部が展示を行つてているというホールに向かつた。

ホールは人でたくさんだ。その人が集中しているところには建物が建つていてとても小さい風景が見える。家の離れでよく見なれたレイアウトだ。

「家のより小さいな。」

「ナガシイ家^ちのは大きすぎるだけじゃないの。」

「いや、そもそもしないけど・・・。」

「ほら、なんか走つて・・・。」

汗が出てきそうだった。そう言つ頃には他の子供に混じつてかじりついてそれを見ているからだ。でもいつものこと。萌^{もえ}にとつては普通のことと受け止めた。永島^{ながしま}を追つてモジューるところにした。

「313系だ。これ東海とかで走つてる車両^{やう}だぜ。」

「これだつて毎日走らせるじやん。新快速だか、普通で。知つてるよ。」

「ああ、そうだつた、そうだつた。」

今度は313系の走つていつた方向からまた列車^がやつてくる。前面が白くオレンジと緑のラインが入つていて。湘南色^{しょうなんしき}という塗装^{とぞう}だが、その車体にはステンレスボディーの部分が多い。211系といふ車両だ。

(211系でシングルアーム。こんなのが見たことないけど・・・。)
カーブを曲がりきつてきた6両編成の車両の後ろにはさつき走つていつた313系がくつついでいる。こんな編成あるのだろうか。僕は初めて見る編成に少し違和感^{いわがん}がある。だが、走つている車両にそ

んなことは関係ない。他の子供がやっているように列車の進行方向に先回りする。ここで見ていたいなあとこうこうに来たら、しゃがんで電車が走っている高さに目線を合わせる。こうやってみると模型でも本物の様に迫力を感じるのだ。その時萌は僕の背中側にある方に目線を向けていたらしい。先にあつちの列車が来たみたいで肩をつついた。

「「サンダーバード」だよ。」

目線をそつちに替えて、「サンダーバード」を見る。だが、その列車は「サンダーバード」と違つて顔が赤い。

「「サンダーバード」じゃなくて「スノーラビット」だよ。」「はくたか」、「はくたか」。

「えつ」「はくたか」ってこんなに顔真っ赤の車両もあるの。

「ああ。北越急行が持つてる車両は顔真っ赤だよ。」

「へえ。そうなんだ。」

理解しているのかどうかは知らないけど・・・。目線を戻して、さつきの列車が通過するのを待つた。通過すると走り去った方向に顔の向きを変えて次のカーブを曲がつて姿が見えなくなるまで見送る。見送り終わるとまたつつかれた。

「「雷鳥」。「しらとり」。どっち。」

むこうから走つてくるのは485系という特急電車。この手の車両には先頭にこの車両は「特急」と掲げている。そこを見ればいい。けど、今走つてくる車両にはそんなのどこにもない。おまけに流線型の顔をしている。

「お前、今分かつて聞いて聞いただろ。」

「えつ。・・・はあ。「雷鳥」でしょ。パノラマだったから分かりやすかったよ。」

「だったら聞くなよ。」

「いいじやん別に。ナガシイに比べたら鉄道知識ないんだから。」「いや、そうだけどわあ・・・。」「

すると今度は、

「おい、ハクタ力。『雷鳥』編成違う。4号車と5号車と8号車ドアの向き逆。」

後ろから声を張り上げられる。

「今更いいじやないですか。そこまで見てる人いませんよ。」
さつきの人にハクタ力と呼ばれた人が答える。すると、さつきの人とは別の人気が「雷鳥」に手を出した。走っていた車両を手で捕まえ、モーターがはいっていると思われる車両を抜き取つた。それを抜き取るとそれまで走っていた「雷鳥」は動かなくなり、その人はさつき後ろの人が指摘していた車両の向きを正常な向きに直していった。そして一番最後にモーター車を線路上に戻して、分離した車両を連結しなおしていた。

「膳所さん。そこまでしなくても・・・。」

「ハクタ力の場合はあそこまでしてやんないとダメ。名寄もこれからやそつすればいいじやん。」

さつき「雷鳥」を直した人は膳所、編成が違うと指摘した人は名寄といいうらしい。

「はあ・・・。

「名寄。次「立山」行くから、内回りにこれ並べて。」

「うわ。来たよ「立山」。」

今まで313系が走っていた方は「立山」という列車に置き換えるらしい。この名前も初めて聞く列車だ。だが、並べているところをよく見ていると見たことのある車両だった。家の車両庫にある「急行ゆのくに」というのと同じ車両だ。

「ちゃんと並べろよな。」

「まあ、ハクタ力とは違つて編成間違うことないだろ。」

「いや、名寄の場合は間違い方がひどい。上野でもよく解るぜ。」

「あつ。外回りあつち向きなのをこいつち向きで入れちゃつた。」

「ほらな。」

「ハハ。そう言つことか。」

ちょっとの間中のやり取りを聞いているいろいろなことが分かる。

名寄^{なよる}という人は鉄道のことはよく解つてゐるがケアレスミスが多い。
「立山^{たてやま}」を渡した上野^{うえの}という人は鉄道にはそんなに詳しくないらしい。
「膳所^{ぜざ}」という人はパーフェクト・・・。そんな具合だらう。

また今度は、

「ナヨロン、そつちに313系の「ムーンライトながら」ある。」
女子の声だ。この部活には女子もいるみたいだが、言つてることは
全然違う。313系はいくら使われても特別快速まで。「ムーンラ
イトながら」に充当されるわけがない。そして、今言いたかつた車
両は・・・。

「「ムーンライトながら」って373系で運転してゐよねえ。」
当の本人も萌^{もえ}にツッコマれるとは思つていなかろう。

「そんなのはないぜ。」

「あれないつけ。」

すると後ろからまた別な人が出てきて、

「313系の「ムーンライト」・・・じゃなかつた。えーと313

系の・・・あーもう。373系の「ムーンライトながら」。」

ようやつとその答えにたどり着いた。

「違うつて分かつてゐるのに2回も間違つかな。」

「さあな。あの二人は天然つてところかなあ。まああれでマニアだ
つたらただのバカだけど。」

「・・・ナガシイ。他のところも見に行かない。なんか面白いの
やつてると思うし・・・。」

「ヤダ。終わるまでここにいる。」

(やつぱり・・・)

しばらくの間同じところにしゃがんでみていたため足が痛くなつ
てきた。座ろうとしても電車のほうがさせてくれない。今名寄と上
野^{えの}という人たちのほうは489系の「特急あさま」と「特急白山」
がEF63という機関車にプツシユップルしてもらつて走つてゐる。
この情景はかの有名な碓氷峠^{つちいとうげ}でしか見れない光景だつた。一方ハク
タ力という人がいる方は883系の「特急ソニック」と787系の

「特急つばめ」が走っているが、その「ソニック」のほうだけ「クソニック」と呼ばれているのはなんでだろ？

「さつきから「クソニック」ってよく言つてゐけど「ソニック」ってそんなにクソなのかな。」

言い終わると叫び声が聞こえる。

「ああ。この「クソニック」また架線柱喧嘩売りやがつて。」

「本当にクソだな。つうか誰だよ。内回りに「クソニック」出したの。そいつ処刑だ。」

「あのう僕ですけど、何かいけないんですか。」

「犯人ハクタカだつてさ。ダメに決まつてるだる。内回りに置いたら「クソニック」が架線柱に喧嘩売りにいつて自分から脱線するから。「あずにゃん」もそう。」

「じゃあ、なんで「スーパーおおぞら」は内回りに出しても何も問題ないんですか。」

「あれはKATOの振り子機構が少ししか働かないからいいんだつて。だけど「あずにゃん」と「クソニック」と「しなっちの副作用」はマジで副作用するからダメ。」

「「あずにゃん」と「クソニック」は何言いたいか分かりますけど、最後の「しなっちの副作用」ってなんですか。」

「えつ、「しなっちの副作用」は「しなっちの副作用」に決まってんじやないか。」

「全然答えになつてしません。つか善知鳥先輩それ遠回しに解らな
いつて言つてますよね。」

「こういふやり取りが聞こえてきた。
「あの人があつて「しなっちの副作用」つて「しなの」のことだ
よねえ。」

「ああ、多分な。」

なんか分かつてはいけない気がするのはなんでだろ？

ずっとホールにいて2時間。もうほとんど終わってしまった。昼でも食べに行こうかと誘われて、他の展示に行ってみる。そこで見

たのはポケットモンスターに変装した人や、気ぐるみを着ている人。今の高校生というのはこういう感じなのだろうか。そんなことを思いながら、あるクラスのクラス展に入つて焼きそばを買ってまたホールに戻つた。

戻つてみると名寄・上野周回のほうには貨物列車が走つていた。その先頭に立つのはEF210。桃太郎。後ろに続いているコンテナ貨車は17両。貨物列車としてはふつうであるが、家で走らせている26両の高速貨物列車と比べてしまえば少し短い。その隣に走つていてはEF66が牽引する寝台特急。ヘッドマークは「あさかぜ」となつっていた。編成は7両。正規の14両の半分であるが、ツツ「マないことにしておこう。一方のハクタカチームはEF510が牽引する「寝台特急カシオペア」と「寝台特急北斗星」が我が物顔で走つている。どちらかといえばこちらのほうが客の目を引いている。

「あーっ。ハクタカつ。「カシオペア」止めてつ。」

叫び声がした。その叫び声はさつきギャグを言つていた人だ。止めてと言つた「カシオペア」を見てみると、機関車の動輪が線路から外れており、その車輪の下に何かを巻き込んでいる。

「止めました。」

「ちょっとサヤ。「北斗星」も止めてつ。ぶつかるつ。」

と言つた時にはもう遅かつた。「北斗星」は「カシオペア」が待ちこんだ謎の物体Aに突つ込んで乗り上げる形で脱線した。そのおかげで「北斗星」を牽引していたEF510は少しばかり態勢を崩した。次の瞬間。EF510は観客側にグラつと倒れて落下していった。

すかさず手が出た。落ちていくEF510をダイレクトキヤッチ。床に落ちる手前で受け止めた。その頃には部員の人が脱線した「カシオペア」と「北斗星」の復旧に駆けつけており「カシオペア」を復旧させていた。それに混じつてEF510を「北斗星」が走つていた外回りの線路に乗せて、

「あの。お手を触れないようにお願ひ……」

そう聞こえた時には六つある車輪を次々と乗せていった。

(なんだ。) いつのなれたような手つきは。家で模型やつてるとしか思えない……。これは将来期待できるかも……。)

「触れちゃいけないのは分かつてますけど、EF510(じこいつ)を助けたついでです。」

全ての車輪を乗せ終わってから口を聞いた。その現場には少しにづらくなつたため、萌もえを促して場所を移動した。

「毎日やつてるからつて。あれは将来来るつて勘違いされたんじやない。」

あきれられた。でも、その顔には決めつけていいるというのも垣間見た。

「いいじゃねえかよ。やつちやつたもんはやつちやつたんだから。それよりもここで「北斗星」が来るの見てよ。」

永島ながしまに続いてしゃがもうとすると、対角線の「一」で同じよう正在する人を見た。明らかに中学生。そういう人だった。

(同じような人もいるんだなあ。ナガシイと同類……。)

「北斗星」を見て目を輝かせている永島ながしまを見てふと笑いがこぼれた。「どうした。何か笑えることでもあつたか。」

「いや。なんでもない。」

「何でもないわけないだろ。笑えることが何もないのに笑うつとうのは変人の証。」

「変人とも限らないんじゃないか。思い出し笑いつていうのがあるんだから。」

「・・・。」

「ほら。そつち向いてなくていいのか。「北斗星」が来たぞ。」

萌もえに言われて振り向いてみると「北斗星」はすでに僕の前ではなくカーブを曲がつていつてしまっていた。

「あつ、この野郎。」

「ハハハ。引っかかった。」

「・・・」

「抑えろって。家でいつぱい見れるだろ。」

「見れるけどさあ。EF510の北斗星色^{ほくとせいろ}での「北斗星」はここでしか見れない気がして。」

「なんで・・・。あれ、ナガシイ家の「北斗星」って私のあげた力シオペア色^{ほうだつ}のほうだけ。」

「そうですよ。萌^{もえ}からもらつたカシオペア色ですよ。」

「あれ、そつだつたつけ。『北斗星』のJR北海道仕様のやつはあげたの覚えてるんだけど、他の何かどうじゅになつてわからんない。」

「確か。お前からもらつたやつは「北斗星1号・2号」のセットと「北陸」の客車セットと「能登」の9両セットと「EF510のカシオペア色」だった。」

「あれ・・・。なんかナガシイにワムの34両セットあげた記憶があるのは・・・。」

「それ当てたのは駿兄ちゃん。駿兄ちゃんがそれもつてきた時に見せてつて最初に言つたのが萌^{もえ}だつた。それだけ。」

15時近くになると他の客をひいてきて、だんだんいづらくなつてくる。ちよつと前にホールを出て、家への帰路についた。

文化祭が終わるとすぐに片づけに入る。今まで大きなモジュールとフレールで埋めぬくしていたホールは何もない状態に早変わりしていく。

「今年は優秀賞^{ゆうしゅしょう}か。去年グランプリだつたけどおしかつてね。」

「まつたくだ。生物部死ねばいいと思う。」

「おいおい。過ぎたこと悔^なりんでもじょうがないだろ。それより片付け手伝^{てつん}え。」

「ねえ膳所さん。生物部に聞こえるように死ねつて叫んでいいですか。」

「やめる。それやる前に片付けろよ。」

「じゃあ片付け終わつたら叫んでいいんですね。」

「いや、そうじゃなくて。」

「おい、善知鳥。話してばつかで手が止まつてるぞ。」

「『めんねアヤケン。気をつけるよ。』

ふつうの学習机を「はーっ」という声とともに持ち上げる。

「でも、今日絶対岸川くるつていう人見つけたよ。」

「誰だよ。」

「あの「北斗星」が脱線したときに、EF210（モモチャン）を危機から救つた人。」

「えつ。善知鳥の言つてたいと従弟じゃないのかよ。」

「だつて海斗はもう大阪おおさかで行く高校も決めたつて言つてたし。それに今日はちょっと見に来ただけだから。」

「にしては最初から最後までいたよな。あいつと同じで。」

「その人がここに来るつていうのか。でもそれは併願へいがんじやないか、併願校へいがんこう落ちたらの話だろ。」

「そうだけどさあ・・・なんか単願たんがんできそつな気がするんだよねえ。」

「こらッ。机持つたままそこで話してたら同じだろが。」

「あつ。すみません。」

その頃、

「ナガシイ。今日楽しかったね。」

「ああ。・・・萌もえ。俺、行く高校あすこに決めた。」

「他の高校とか見てから決めた方がいいんじゃない。」

「いや、俺にはあすこしかない。それに・・・あすこだったら楽しめそうだ。」

7月。

「文化祭を見に行つた後はテストかあ。」「萌もえは小さくため息をついた。

「ナガシイはいいよねえ。勉強しなくていいんだからさあ。」

「さすがにそれは無理。1時間くらいは勉強しないと。」

「それでもいいじゃん。塾行き始めたら定期テストふつうに200

点いくよになつたし。何か覚える秘訣とかあるの。」

「秘訣なんてないよ。それに萌がこれやつたら死ぬと思う。」

僕がやつていい勉強法とはテスト1時間ぐらい前になつてパニクツテいる状態でノートもしくは教科書に目を通すこと。ここではそれだけやつて数学の問題集などはあらかじめやつておき、ここで目を通して。といった具合。もちろんこれができるのは1時間目のテストだけで2時間目、3時間目のテストは10分間の休み時間だけでこの作業をする。

「そりや死ぬと思うよ。ナガシイのやり方で覚えれる人のほうがすごいと思うから。」

「人をエスパーみたいに言つな。」

「永島。今度のテスト勝負しようぜ。」

そう話しているときに話しかけてきたのは友達の宿毛佑真だつた。彼とは中学校からの中で、定期テストでは毎回勝負している。勝敗は五分五分。塾に行く前は負け続けていたが、塾に行き始めてからは勝ち続けている。

「宿毛も懲りないよねえ。勝てっこないよ。」

「いいだろ。それに勝負する前から負けるつて思うのは嫌だ。今回は俺も自信あるんだ。合計点勝負しようぜ。」

「ああ、いいよ。」

「ねえ、宿毛。宿毛つてテストの時どうやつて覚えてる。」

「えつ。俺の場合は、とにかく実践かなあ。問題集かなんか買つて、まずその問題集にやらずにノートにやる。やり終わつたら採点して、次に問題集にやつて、また採点。そんな感じかなあ。」

「その方法でナガシイに負けてるつてどうよ。」

「まあ、少し腹立つけどな。でも、結果がそうだったなんなら、もつと頑張ればいいだけの話。」

「もつと頑張つても勝つたことないじゃん。」

「あのなあ。もつと長い目で見ろつて。永島の場合はすぐに忘れる。短期記憶に頼つてテスト乗り切つてるんだから。」

「それに、学調とかじや、あれ完全に負けてるから。国語19点とか取つたことあるし。」

「それ1年の話だろ。2年生の時は26点取れてたじやん。」

「上がつたには上がつたけど、国語が弱点つてことには変わりないじゃん。」

「お前はもつと本とか読もうぜ。そうすれば読解力上がるから。」

「なんか今更つて感じするんだよなあ。俺の場合本はアニメにして読んでるからなあ。」

「・・・ナガシイの場合本を読むと想像力が発達するから。別に悪いやり方じゃないんだけどね。」

「そうだつたな。永島サスペンス系以外は速く読めないもんな。」

「ふつうおかしいよねえ。」

「おかしくて悪かつたな。」

「まあまあ。じゃあ、永島。テストの時待ってるぜ。」

宿毛はそう言い残して、自分の席に行つた。

「ナガシイ。今からもテスト期間も勉強せずに離れにコンツメでしょ。私なんかそれ出来ないからいいよなあ。」

「憧れるんなら、ずっと「デュエモ」とか「バトルアーマー」のゲームやつてればいいじゃん。」

「見つかつたら没収されるんだけど。」

「・・・そ、そりやドンマイ。」

数日後。

「永島 国語何点。」

「37点。」

「ハハ。国語では勝つた。38点。」

「勝つたつて。まだ国語だけだろ。この後どうなるかだつて。勝負は合計点だろ。」

「そだつたな。わりい。」

「そう言い残すと自分の席に戻つていぐ。」

「ナガシイ37点か。私23点。」

「あと2点で半分じゃん。せめて半分取らうぜ。」

「まあ、この調子なら合計110点ぐらいだと想つて、またゲーム解禁かな。」

「よかつたな。」

「あっ、そうだ。ナガシイ。電車でGO!の新快速姫路行き。あれどつしても尼崎あががさきで数秒遅れけりつて高得点でないんだよねえ。ナガシイだつたらやりこんでると想つから、今度やつてくれない。」

「マジかよ。それ俺も苦手なんだ。特に尼崎。あれつて塚本で早く通過しそうになつてわざと速度落とすと痛い目見るんだよなあ。停車位置550mまで130km/hメートルでシッコンで一気に減速つていふことやらないと間に合わなくなるからな。」

「でもそれやるとどうでもいいかも+（プライマイ）30cmに収められなくならない。」

「こや。そこはうまくやればどうにでもなる。後は時間との闘いつてところか。」

「ナガシイ。それで何点いった。私23万。」

「24万。」

「あっ。じゃあナガシイでも私の記録更新無理かあ。」

「無理だな。」

そのまた数日後。

「えー、これはオープンキャンパスに行つた時の感想を書く用紙です。この夏の間に公立を少なくとも2校。私立も1校見て・・・。」

その説明が終わるとあぐびと声が出た。

「あーあ。決まってるのに公立も見に行かなきゃなんないのかよ。」

「面倒くさそうだね。」

「できればずっと家について模型いじつてるほうがずっと楽しいんだけど。」

「アハハ。ナガシイらしいね。」

「そういえば、萌もえはどこに行くか決まった。」

「えつ・・・。公立はいける学校だったならなんでもいいんだけど、

私立なら宗谷にでもしようかなあつて……。」「

(何言つてんだよ。私。)

「へえ。萌らしいな。夢に近づくためなら宗谷に行くのが一番か。」

(ダメだ。私も岸川行きたいなんて到底言える状態じゃない。)

「うん……。」

「自信持つて。実をいうと俺のほうが受かるかなあつて思つてる。」

「それ絶対無駄。ナガシイ内申点高いに決まってるじゃん。」

「それでも心配になるときない。」

「そりや少しあるけど、ナガシイは大丈夫だつて。ナガシイの進路はみんなが意外に思うほどレベル低い進路なんだから。」

「・・・。」

「そうでしょ。」

「そもそも。変な心配かもな。」

笑っている永島の顔がなぜか遠くの人のように思えた。

この回からの登場人物

宿毛佑真　誕生日　4月7日　血液型　B型　身長　164cm

m

3列車 夏 冬

今は夏休みの真っただ中。公立のオープンキャンパスはいやいや行って、そこで聞いたことはすぐに頭の中から拭い去った。8月の第3週。岸川きしかわのオープンキャンパスがある。そこに行つて体験授業を聞き流して、自由に見学できるときにまた鉄道研究部の展示に行つてみた。

展示を行つていたところは昇降口しやこうのある2階。昇降口から右にかけをきつてつきあたる部屋へやだった。ドアを開けて中に入つてみると、文化祭より小ぶりのモジコールが展示してある。中にいたのは文化祭の時に見た人たちと同じように岸川を見に来た中学生。部員の数は文化祭見たときよりも少ないと思った。今走つている車両は内回りは何か分からぬが、外回りは253系「特急成田エクスプレス」であることはすぐに解つた。

「253系ネックス」だ。

声を上げたくなくて上がつてしまつ。電車を見ると出る癖。しようがない。声を上げたのが影響えいきょうしたのか、目線が自分のほうに向いているがお構いなし。「253系ネックス」に近づいて、間近で「253系ネックス」が走り去るのを見た。

その子の姿と反応の仕方を見て、鉄研部員は声をひそめて、「おい、善知鳥。あの子なのか。善知鳥が言つてた絶対に鉄研に入つていう中学生は。」

「よく覚えてないんだよ。顔つきとか。」

「おい、ふつう覚えてるだろ。物忘れひどすぎ。」

「あの子ですよ。見かけなかつたのつて11時ぐらいから30分くらいの間でしたから。」

「アヤノンはよく覚えてるね。」

「外回りだつたし、気付きやすかつたつていうのもありますから。」

「へえ。」

「善知鳥先輩。へえじゃなくて・・・。」

また、

「あの子電車に詳しいんだな。まるで木ノ本や留萌みたい。
「友紀はまだ分かつてないなあ。別に詳しくないよ。」
「253系」

くらい解つてふつう。」

「そうそう。」
「253系」 分かつたつて何の自慢にもならないよ。
「そうか。あたしは分かるとしたら「ドクターイエロー」くらいしか
かないのに・・・。2人もあそこまで詳しければ入るんだよね。あ
の子も鉄研に入るのかなあ。」
「蘭。まだ鉄研に入るつて決めたわけじゃないつて。そくら行こう。

「えっ。ちょっと木ノ本、留萌。待つて。」

しばらく253系に見入つていたら内回りは681系「特急はく
たか」に変わり、やがて外回りはEF81が牽引する貨物列車に変
わつた。それに目線をあわせてみると誰かが僕に話しかけた。
「将来鉄研に入ろうつて思つてる。」

おそらく文化祭の時に見ているのかもしれないけど、僕のほうはそ
れがだれかなんて覚えていない。誰だかわからないけど、

「はい。」

とだけ返事をした。

「おーい。この子将来の鉄研部員だつて。」

「マジ。こんなマニア部入つてくれる人いるの。」

「よかつたな。今年は2人だつたから来年はどうなるかと思つたけ
ど。」

「よし。まずこれで1名は確保したわけだ。1人と言わずに来年は
5人くらいドンと入部があつた方がいいけどな。」

「5人なんて。そんたくさん入部するわけないだろ。3人くらい
で十分だよ。」

「多いほうが楽しいじゃん。ねえ君。」

すると何かをかぶせられた。手を当ててみると帽子だ。それもただ

の帽子ではない。うんてんしゅ 運転手や車掌のかぶる制帽せいぼうだ。

「似合うつうつて。これかぶりたかつたら鉄研てつけんこいよなあ。」

「それだけで来るかつていうの。ていうか最終的に決めるのは本人なんだから、本人に選ばせないと。」

「でもそそることはできるよね。」

「確かにそうだけど・・・。」

「もう決めますから。」

と言つてかぶせられた帽子を取つた。

「もうここしか来ることはありません。絶対にここに来ます。」帽子をかぶせた人に渡して、教室を出た。もうしばらくいればと止められたが、もう帰りたいと言つて断つた。だが、一つ次の心配がやつてきた。もし僕一人の入部だけだつたらどうしよう。でも、そんな心配は後か。

それから月日が流れて2月。きしかわ岸川高校の受験日は2月9日。その日までにやれることをやつていった。

「永島ながしま。お前すくもつて岸川志望きしかわだつたんだな。」

宿毛が話しかけてきた。

「何。その言い方。知らなかつたの。」

「いや、多分そうじやないかなあとは思つてたんだけど、本当に同じ進路とは思つてなかつただけ。」

「同じ進路。」

「ああ、俺も北星ほくせい落ちたら行くところ岸川なんだ。あすこだつたらものすごく適当にやらない限り留年はないからな。」

「北星併願かよ。落差ひどくない。」

「そんなのどうでもいいつて。俺北星は受かるかどうか知らないけど、岸川きしかわだつたらどんなバカでも受かるからな。」

その声は周囲にも聞こえていた。隣にいたクラスメイトが意外そうに話しかけてきた。

「永島ながしまも宿毛すくもも私立岸川狙つてるのか。」

「ああ。」

「ウソ。永島も宿毛も成績いいよねえ。」

「ああ。高校のほうに送られる1学期の成績永島が34で、俺が3

6。」

「そんなに成績よくて岸川行くの。」

「俺はまだ北星狙つてるけどな。永島は岸川単願で狙つてる。」

「えつ。もつたな。それで親なんか言わないの。」

「言わないよ。進路は全部任されてるから。だからどこに行こうが自由。」

「自由でも岸川以外行く気ないだろ。鉄研やりに行くんだから」

「えつ。鉄研やるために岸川に行くの。もつと上の学校とか狙わないわけ。」

「いや、さつき言つたじやん。岸川以外行く気ないって。」

「二人とも俺より成績いいのにレベル低いな。」

「俺が思うに成績いい奴つて全員レベル低い高校言つて自分の好きなように高校生活送るもんだとと思うけど。」

「いや。それは永島と宿毛だけだと思う。」

この話が終了すると、

「もう願書は出したんだしあとは受けに行くだけ。宿毛テスト1時間前になつたらよろしく。」

「おいおい。永島受験会場違つてこと考えとけよな。」

「あつ・・・・。考えもしなかつた。」

「おい。ふつうに考えろよ。俺は併願。お前は単願。受験会場が違うつて考えてふつうじやないか。」

「ナガシイはふつうじやないからそういうこと考えないの。クラスメイトと入れ替わりに話に入ってきたのは萌だった。」

「言われてるぞ。ふつうじやないって。」

「結構前からふつうじやないのは自覚してるけど。」

「・・・・。」

「ハハ。ねえ、ナガシイ。勉強してる。」

「してるとと思つ。」

「ううん。家で模型と遊んではと思つ。」

「うん。その考え方正しい。なんか勉強すると体が拒絶反応を起すというか。」

「それはウソでしょ。ただ勉強したくない言い訳じゃん。」

「・・・。はい。そうですね。」

そんなこんなで2月9日。きしかわ岸川高校を単願で受験。その数日後には・・・

「あー、受かつたかどうか心配だー。」

「ナガシイ心配しそう。内申34あつて、きしかわ岸川単願。受かんないわけないじゃん。」

「それでも受かつてるかどうかは気になるだろ。」

「それは・・・。」

(なんでだろう。ナガシイここまで受かつてほしくないって思つたことなんて・・・。いや、そう思つてちやだめだ。ナガシイは岸川で鉄研やる。それを止めちゃいけないんだ。そうしなきやいけない・・・。でも・・・。んつ・・・。)

(高校からは萌もえとは一緒じゃないのか・・・。えつ。俺何考えてんだよ。宗谷そうやに行きたって言つたのは萌もえの意思じゃないか。それを止めるなんておかしい。一人とも自由に生きて、もしまた・・・。その時。その時そうすればいい。)

そう思いを巡らせている間に自分たちの順番がやつてきた。僕は岸川に萌もえは宗谷に合格。

(これで本当に・・・。)

(・・・。今は・・・。でも、いつか言わなきや。私が田指してるのはこんなのじゃない。今からでも間に合つ・・・。)

そして、合格通知をもらつた日の放課後。

「ナガシイはやっぱり岸川合格おめでとう。あすこなり毎日楽しもうだね。」

「ああ、だらうね。萌もえは宗谷。お互そなわい夢に前進だな。」

「そうね。これからお互い夢に向かつて歩いてくんだよね。」

「うん。俺は電車の運転手。萌は幼稚園の先生。この一つをかなえるためにはそこに行くのが一番の近道になるのは間違いないんだからな。」

「……。そうだね。」

何かかわす言葉がなくなつたみたいに黙り込む。

「ナガシイ。鉄道研究部って何するんだろうね。」

「よくわかんないけど、どつか行つたり文化祭とかで展示やつたりするんだって。」

「よくわかんないって……。それでも入る部活。」

「入る部活だよ。俺岸川^{きしかわ}行かなかつたら行く学校ないんだから。他の学校はただのトゲだよ。」

「内申34あつてそういう人も珍しいと思つけどね。」

「そうかあ。俺には全部トゲみみたいに見えるけど。」

「違うでしょ。ナガシイには岸川^{きしかわ}はとげを覆うクッショーンがあるけど、ほかの学校にはそのクッショーンがないからおりたくないだけじゃない。」

その描写を想像してみる。ヘリコプターに乗つている僕はいま下を見下ろしている。下にはたくさんのトゲ。それもとても鋭い。ちょうど中心ぐらいにはとげが突き出でていないところがある。そこに飛び降りようとしている。

「うーん。当たつてるかも。」

「かもじやなくて当たつてると思つよ。」

それから1か月と数日。今執り行われているのは伊奈中学校卒業式。中学3年生全員の名前が順番に点呼されて、卒業証書を授^与されしていく。僕も卒業証書を受け取つて、自分の席に戻つた。
(ここで、萌^{もえ}と話すのも今日が最後か。)

心の中で分かりきつていてることを思つた。

(ナガシイと毎日話せるのも今日が最後か。)

萌^{もえ}も分かりきつていてことを思つた。

卒業式が終わると3年生は保護者と2・1年生に見送られて、体育館を後にする。体育館の次は学校の外へ。あるところまで歩いて全員水入らずになる。

「ナガシイ。帰ろ。」

「お前友達とは話してかなくていいのか。」

「綾たちとか学校同じだし、また会えるし。」

「そう。じゃあ、行くか。」

自分には友達はそんなにいない。別に悲しくもないし、何の未練もない。ただ一つだけ僕を悲しませるのは萌^{もえ}とは違う学校になるということだけだった。

「これから違う高校だな。」

「嫌なの。」

「いや、もうこうわけじゃないけど・・・。今までずっと話してたのに、これからは話せなくなるんだなって思つただけ。」

「・・・。それはそうだけどさあ。でも、県外の高校とか行くわけじゃないし、会おうと思えばいつでも会えるわけだし。」

「それもそうだな。」めん。なんか暗くなるようなこと言つて。

「気にしないで。ナガシイのことよく分かつてる人だから。」

「そうだったね・・・。」

しばらく黙つて数歩。今日ほいつもの帰り道がどうしても長く感じてしまう。

「なあ、萌^{もえ}。文化祭とか見に来いよ。待つてるから・・・。」

「暇だつたら行くね。」

「いつも暇なくせに。」

ちよつとの間お互い黙つていた。

「ナガシイ。・・・創るなよ。あと頑張れよ。」

何をつくるなどいうことなのだろう。でもだいたい想像はつく。

「分かつたよ。そつちこそな。」

「・・・うん。じゃあな。私こっちだから。」

「おう。じゃあな。」

手を振つて僕は萌もえと別れた。その後ろ姿を見送つているとため息が
出た。

（結局言えなかつたなあ。でも、いつか言わなきやいけないことが・
・・。これ、本当にナガシイ許してくれのかなあ。やっぱりウソ
ついてきたから許しかゃくれないのかなあ。）

永島ながしまの歩いて行つた方向を見て、考えを巡らせていた。

その時僕は・・・、

（結局えいなかつたなあ。好きつて・・・。・・・。大丈夫。萌もえは
ほかの男子には・・・。）

家のところまで来てそれを思つ。ちよつと萌もえの家のある方向を向い
てしばらくそのままでいる。

（言えるチャンスはいくらでもある。また、その時が来たときには・
・。）

一度と訪れることがないだらうと思つ。一度目を心の中で思つ。だが、
この先に待つていた展開は少なくとも僕には想像できなかつた。

3列車 夏 冬（後書き）

気まぐれ投稿みたいになつてすみません。
これからもこのような不定期投稿ですが、読んでくれる人には感謝。

4列車 スタート 高校生活

中学を完全に卒業して7日後。4月7日。僕は真新しいワイシャツに腕を通して、ネクタイを締め、黒いズボン履き、ブレザーに身を包んだ。
岸川高校入学式。1年生は9クラス。そのうち1クラスは中高一貫コース。2クラスは特進かコース。残りの6クラスがふつうにやつていくコースとなっている。僕は1年5組で、同じ中学校から来た人は僕を含め3人。そのうち一人は僕と同じクラスである。彼とは親友で名前は宿毛祐真である。もう一人は名前も顔も知らない。

「あーあ。俺は北星落ちてここになっちゃったけど、またお前と一緒にだな。」

「そうだな。」

「これからもよろしくな。またテストとかになつたら勝負しようぜ。」

「ああ。でも・・・、始まつてそつそつテストの話つていうのもなあ。」

「テストの話を引き合いにしたのは悪かつた。いきなり勉強の話だと遊べなくなるってか。」

「うん。」

「お前は十分遊んでるつて。受験勉強だつてろくにしてないつて自慢してただろ。」

「それでもやつたつて。受験前の1日前に1時間くらい。」

「それをろくにやつてないつていうんだよ。まあ、私立なんて受からないほうがおかしいつてところあるからそれでも合格したならないか。」

「そつ。そういうこと。」

「ハハ。永島らしいな。永島の場合は結果しか気にしないからな。」

「その頭ある意味うらやましそよ。」

「何。^{すくも}宿毛俺の頭みたいなほうがいいって思つてる。」

「自分の好きなことしか頭に入つてこないんだもん。そこまではつきりしてる頭だつたら何かと苦労する「ことがないのかなあつてこと。」

「そうかなあ。」

「じゃあ、考えても見ろよ。お前高校決めるとき^{ここに}鉄研^{てつけん}があるから来たんだろ。他のところともに考えてたか。」

「ああ、確かに。」

(分からせるにも一苦労かよ・・・。)

体育館に移動しながらこんな話をする。今日は部活紹介があるそうだ。まあ入る部活も決まっているのだが・・・。

「永島はどこをどう考えたつて鉄研^{てつけん}だろ。俺どの部活にしようかなあ。」

「宿毛部活入るうつて思つてるの。」

「いや。出来れば入らないほうがいいなあ。まあ、強制だつたら適当なところ入つといつて活動に行かないつていうのも一つの手だな。」

「入るんだつたら活動しろよ。」

「もう部活動にはづんざり。永島は運動部に入つてなかつたからそう感じないんだって。」

「確かに運動部じゃなかつたけど、情報処理部でも後々面倒くさくなつたぞ。」

「お前その時代から遊んでたんじゃないのか。」

「うん。インターネットいじつてKATOとかTOMIXのインターネットで好きな車両の再生産とかいつかなあつてみてた。」

「やっぱりるのはそれがあ。ちゃんとタイミングとかやつてたんだろうな。」

「やつてはいたよ。2年生までに表計算2級取つてスピードは3級まで取つた。」

「・・・なあ、永島^{ながしま}。気づいてはいたけど、お前活動と遊びがごつちゃになつてないか。」

「えつ。」

永島のこの反応には正直困った。

中高一貫コースをのぞくクラスの生徒全員が集まつたのが13時10分ごろ。始まつたのは13時20分きつかりだと思いたい。まず始まるのは運動部の紹介。運動部なんてに入る気はないし。運動部の部活紹介はとにかく耳から入れて耳から出した。頭をただ通り過ぎていくだけ。なんといつているのかも忘れた。

何分かたつた後に5分間の休憩をはさむ。これが終われば文化部の紹介。まず一番に生物部の紹介。その次に鉄道研究部の紹介となつていた。

（これ以外聞かなくていい。）

そして、いよいよ鉄道研究部の紹介。出てきた人は2人。1人が演説台に行つてもう1人は胸の前で何かを広げた。あの広げた物は間違いなく鉄道模型である。その車両が何なのかは分からなかつたが、何かと白が強調される車体である。583系「急行きたぐに」だろうか。その傍らで語つている人はこう言つている。

「僕たち鉄道研究部は3年生4人。2年生2人の計6人で活動しています。部費は年間14,000円と多少高いですが、年に一度臨地研修と言う旅行に行つて東北などいろんな所へ訪問しています。また地域からの要請で学校以外でも展示を行つております。……」
（部費は14,000円。それを差し引いても入る価値はある。いや。入らなきや岸川に来た意味がない。僕は勉強をしにここに来たんじゃないんだ。それは二の次。）

また別の人は、

（鉄道研究部かあ。私がここに来た半分の目的はあれ・・・でも、女子が入つていいの。逆にそういう面でいじられたくないし・・・。）

それが終わるころ。僕の頭の仲は鉄道研究部のことだけでいつぱいになつた。部活紹介が終わつて教室に戻ろうとするごとく。宿毛がすくも話しかけてきた。

「頑張れよ。部費も高いみたいだし。」

「あんなの関係ないよ。関係すんのは、入るか入らないかだ。」

「それもそうだな。」

「宿毛は部活何にするんだよ。さあほんとうでもいいやつに入つと
けばいいって言つてたけど。」

「なんていうかな。こういつときに限つてそういう部活つて見つ
からないんだよな。」

「あつ、なんかわかる。自分で合つてるの探してると自分が気
に入ったのは何か都合が悪くて、気に入つてないけど都合がいっ
ていうことだろ。」

「そんなどころ。でもさつきの説明聞いて、俺情報部にでもしよう
かなあつて思つてる。やっぱりこれから時代パソコンいじれなき
やついてけねえだろ。さすがに基本操作ぐらいはできたほうがいい
かなあつて。」

「ふうん。」

「宿毛にそう返事を返すと自分の肩が少し重くなつた。」

「どうした。」

落ち込み気味の僕が少し氣になつたらしい。

「なんかここまで来ると鉄研^{てつげん}に入るの俺だけなんじゃないかなあつて
思えてきた。」

「なるほど。もし一人だったらお前が自動的に次期部長になるんだ
もんがあ。」

「俺部長なんて柄じゃないし。出来れば俺よりもしっかりしたやつ
が入つてくれればいいなあつて。」

「ストライクゾーンの狭い要求だな。残念だけど俺は鉄研^{てつげん}にはいか
ないぜ。部費14,000円なんて到底払えないからな。」

「そこをなんとか。お代官様。」

「他当たれつて他。」

このやり取りを見ている人がいた。すらりと伸びた僕よりも身長の
ある人が。

教室に戻ると担任から部活登録届の紙をもらつた。顧問はうちのクラスの副担任安曇川正司先生らしい。部活登録届をもらつと時間はすでに15時を回っている。全員10分間ぐらい自由にしていた。

その10分間が過ぎると遊びを危ぶむ宣言があつた。

「ええ、これからは毎日ノート3ページやつて出してもらいます。

(マジかよ。)

(これじゃあ北星と同じじゃん。)

「土曜と日曜令わせて6ページを次の週の月曜日に出して、ゴールデンウイークなどの連休中は1日5ページやつて出してもらいます。この勉強は絶対みんなのためになるからな。この高校生活でじこまで頑張れるかが・・・。」

(知るか。)

「その悪夢のホームルームが終わって・・・、

「永島。四ツ谷先生のあれ。どう思つ。」

「俺たちを殺す気かよ。四ツ谷先生。

「殺す気はないんだろしけど・・・。永島は当然やらないんだよなあ。」

「やるわけねえじやん。あのなのやつたらいつか死ぬ。だから反抗してノートは出さない。・・・。そう聞く宿毛は出す氣あるのか。」

「ふと、これやつたら永島を抜き返せるかなって思つた。」

「やつてみれば。ノート出したほうがいいか出さないほうがいいかはそれで決着がつく。」

「出したほうがいいだろ。・・・でもそれをすると対等じゃないか。永島が出さないなら、俺も出さないでお前に勝負しかけたほうがいいか。でないとハンデ大きいからな。」

「なんだ。結局宿毛も出す氣ないじやん。」

「だつてやりたくねえもん。北星受かつてたら俺も考えたかもしないけど。」

アルミ可撤出で下駄箱の下から2番目の手をかけて、ロックを解除。手前に引っ張ると靴の入った口がぽつかりと開く。上履

きを靴に履き替え、両開きになつている昇降口を出る。その先には階段があつて10段くらいの階段の2本立てになつていて。最初の10段を下ると進行方向右側にまた別の階段が通じてきている。

「あれ、永島そつちから帰るのか。」

「違うつて。鉄研のあるとこ体育館のステージ裏つて言つてただろ。だつたらこつちから言つたほうがいいのかなあつて。」

「ああ、そういうことか。」

その階段を下ると1回の昇降口に通じる。そこを左に曲がつて2・3年生の駐輪場のあるところへ向かう。ちょっと開けたところに出ると右手側に2・3年生の立体駐輪場。左手側に体育館の入り口がある。その入り口からステージ側を除くとステージの上に何か置いてあるのがわかる。

「ステージ裏じゃなくてステージ上じやないのか。何か置いてあるし。俺が思つにあれの後ろに部室みたいなものがあるとは到底思えない。」

「どーにあるかなんて今はどうでもいい。それより、分からなかつたら安曇川先生に聞けばいいよ。」

「そうだな。鉄研の顧問らしいし。」

宿毛は歩き始めて、僕にさよならを言つて帰つた。

案内があつた体育館ステージ裏に向かおうと思つたが、ここで路頭に迷つた。すると誰かが声をかけてきた。振り向いて見るとクラスの・・・誰だけ。

「佐久間だよ。永島何してんだよ。」

「鉄研見に行こうかなつて思つてて・・・でも、ステージ裏つて言つてただけでどこにあるのか分かんないからここに突っ立つてるつていふ感じだけど。」

「鉄研つ。永島も鉄研はいんの。実は俺も鉄研に入ろうつて思つてんだ。つづかそのためにここ来たくらいだし。どうせ見に行くんなら一緒に行こうぜ。」

「ああ。」

「でも・・・、場所が分かんないっていうのは俺も同じなんだよなあ。」

「安曇川先生に聞けばいいじゃん。あの人顧問だし。」

「なんでお前聞かなかつたんだよ。」

「んつ。多分頭がそこまでまわんなかつたんだよ。俺バカだし。」

職員室に戻つて安曇川先生を呼ぶ。すると、居合させた先輩らしき人を呼びとめた。

「鷹倉君。^{たかくらくん} この2人鉄研見学に行くつて言つてるから、部室まで連れてつて。」

「はあ。アド先生。僕はただのパシリですか。あつ後、部活登録。」

「はいはい。分かりました。じゃあ連れてつて。」

安曇川先生は鉄研部内ではアド先生と呼ばれているようだ。誰が命名したかは知らないけど、まあいか。そして呼びとめられた鷹倉先輩という人はいかにも迷惑そうな顔をしている。しかし、その顔も誰かを見てからは変わつた。

「絢乃。^{あやの} こいつら部室まで連れつていつてやつて。」

「ハクタ力さあ。そういうことするのやめなよ。」

と言つてから僕達のほうに顔を向ける。するとため息をついて、

「分かつたよ。場所教えるだけでも教えとくわ。だから案内終わるまでは待つてろよ。」

「ヘイヘイ。」

「で、ハクタ力。あたしの^{ぶがつとじゆくとじけ}部活登録届も出しといてね。」

「お前なあ。」

「じゃあ、行こうか。」

絢乃^{あやの}と言つた人は紙をハクタ力^{あやの}という人に渡して、すぐに僕達を連れていつてくれた。

「鉄研^{てっけん}に入部があ。君達つてなんか詳しいことつてある。」

「俺は新幹線のことはだいたい分かります。」

「まず佐久間^{さくま}が口を聞いた。」

「俺は電車のことならだいたい・・・。」

「そ、電車のことで話をするなら先輩にいい人がいるんだけどなあ。」

話しながら、体育館のグリーンベルトを歩く。端まで来るとドアを開けて中に入る。そこで体育館用のスリッパに変えるように促され、体育館内に入る。中ではバスケット部が準備を始めている。どこまで行くのかと思っているとステージの手前で左にかじをきつた。すると目の前にドアが現れる。そのドアを開けるとステージに上がるための階段。それを上つてステージに上がる。ステージを無視して、奥側の狭い通路に入る。そこをするするとすり抜けて、さつきいたところの反対側に来る。その前にはまた階段。それを一段上のと小さな踊り場を介してまた階段。この位置まで来ると上に二つのドアがあることを確認した。絢乃といふ人はそこまで来ると二つあるうちの左側のドアを指差して、

「あつちがあたし達の部室。普段は鍵がかかるから、来たいときは安曇川先生か吹奏楽の山科先生に鍵をもらつて開けてね。これで部室の場所分かった。」

「あ・・・、はい。」

「それじゃあ。今日は活動ないから。不定期つていうのも不便だよねえ。ああ、そうそう。名前言つてなかつたね。あたしの名前は楠絢乃。とりあえず部員だからよろしくね。」

そう言つて来た道を戻つていった。僕と佐久間はしばらくその場にいたが、早く帰りたいという気持ちに押されて帰つた。

今回からの登場人物

佐久間 悠介	誕生日	1月15日	血液型	B型	身長	174cm
鷹倉俊也	誕生日	3月22日	血液型	B型	身長	173cm
楠絢乃	誕生日	12月22日	血液型	B型	身長	167cm

身長 163cm
1年5組担任 四ツ谷
やつや

5列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）

「その頃萌が通い始めた宗谷学園では……。
「萌の彼氏は当然鉄研入ったんだよねえ。」「
「入らなきや岸川に言った意味ないしね。」「
「ていうか萌なんで岸川行かなかつたのよ。そつすれば彼氏とも同じ学校だつたのに。」「
「ナガシイが宗谷に行くのが一番だつて言つたからね。それがあるとなんか行きづらいだろ。」「
「ああ、そういうことか。それだと行きづらいわなあ……。でも寂しくない。」
「そこまで子供じやありません。ナガシイがいくら大きい子供だからつて一緒にしないでよ。」「
「永島君にあつたら言つてやうつかなあ。萌が永島君のこと大きな子供つて言つてたつて。」「
「言つてもいいよ。本人がそう言つてたんだから。」「
「・・・。」
(手回しが速かつた・・・。)
翌日。部活の中身はまだ見ていないが、部活登録届を出した。数日後。今日はアド先生から活動日だと聞かされて勇んで楠先輩に教えてもらつた部室に向かつた。
だが、ドアの前に立つてドアを押してみると開かない。鍵がかかつていて。(あれ。ドアつて押せば勝手に開くつていつもじやなかつたつけ。)
しばらくすると佐久間も合流して、またじばりくの間ドアの前で突つ立つていた。
「あれ、新入部員。」「
下から声がする。踊り場のほうを見てみると女子の顔がこちらをの

ぞきこむ状態にある。

「サヤ早く来てみ。新入部員いるよ。」

その人はサヤという人を呼んだ。ちょっとするとそのサヤという人が顔を出した。

「あれ、なんで前に突つ立つてんの。入ればいいじゃん。」

第一声はこれかよ。この人はバカなのか。それとも、ウケを狙っているのか。

「サヤバカだろ。鍵かかってるから入れないに決まってるだろ。」

「あれ、鍵は善知鳥^{よしの}が持つてるんじゃないの。」

「あたしが持つてるわけないでしょ。だからサヤが取つて来てよ。」

「サヤ先輩も善知鳥先輩も自分で鍵取り行くとかして下さいよ。」

聞き覚えのある声は楠先輩の声だ。その声がしたあとサヤという人が階段を上つて来て部室のドアを開放した。

「あれ来てたんだ。前に鍵は安曇川先生^{あじがわ}か山科先生^{やましな}に貰つてつて言ったのに。」

僕達の顔を見つけるとそう言つて、

「ちょっと狭いけど入れば。電車好きにはたまらない部室だと思うし。」

促されて中に入った。入つてみると確かに狭い。ドアのすぐ横にはレールの入つた箱が置かれている棚。レールの他に転車台の模型も置かれている。ドアの左側にはカラー・ボックスみたいなのが2つ置いてある。ぱっと見モジュールの材料になりそうなものが置かれていた。その向こうには木の棚があり、そこには製作中のモジュールが置かれている。そして、右側奥の方には白いケースに詰まつた引き出し。中はカラー・ボックスの中身と同じモジュールの材料だろう。真ん中あたりにはこの狭い部屋に長机。それも2つはベコベコになり、そのうちの1つには製作中と思われるモジュールが3枚置かれている。またそのうちの1つには木の棚が置かれており、そこにはE231系の写真とモアイ像が置かれている。意味はあるのだろうか。そして、その長机に対応するように長椅子が一つ。後は折り

たたみ椅子が3脚。学習椅子が5脚ほど置かれている部室だった。

先輩達は思い思いの席に腰をかけて、休んでいる。さつきサヤと呼ばれた人はPFPをやり始めて、善知鳥という人と楠先輩は携帯電話をいじり始めた。全員マイペースすぎて逆に困るというか・・・。しばらくそんな状態が続いていると、また人が来た。だが、その人はドアを開けるとすぐにドアを閉めてどっかに行ってしまった。

「ナヨロン。」

いきなり善知鳥という人が叫んだ。ドアに突進して、今帰ったと思う人を捕まえて、部室の中に引きづり込んだ。

「おい。善知鳥。首掴むことないだろ。いつもギャグでやってるの分かつてるじゃないか。」

「半分冗談じゃないって気があるから。つい癖で。」

「それはウソだろ。ていうかお前らここのこととかいろいろ言ってやれよな。1年生は分かんないんだから。」

今いる3人を叱つてからその人はこう説明してくれた。

「とりあえず名前だけは言つとくわ。俺は名寄真佐哉。よろしく。」「あだ名ナヨロンな。」

「余計な事言うな、善知鳥。まあいいか。多分お前らも強制的に善知鳥にあだ名つけられると思うから・・・。とりあえず中のこと説明しどくけど、お前らの後ろにある棚と木の棚でちょっと隠れてるところ以外は開拓していい。今言つた部分開拓すると死ぬからやめてけつてことをまず最初に言つとく。で他は、その後ろの白いケースと、こっちのボックスの中にはモジュール作りのための道具。まあ作らなきゃ関係ないけどな。それで木の棚の下にあるのが、ボンド水と工具。と、無いとは思つけど間違つてボンド水飲むなよ。飲んだら食道と胃が固まるから。まあ今言つとくのはこれだけかな。」

辺りを見回して、

「お前ら自己紹介だかなんかやつたか。」

「やつてないよ。」

「じゃあやれよ。1年生來てるのにゲームとか携帯は失礼だろ。」

「分かつたよ。じゃあ名前くらいは言つとくわ。」

それまでPFPをいじっていたサヤという人がゲームを一時中断して、

「俺の名前は北斎院大智。きたさやだいち漢字難し（むず）だからサヤとかつて呼んでくれていいよ。」

「あたしは善知鳥茉衣。うといまこ電車のこととか全然分かんないけど、分かんないことあつたら聞いて。でこっちの彼女がハクタ力の追つかけの・・・。」

「ちよつ、善知鳥先輩。余計なこと言わないでください。」

「えつ、だつてそうじやん。」

「そうじやありません。」

「顔真っ赤で説得力無いよ、アヤノン。」

「だから、善知鳥はそういう余計な説明しなくていいんだって。」

「ええ。いいじやん。」

「いやそれがよくない。」

3年生が言い合っている間にまた一人やつてきた。その人を見て、

「アヤケン。オヒサア。」

僕達を見ると、

「新入部員。」

「ああ、そうだよ。」

「じゃあ、名前は言つとくな。あやせけんと綾瀬健斗。部活じゃアヤケンで通つ

てるからそう呼んでもいいよ。」

ざつと自己紹介を済ませる。

「そういうやあ、お前らの名前聞いてなかつたな。1年何組でどこに住んでるかと名前言つてもらつか。まずそつちののっぽのほう。」

「1年5組の佐久間悠介です。涼ノ宮に住んでます。」

「涼ノ宮かあ。案外近いね。」

今度は指を僕のほうに向けて言えと促す。

「1年5組の永島智暉です。小楠の中瀬つていう所に住んでます。」

(小楠の中瀬・・・・。永島・・・・。)

「佐久間悠介に永島智暉があ。分かつた。」

「部員は全員で6人つて言つてましたけど、今ここにいるのは5人ですよねえ。」

「前職員室の前であたしと話した人がいるでしょ。あの人が6人目だよ。名前は鷹倉俊也つていうんだけどね。ハクタカつてみんなに呼ばれてるからそう呼んでもいいよ。」

噂をしているとその鷹倉先輩が来た。

「彼がさつき言った鷹倉俊也君。前あつてるから分かるよね。」

「ああ、はい。」

その後佐久間は足早に帰り、僕はしばらく部室においてあつた車

両で遊んだ。

「永島つてどんなあだ名がいい。ないならあたしの独壇場で決まるけど。」

「ああ、じゃあ。ナガシイでお願いします。」

「分かつた。永島イコールナガシイだつて。皆覚えろよ。」

「・・・」

「そのあだ名つて何か関係あるんですか。」

「別に関係ないよ。ただ鉄研の文化みたいなやつ。この部活の部員は全員友達だからさあ。先輩と後輩の関係つていうのも少しは大事なんだろうけどあたしはそんな固いこと言わなくていいと思つてるだけ。」

「・・・」

「は・・・反応無つていうのも少しつらいんだけど。」

「善知鳥先輩インパクトありすぎなんですよ。1年生からヒカレル対象だと思いますけど。」

「そうか。ねえ、ナガシイあたしつてそんなに個性的か。」

「えつ・・・」

「ほら、永島が困つてるじゃないか。」

「いやあ、ごめん。いきなり難しい質問しちゃって。まあそんなに固くならなくていいってだけ。いいよ、あたしに限つてはタメ口で

も。」

「タメ口聞くんならナヨロンのほうがいいんじゃないか。こいつ電車詳しいし。」

「それだけでそうするなつうの。」

「ウソ。それは冗談。」

「どこまでが冗談で、どこからが本当なんだよ。」

「よし、質問変えよう。担任誰。」

(こいつは人の言うことと聞いているのか……。)

「えつ。四ツ谷先生ですけど。」

「うわつ。四ツ谷かよ。」

「四ツ谷かあ。お前まだよかつたな。」

先輩たちがこういうのは十中八九のことだろう。そのことを先輩に聞いてみると夏休みや冬休みに1日5ページ出されるとこいつことは本当。そして、出さないとこいつが返ってくるところとを聞いた。

「へえ。そうなんですか。」

「まあ、ナガシイなりひとつにかなりそうだね。バカそうだし。(いや。こいつバカじゃないだろ。)」

ふと時計を見るともう18(6)時だ。

「あっ、すみません。今日はこれで。」

「ええ。もう帰っちゃうの。もうちょっと長くいればいいのよ。」

「帰るって言つてゐるのに引き留めかけやこけないだろ。」

「次の活動日こいつですか。」

「明日だけど。」

「じゃあ、明日も来ます。失礼します。」

ドアを閉めて帰路についた。

その後の部室では……、

「すごいのが来たな。」

名寄がつぶやいた。

「すごいって。ナガシイなんかす」「ことじゆれもあるのか。」

「いや、あいつ自体がすごいって意味じゃない。永島の家がすごいって言つた方がよかつたかな。」

「どういう意味だよ。」

「あいつ、小楠おぐすの中瀬なかぜつてところに住んでるって言つてただろ。たぶん間違いないと思う。あいつ遠江急行の社長の孫だ。」

今回からの登場人物

北斎院大智	誕生日	11月19日	血液型	B型	身長	169cm
綾瀬健人	誕生日	3月30日	血液型	A B型	身長	167cm
名寄真佐哉	誕生日	9月3日	血液型	O型	身長	171cm
善知鳥茉衣	誕生日	6月4日	血液型	A型		

5列車 岸川高等学校鉄道研究部（KRC）（後書き）

珍しく連続投稿です。今後連続投稿は恐らくないと想いますが、読んでくれる人には感謝。 読

6列車 行徧い娘

部室の窓を割るほど絶叫が5秒間続いた。「マジ。ていうかふつうそういう入って北星ほくせいとかに行かされるんじゃないの。」

「行かなかつたんだろ。あすこは完全な進学校だし。」

「そりやあ置いといて、なんでそう・・・つてさひき声こゑったか。」

「でも、ナガシイつてそういう風に見えないよね。」

「いや、あの性格でそう見える方がすごいと思う。」

「もうその話やめればいいじゃないです。同じ部員なんですから。そういう田で見ない方がいいですよ。」

楠くすのきがこの話を辞めさせてからはいつもと同じバカ騒ぎに戻った。なお、この部活のクオリティーはバカ騒ぎにある。

その頃運動場のほうでは・・・。

「友紀ゆきはソフト部でしょ。私もソフト部に入ろうつかな。」

「そう。留萌るもいは入ろうつて思つてるんだ。木ノ本きのもとは。」

「えつ。まだ迷つてるけど・・・毎日練習はきついなあ。」

「おい。中学のときだつてそうだら。だいたい運動部なら毎日練習しないとダメでしょ。」

「榛名はるなが言いたいのは中学の途中から部活来なくなつてたし、続けられるかどうか不安つてことでしょ。」

「それもあるけど・・・。」

(入るか入らないかは別として一度鉄研部も見に行つてみるかな。

)
ソフト部が練習する風景はもはや白黒でしか映つていない。色づいて見えていたのはオープンキャンパスで鉄研てつけんがやつていたあの展示だつた。ただ、女の子が鉄研てつけんに入つていのだろうか・・・。その口論こうろんが続いていた。

「永島。ノートやつてきたか。」

「昨日言つたじゃん。やる気ないって。」

「いや、いちばん最初ぐらいはやつといたほうがいいって。1ヶ月くらいやってゴールデンウイークのあたりから面倒になりましたって言えば通るつて。多分お前だけだぜ。1日だからやってないっていつのは。」

「・・・」

ちょっと心配になつたが、それでもなかつた。逆にやつてある人のほうが珍しかつたぐらいだつた。

「出して損じゃないのか。宿毛。」

「いや。損とは思つてない。でもあれやるのは骨がいりつてことは分かつた。書くスピード速い俺でも2時間はかかつたぜ。さすがに90行はきついなあ。」

「そんなこと言わないで。よけい痛みがひどくなる。」

その放課後。

(鉄研かあ。)

壁に貼り付けてあるポスターを見てふと思つ。そう言えば岸川に来てから鉄研のこと以外正直考えたことがない気がする。

(女の子でも見に行つていいんだ・・・よし。)

決心をきめてポスターが指示する部室のあるところまで行つてみることにした。だが、体育館のところまで来て足が止まる。ここに来るとバスケット部の目がある。鉄研を見に来たと思われたくないといつのも少しある。

すると、今来た方向から一人走つてくる人が見えた。矢の「」とく自分の前を通り過ぎて、ドアノブに手をかけた。

(鉄研部員・・・・)

その人からは何かと自分と同類のような気配がする。思い切つて声をかけてみた。

「ねえ。君、鉄研部員。」

顔をこぢらに向ける。

「そうだよ。・・・見学に来たの。」

とりあえずここはないと返事をする。そうでなければここに来た意味がない

「そう。じゃあ、昇降口で靴替えてくれば。そうすれば、ダイレクトで帰れるから。」

「・・・分かった。替えてくるけど、私部室の場所分かんないんだけど。」

「分かつた。戻ってくるまで待ってるよ。」

待たせては悪いと思いすぐに皮靴に替えて戻った。戻るとさつきの人が約束どおり待っている。その後はその人に促され、靴をスリッパに替えて、バスケット部の隣を通ってステージ裏の通路を通り階段を上がる。左側のドアに手をかけて開けようとすると鍵がかかっている。

「開けんの面倒くせえなあ。」

独り言を言って、その場に座つた。しばらく立つたままでいたが、「ねえ。カギ取りに行かなくていいの。」

「そのうち先輩が来るって。それまでこのままでいいよ。」
するとその先輩が来た。先輩もまた面倒くさいと言つてその場に座る。次の人もそうだ。誰か取りに行く人はいないのだろうか。すると下から怒った声がする。その声を聞くと先輩の一人が腰を上げて、ドアを開けた。

部室内に入ると携帯電話使い放題。同じ一年生と思われる人は木の棚のほうから車両を取りだして、机の上に置かれているモジュールで遊び始め、他の人は携帯電話をいじるかPFPでゲームをし始める。

「よーす。皆。」

後ろからすごく大きな声だ。ただ、今後ろから入つて来た人は男子ではない。女子の声だ。

「おお、新入部員。これでナガシイとコウタンと合わせて3人目かあ。」

「えっ、マジ。」

「サヤ先輩今気付いたんですか。」

「しょうがねえだろ。こいつはスゲエ鈍感なんだから。」

「まだ部員になるとか限らないです。今日は部活見学に来ただけみたいですから。」

「へえ。でもうれしいよ。名前なんて言ひの。」

「木ノ本榛名です。」

「榛名ちゃんかあ。で、ちなみに榛名ちゃん電車好き。」

「・・・まあ、少しさ。」

「へえ。あたしは電車全く分からぬけどよろしく。善知鳥茉衣よ。それで、そこでゲームやつてるのがこの部活の部長の北斎院大智で、奥で携帯いじつてるのが綾瀬健斗で、もう一人携帯いじつてるのが・・・。ねえ、サヤ。ハクタカつて名前なんだっけ。」

「3年生分かってて2年生分かってないってなんですか。鷹倉俊也です。」

少々あきれ気味になつてるのは分かる。

「それで、そこで遊んだるのが、同じ1年生の永島・・・。」

「智暉です。」

「そう。智暉君だ。」

（なんてハイテンションな部活だよ・・・。）

「まあ、部員は後2人いるんだけどねえ。今日ナヨロンとアヤノンとコウタンはどうした。」

「ナヨロンは補修。」

まずアヤケン先輩が答える。それに続けてハクタカ先輩が、

「絢乃是日真。」

と答えた。

「じゃあ、来るつていうことだね。」

「佐久間は帰つたと思います。」

「帰つたつて。面白いのに帰るなんて本当にやなやつだな。」

「まったくだ。この部活に来なくて何が面白い。」

「

「そこまでいう人は珍しく稀だと思います。」「そうか。」

「ぼ・・・僕の場合は家でも十分楽しいですけど。」

「それはそうだろうな。」

「振り向いてみるとそこにいたのはナヨロン先輩だ。」

「あれ、ナヨロン補修じゃないの。」

「補修だけど、その道具ここに忘れてったみたいで探しに来ただけ。」

「多分、これだろ。はい。早くしないと補修に遅れるぜ。」

サヤ先輩がその補修道具をナヨロン先輩に手渡す。

「大丈夫。もう間に合うとか思つてないから。後、これサンキューな。」

その後楠先輩も合流。僕は昨日と同じ6時くらいまで遊ぶ。6時になると時間だと書いて帰らうとした。見学に来た木ノ本もほぼ同時に帰ると言つた。

部室を出て、足早に階段を下りる。

「永島君。ちょっといい。」

まだ部室のドアの前に立つている木ノ本に止められる。

「いいけど、何。」

「私つて・・・鉄研に入つてもいいと思つ。」

（なんじやそりや。）

今回からの登場人物

木ノ本 榛名	きのもはるな	誕生日	8月13日	血液型	O型	身長	160cm
室蘭友紀	むろらん ゆき	誕生日	7月1日	血液型	A型	身長	162cm
留萌さくら	るもい	誕生日	7月20日	血液型	A型	身長	157cm

6列車 行徳い娘（後書き）

「ういう感覺つて書きづらい・・・。
思い切って女子鉄も出してみました。」

7列車 またまた新人

いきなりそう聞かれても・・・。僕には入ればいいじゃんと答え
るしかない。

「入ろうと思つてゐるなら、入ればいいじゃん。」

「でも、私女の子だよ。女の子が鉄研てつけんに入るつてなんか変じゃない。」

「変じやないだろ。先輩の中でも女子いたじゃん。」

「あの2人は違う。マニアじゃない。・・・。の人たちは旅行がで
きるからこの部活に入つたつて言つてたじゃん。でも私は入るなら
そんな理由で鉄研てつけんに入らない。私は言つちやえはマニアなの。」

「ならなおさら・・・。」

「でも、女の子が鉄研てつけんとかそういう部活に入つていいいのかつて。」

一度降りた階段をまた上る。

「そんなの関係ないよ。なんに興味持きのもととつが、どんな部活に入ろう
がそれはその人の自由だろ。木ノ本きのもとが好きなようにすればいい。」

「・・・。」

「もし入りたくないなつて思つたら、中学で入つてた部活にでも行
けばいいじゃん。もちろん、その部活が自分にとつて楽しければの
話だけだ。」

今度は上つた階段を下りる。

「永島君。ありがとう。よつやつとどうすればいいか分かつたよ。」

「そう。んじやあサイナラ。」

階段を下りてさつきの勢いで帰つていった。ステージの向こう側に
チラツとその姿を捉えて、

(なんに興味持とつがその人の自由か。)

翌日。

「蘭らん。ちょっといい。」

「何。木ノ本きのもと。入りたい部活でも決まつた。」

「うん。私鉄研はいる。」

「……やつぱり。そうだよね。ソフト部来たって木ノ本にはきついだけだもんね。」

「まあね。そういうえば、さくらはびいりあるって。」「留萌^{るもい}はソフト部入るだつて。もあるもいを辞めて鉄研^{てつけん}に行きそつなところはあるけどね。」

「・・・。」

しばらく友達の室蘭友紀を見つめた。

「どうした。あたしの顔になんかついてる。」

「ううん。なんか蘭はこうなること分かつてたのかなあって。」

「分かつたかあ。分かつてたらあたしは神だね。・・・でも、そうなるのかなあ。木ノ本中学^{きのもと}に入つてからだんだん元気がなくなつてきたじやん。だから木ノ本^{きのもと}が好きな鉄道でどうにかかるかなあってね。」

「やつぱり分かつてたじやん。」

「いや、でも女子の入る部活^{ぶがく}じゃないって敬遠^{けいえん}するとは思つてたけどね。最初はマジで敬遠してたし・・・。」

「途中経過はダメダメでも結果オーライだろ。」

「だな。・・・鉄研^{てつけん}に入るからには楽しんでこいよ。そこでいい彼氏^{かれい}とかもできるだらうし。」

「さあそれはどうかな。」

「まさか、もういるとか。」

「えつ・・・。い・・・今はいな『よ。』」

「まあ今はそんな話^{ばなし}でもいいか。」

話は授業によりここで中断にされた。でも伝えたいことはちゃんとと伝わっているだろう。

その後木ノ本はもう一人の親友留萌^{るもい}さくらにも鉄研^{てつけん}に入るということを伝え、同日^ひ部活登録届^{とつきど}を提出した。

その頃^{ごろ}5組では・・・。

「永島^{ながしま}。今日は出しどいたほうがよかつたんじゃないのか。」

「確かにそうかもな。でもどんな奴でも続いて1か月だろ。早い奴は三日坊主で終わるにきまつてる。」

「お前の場合はやらずじまいだもんな。」

「だつてやりたくないもん。あんなのやるくらいなら家でずっと模型いじつてるほうが楽しい。俺がここに来た理由は・・・。」

「鉄研^{てつけん}やるためにであつて、勉強は一の次だろ。それは分かつてるとど、出さなかつたやつお前だけみたいだつたから絶対ホームルームの時にたたかれるぜ。」

「たたかれようがどうつてことねえよ。ていつかそれで定期テスト俺の上に行つてくれるやつがいれば俺にとつては大歓迎だけだな。」

「それは、俺か。それとも、また未知の人間か。」

「できれば、お前。」

「ないな。お前の上あきらめたわけじゃないけど、絶望的だと思つ。」

「宿毛^{すくも}の言つたことは当たつた。」

「永島^{ながしま}。お前だけだぞ。ノート3ページ出してないのは、お前はできるんだからこれやつてもひとつ上狙うべきだ。」

(狙い気ないのに。)

「はい。じゃあ、さらっとやつて持つて持つてきます。」

とか、適当に返事をしておいた。

「あれ言つたら余計ヤバいんじやないか。」

「ヤバいな。でも出す気はない。死ぬから。」

「その死ぬつていうのは当たつてるな。俺もう9ページやつて出してるんだけど、あの9ページだけでもしんどいって思つた。あれは永島^{ながしま}の言つとおり続く人でも1か月だと思つ。」

「だろ。やらないでもそれが伝わつてくるんだから異常だつて。それならノート代を払わずに自分の小遣いにしたほうがよっぽど賢い。」

（永島^{ながしま}にとつてはそれが賢い選択なんだな。）

「つうか宿毛^{すくも}はあれやり続けるの。」

「あれ、1冊終わるまではな。それ以降はやれなし。つづかやらないと思う。」

「やあ。んじゃあ。俺今日も鉄研やつてくれから。」

「おひ。じゃあな。」

その後ろ姿を見送っている間

(永島のやつ。鉄研あるつていつ口だけ元気だな。坂口と一緒にやなくなつたからか。いや。そんなことあまり首シッコまないほうがいいか。あいつの選んだ道だし。)

その頃宗谷学園では・・・、

「萌ちゃん。今日何か部活見てくる。」

「それだつたら綾だけで行けば。私情報部に入る氣もないし。」
荷物をまとめて、カバンを背負う。すると、すたすた昇降口のほうへ歩いて行った。その後ろ姿を磯部と端岡が見送る。

「萌ちゃんどうじけやつたんだろう。情報部にも愛想つかしつしかつたのかなあ。」

「そうじゃないの。」

「ナガシイ君と一緒にじゃないから。」

「それかなあ。あたしはもっと別な理由だと想うナビ。」

「例えば。」

「・・・。すぐには思いつかないつて。萌の考えるパターンって永島君でないと分かんないくらいだと想つ。」

「そこまでかなあ。」

「そこまでじゃない。つか話ズレてる。あたしが思うにもう部活には入りたくないんじゃないの。なんかに専念したいつていうのかなあ。そんなこと読み取れるんだよねえ。」

「なんかに専念したいつて。何に専念する気よ。ナガシイ君との恋愛。」

「それじゃないと思う。永島君のことほそっちのナジやないのは分かるんだけど・・・。」

(私つてこれからどうすればいいの。ナガシイと同じ進路に行くた

めには観光系の専門学校がなんかよねえ。でも、どの学校に行けばいいの。それが全然分かんない。少なくとも浜松にあるつていう国際観光と大原はなしね。あんなところ言つたつてろくなものにはなれない。なんかナガシイには知られたくないし……。どうすれば……。」

またその日の放課後。鉄研の部室にさらに3人が押し掛けた。そのままの3人は全員中学生で名前は背が高い順に諫早轟輝、空河大樹、朝風琢哉だそうだ。

「じゃあ、あだ名はイサタン、ソラタン、アサタンでいいね。」

「えつ。それはどう・・。」

「新入部員に拒否権はない。」

「ナヨロン先輩が言つていた強制的といつのはこうこうとか。

「で、みんな何に詳しい。」

「僕は模型鉄ですから、それなりに電車のことは分かつてますけど。

「まず諫早が口を開いた。それに続いて、空河がディーゼルに詳しいと言ひ、朝風は寝台特急に詳しいと言つた。

「みんなそれぞれ詳しいものがあるんだな。」

木ノ本が傍らでつぶやいた。

「なんだ。自分には詳しいものはありませんみたいな言い方してること。」

「今はね。昔は寝台特急とか新幹線とかはだいたい分かつてたんだけどね。小学校の3年生くらいになつた時から女の子がこれに興味持つていいのかなつて考え始めてからはどんどん忘れてつて、今分かるのは新幹線の形式か特急の名前だけ。」

「まあ鉄研に入つて新幹線が分かんないんじや絶望的だからな。」

「何。ナガシイ。新幹線分かつてなきや絶望的か。」

会話を聞いていた善知鳥先輩が自分の頭に手を置いた。そして、強く握る。

「いや、そういう意味じやなくて、0系とか「こだま」とか。それ

ぐらいは分かつてた方がいいってことです。

「ごめんね、ナガシイ。あたしには〇系も「こだま」も分かんないから。」

「いやそれでも「こだま」、「ひかり」、「のぞみ」くらいは分かつてた方がいいですよ。日本人として。」

「何。ハルナンもそう思つてるのか。じゃあ、「こだま」とか分かつてなきや日本人失格つてこと。」

「まあ、簡単に言えば・・・。」

「言つちやうの。」

僕はこう答えたが、先輩たち、特に3年生は当然といつよつな顔をしていた。

「・・・まあ言われてもしようがないとは思つてるけどね。膳所さんや青木さんにもそう言われたからなあ。でもね、覚えられれば苦労しないわけよ。どうやつたらナコロンみたいにオタク化できるか分かんない。」

「おい。オタクって言つたオタクって。少なくともマニアの領域で止めといてくれない。」

「だつてナヨロン完全にオタクじやん。S^{エル}のボイラーノ形とかが違うからこれはなんとかつていうことふつうの人間が解るか。」

「それはお前の出してる例がマニアックすぎるだけ。いくら電車知らない人間でも1964年10月1日に東海道新幹線^{とうかいじょうしんかんせん}東京→新大阪^{しんおおさか}間^{かん}515.4キロ^{メートル}が開業したことくらいは分かるだろ。」

今度はアヤケン先輩が口をはさむ。

「あのう。そこのなんていうか分かんない先輩。いくらなんでも総延長^{いざはや}は分かんないって。」

「少なくとも、1964年10月1日に東海道新幹線^{とうかいじょうしんかんせん}東京→新大阪間が「ひかり」で3時間。「こだま」で4時間になつたつていうは知つとくべきでしょ。」

「所要時間^{しょようじかん}なんてド素人が解るかよ。だつたらまだ総延長のほうが

ハードル低いって。」

「アヤケン先輩も諫早もやめろよ。1964年10月1日までは一

般常識としてその先は2人ともマニアックだ。」

木ノ本が止めに入る。

「だから、開業当時は最高速度210km/hから始めたって言った方が分かりやすいだろ。」

「やめんか。アヤケンと諫早が話に入ったから話がこじれるだろ。だから・・・」

「サヤ先輩まで辞めてください。余計話がややこしくなります。」

僕が止めに入つてようやくと話が収まった。その後はまたまた電車の話で持ちきりにはならず、面白話で持ちきり。6時になるまで部室でバカ騒ぎ。木ノ本の話では先輩達は7時までバカ騒ぎらしい。でも、その時間までこの状態が続いても暇じゃないのはすぐに想像できる。

今回からの登場人物

端岡夏紀	誕生日	2月21日	血液型	O型	身長	164cm
磯部綾	誕生日	11月3日	血液型	A型	身長	147cm
諫早轟輝	誕生日	11月17日	血液型	O型	身長	151cm
空河大樹	誕生日	2月10日	血液型	O型	身長	151cm
朝風琢哉	誕生日	5月8日	血液型	AB型	身長	147cm

7列車　またまた新入（後書き）

このやり取りって知ってる人でないとウケないかなあ・・・。

8列車 気持ち 決定

そのまた翌日。

「結局今日も出さなかつたんだな。」

「やる気ない奴のやる気を底上げしてやつたつて無駄。ともかく俺にはやる気はない。何と言われようと絶対やらない。」

「はいはー・・・・。」

「何。」

「このどじうずつと思つていたことを永島に打ち明けてみた。ながしま

「永島。お前寂しくないのか。」

「えつ。」

「なんか知つてゐから余計にいつ感じるのはかなあ。お前を見ると今のお前より中学の時のお前がもつとイキイキしてた気がする。」

「・・・・。」

「今からこつものお前になつてつていつのは無理つていつのは分かつてゐ。やつしてくれたのはあいつだつていつの分かつてゐけど、元気がないお前はお前らしくない。」

「・・・・。」

「俺思つてたけど、お前はあいつのことが好きなんだろ。今からでも遅くない。あつて気持ちを確認しあつだけでも自分の気持ちがもつと落ち着けるんじやないかつて。」

「・・・・。」

「ほんなこと言いたくないけど、何か言つてくれよ。ずっと黙つてるつてお前らしくないから。」

「気持ちだけなら確認し合つたかもな。卒業式の時に。」

「・・・・なんだ。それなら。」

「寂しいつていうのは当たつてるかもな。いつも話してたやつが今はいないんだから。」

「・・・・。」

しばらく机を挟んだ状態でいる。

「永島。^{ながしま}俺でもいいか。」

その言葉で顔を上げた。

「俺にお前の電車の知識ぶつけてくれ。俺電車のことはわかんないけど、覚えることだつたらお前にも負けない。お前が持つてゐる鉄道知識を俺にぶつけて・・・もつと言つちやえれば俺をあいつと思つてくれて構わない。それぐらいの気持ちで俺と話してくれ。そのほうが断然お前らしい。」

(宿毛。)

「なあ。頼む。暗いお前は正直見たくないんだ。」

「・・・悪いけど、それはできない。^{もえ}半分萌だからできつたつてところもある。それをお前が再現しようとしたつて無理だ。^{すくも}宿毛に電車のことは覚えられない。」

「なんでだよ。」

「じゃあ、聞くけどお前東海道新幹線がどつかりどいまで走つてゐるかわかるのか。」

「そ・・・それは。」

「最低限今この段階でその話ができる」と・・・。

「決まつたわけじゃない。今からでも間に合つ。俺がそのこと全力で覚えれば一日で十分だ。掘り込んだところまで・・・。」

「だから無理だつて言つてるだろ。その知識は萌だから習得できたんだ。いくら頭がいいからつて。お前の頭はそういう風にできてない。^{すくも}宿毛は・・・お前はいつもみたいにしてくれればいい。それだけでいい。」

「永島・・・。」

「自分で言つのもなんだけど、なんかこれだけで俺たちは終わらない気がする。今元気が少しいのは我慢の時だと思つ。」

「・・・。」

「分かつた。そんなに簡単に終わらない来いつていうのは俺もうすうす感じてる。・・・でも・・・どうしても我慢しきれなくな

つたら俺に言えよ。なんでも受け止めてあげるからな。」

「宿毛……。ありがとな。分かった。どうしてもそなつたらお前に鉄道知識いっぱいぶつけるからな。」

「はっ。ぶつけるものは悩みじやなくてそれかよ。」

「さつきそうしてくれつて言つたじゃん。」

「・・・。そうだつたな。」

その日の放課後。

「今日また新入部員が来たぞ。」

今日は一段とテンションの高い善知鳥先輩である。

「また新入部員かよ。今年は善知鳥が言つた通りブレイクしたな。」

「さあ、新人入つて来い。」

そう言われてはいつてきた人は・・・。木ノ本はその顔を見ると、

「あつ、箕島君。」

「えつ。木ノ本さん。」

「新入部員つて箕島君だつたんだ。」

その会話を聞いている善知鳥先輩の目は明らかに光っている。

「何ハルナン。まさかハルナンの彼氏だつた。」

「そんなんじやありません。同じ中学同じクラスだつた人です。」

「なんだ。つまんないの一。」

「はい。そういうこと言わない。」

「まあいいわ。それより今日はもう一人部員が・・・。何勝手に入

つてるんだよ。」

善知鳥先輩がそう言つたとき全員その人の存在に気付いた。

「何か入つてきたし。」

「もの扱いしないでください。」

「いや。したくなる。」

「はい。サヤもそういうこと言わない。」

「とりあえずまずは名前だけ言つてくれるか。」

「1年4組の箕島健太です。よろしくお願ひします。」

「1年7組。醒ヶ井瑛介です。よろしくお願ひします。」

「たら俺に言えよ。なんでも受け止めてあげるからな。」

「宿毛……。ありがとな。分かった。どうしてもそなつたらお前に鉄道知識いっぱいぶつけるからな。」

「あだ名はミツシイ、サメちゃんでいいよね。考えるの面倒だし。」「そんな安易でいいのかよ。」

「その前に先輩。サメちゃんつていうのはやめてください。」

「何。文句もあるの。」

「・・・。いえ、ありません。」

善知鳥先輩は醒ヶ井の文句を人にらみで退けると今度は僕たちの紹介に入った。

「こつちが鉄研部員。」

と言つてから人数を数えて、

「いなのはユウタンだけか。まあいつか。この部活の天然部長のサヤとモジユールデザイナーのアヤケンとマニアのナヨロン。北陸大好きのハクタカとその人大・・・。」

「それ以上何も言わないでください。」

そう言わせまいと楠先輩がその口をふさぐ。

「ふはあ。分かつた。じゃあ、言い方変える。鉄研のホームヘルパー・アヤノン。後は鉄研一お調子者の1年生ナガシイと1年生の紅一点ハルナンとあんまり部活に来ない背の高いユウタン。これで全員よ。」

「・・・。」

「だから、善知鳥先輩のそのハイテンション差で1年生がヒイテますつて。」

「じゃあどうすればいいのよ。あたしからこのテンション取つたら何も残らないんだからね。」

「それはよく分かつてますけど・・・。」

「分かつてるならそれでいいじゃん。」

そのやり取りを見ていた箕島が、

「なあ、木ノ本さん。きのもとこの部活つていつもこんな感じなのか。」

「こんな感じだよ。まあ、1年生の中にもそういう人いるけど。」

その人に目を向けて、誰かということを言ひ。

「納得。」

そういうと同時に心の中で思つ」とが一つあった。

(部活内でのあだ名がナガシイって言つてたな。俺と同じ感覚でつけてあるとすれば、二つの名字は永島か。まさかとは思ひナビ、永島つてあれじやないよな。)

「普段からこいつ感じなんだろ? ナビな。」

「普段からねえ・・・。」

(これでもしあれだつたら驚きだぞ。)

しばらく先輩たちと話していくと部室のドアがまた開いた。

「おお、イサタン。」

「手を上げる。」

諫早は手で拳銃の形を作つてあからさまにこいつ言つた。それに乗せられて手を挙げる人は・・・。

「うわあ。お前ら手あげないと撃たれるぞ。」

「そこまでじゃないだろ。諫早が作つてるのは指拳銃。弾丸が出てくるわけないじゃん。」

「サヤ先輩。死んでください。」

どこから取り出したのだろうか。諫早が手にしていたものがこいつの間にか本物の拳銃になつている。

「あーっ、バカやめる。」

「そこまで驚かないでください。エアガンなんだから。」

「そんなの学校に持ち込むんじゃない。あぶねえから鞄中しまつとけ。」

「諫早・・・。お前休日とかになつたら山に分け入つてサバゲーでもやつてるのか。」

「そんなのやつてしませんよ。休日は家で自分の模型いじつてますか

「ら。」
諫早はエアガンをかばんにしまいながら言つ。

「・・・。」

続いて空河と朝風が来て、中学生全員がそろつ。

「諫早。お前本当にエアガン抜いたのか。」

「ああ。抜いた。サヤさんの反応が面白かったけど。

「イサタン。後で覚えとけよ。」

「はーい。ちゃんと忘れまーす。」

「こういう部活でいいのだろうか。でも、じつにこの部活だからいいのだろう。」

それから数日が過ぎていき、4月20日。部活登録のあった新入

部員は僕を含め8人。鉄研部は全員で14人となつた。

これから岸川学園鉄道研究部（略KRC）の今期の活動が本格化していくのだ。

今回からの登場人物

箕島健太	誕生日	4月5日	血液型	A型	身長	159cm
醒ヶ井瑛介	誕生日	2月21日	血液型	O型	身長	165cm

8列車 気持ち 決定（後書き）

このところ連続投稿。あー死ぬ。

とまあようやつとここまできました。そういうれば舞台設定していく
せんでしたが、この物語2008年スタートです。

ということは・・・なんですよねえ。

これからこの先の展開を考えるためにまた不定期になるかもしま
せんが、読んでくれる人には感謝。

9 列車 基本事項

4月24日。部活決定の日から4日。クラスの人ともなじんで、次はという段階。これからは部活の先輩やその仲間、高校生活にない番である。その一環と言つていいのかはわからないが、鉄研部員1年生は5組に集合して昼食をとっている。

田も浅いことだし、全員自分たちの話になるのは当然のことだろうか。みんなのことは少しでもわかつておく必要がある。

「永島は何で電車が好きになつたわけ。」

僕の右隣に座つている木ノ本^{きのもと}が話しかけてきた。

「うーん・・・。なんで、好きになつたか。」

「そうそう。だつてここにいるみんなは電車のことが好きだから入部したようなもんでしょう。だつたら知りたいじゃん。その理由。」

「それだったら、木ノ本^{きのもと}が電車好きな理由のほうが聞きたいなあ。これには全員興味を示した。木ノ本^{きのもと}はちょっと話しづらいという顔をしたが、

「お母さんに憧れたから。」

と答えた。

「へえ。木ノ本の母さんつて運転手みたいなことやつてるの。」

「うん。JRの在来線の運転手やつてる。よくそれ見にお父さんが連れてつてくれたんだ。その時から電車のこと好きになつた。」

「へえ。」

「で、永島^{ながしま}。質問には答えたんだし、私の質問にも答えてよ。」

「ああ。・・・自分でもよくわかんないんだよなあ。それ。」

「えつ、何かきっかけあるでしょ。それとも物心ついた時から好きなわけ。」

「いや、そうじゃないんだけど・・・。いつ、どのタイミングで好きになつたかわからないんだよなあ。「パノラマスーパー」見たときからか、100系を見たときからか。」

「「パノラマスーパー」はいつ見たんだよ。」

「多分、幼稚園の時。よく兄ちゃんに連れられて100系見に行つた時も幼稚園の時だつたから。」

「なるほどねえ。子供の記憶だし、あいまいになるよな。佐久間は何で好きなの。」

「なんことしらねえよ。いつの間にか好きだつたんだから。」

「箕島は。」

「俺は、こいついう部活もいいなあつて思つて入つただけだから。」

「醒ヶ井は。」

「モジュールとか作れるつて言つてたじやん。だから楽しそうだなつて。」

全員に目的はあるそうだ。

「おーい、ナガシイ。」

ドアのほうから大きな声が聞こえた。一様にその方向を見てみると善知鳥先輩が立っていた。

「なんですか。」

「今日、アド先生が集合つて言つてたから、それ伝えに来た。」

「あの、それもう全員知つてますけど。」

「・・・ならいいや。全員こいよ。」

とだけ言つて、自分の教室のほうへ走つていった。

1年生も交えた今季最初の部活動。今までと同じように部室に集う。今日は何をするのだろうか。

「よーす。諸君。さあみんな運べ。」

善知鳥先輩がみんなに指令を出す。その指令を聞くとすぐに先輩達は嘆いた。それも裏声である。嘆く必要はあるのか。そして、裏声である必要もあるのか。おそらくないだろ。

「じゃあ、1年生は全員外に出て、階段のところに並んで。」

名寄先輩が外に並ぶように促す。今日はどうやら荷物運びらしい。

部室前の階段に醒ヶ井、箕島、木ノ本、僕の順に並ぶ。すると、

上からまず白いケースが大量に運び出されてきた。次はどこに置い

てあるかも分からぬ謎の物体の山。最後はいたるところに指の跡が付いている荷物。ぶつちやけでいうと金属の山。電車のおもちゃやそのレールなど。鉄道研究部に関連するものも含まれている。だが、中には……。

「なあ、なんで卓球ラケットがあるんだ。」

木ノ本きのもとが回ってきた荷物の中にある卓球ラケットを発見する。

「ホントだ。なんに使うんだよ。」

荷物を渡されて、中を見てみる。すぐに見つかったラケットは一つ。だが、よく見てみると一つだけではない。三つある。他に卓球ボールも入っている。本当に何に使うのか分からない。すると上から、

「おーい。そっちにラケットいってない。」

北斎院先輩の声である。

「あつ、来てますけど。」

「ちょっとそれ、必要だから上にまわして。」

「サヤ先輩がラケットの入った箱上にまわして、だつて。」

「なんに使うの、これ。」

「さあ。」

用途不明のままラケットの入った箱を上に戻した。

しばらくの間部室から下ろされる荷物を床に置き続ける。安曇川 安曇川

先生（アド先生）がその荷物をステージ裏にある狭い通路に置いて行く。狭い通路がさらに狭くなる。上からは「ゴミ」とか「あーっ」とかいう声に混じって、掃除機の音や、何か物を動かす音が響いてくる。一方階段のところからは上から運ばれてくる荷物にあだ名をつけて伝言ゲーム状態。もちろん前者の声も後者の声も何の意味もないと思う。

なんだかんだもう18時。その頃にもこの作業は終わりが見えない。醒ヶ井さめいが用事で帰つてからもしばらくはこの状態のままだった。体育館で練習しているバスケット部がランニングするところになると、上から先輩達が大量のゴミ袋を抱えて降りてきた。僕達1年生はそれと入れ替わりに自分の荷物を持って下に下りる。

「そんじゃあ。今日はこれで終わりだから、みんなオツ。」

「サヤ先輩が簡単に締めくくる。」

「で、誰がゴミ袋を捨てに行くか決めたいんだけど・・・。」

「と言つた瞬間に6つあるうちのゴミ袋を2つもって駆けだす人が一人。」

「あつ、ハクタカフライング。」

「鷹倉先輩を追つて善知鳥先輩が。続いて、サヤ先輩がまた2つゴミ袋を持つて走りだそうとすると、

「ちょっと待てよ。それは俺の獲物だ。」

「離せアヤケン。獲物だつたらまだそつちにあるだろ。」

「あつちのはゴミだから。」

「お前ゴミ袋にゴミつて言つてどうすんだよ。ゴミ袋の立場がないだろ。」

「知るか。」

「その頃僕の傍らにいる名寄、楠先輩は・・・。」

「ナヨ先輩。プレゼントです。」

「んじやあいつてくるか。」

「あつ先越された。いい加減離せ。」

「獲物くれるまではなさねえよ。」

「おい、ホモケン離せ。」

「サヤが渡してくれれば離すよ。」

「誰がこれやるか。」

「あのう。楠先輩サヤ先輩達は何やつてるんですか。」

「毎回恒例のゴミ袋争奪レース。詳しいことは後で説明するからち

よつと待つてね。」

すると楠先輩はサヤ先輩が左手で掴んでいるゴミ袋の一つを取つて、さつさと走つていった。それを追うようにしてサヤ先輩がアヤケン先輩を振り切り、アヤケン先輩はそれを追つていった。僕達はいうとただ啞然とした顔で見ていただけである。しばらくすると、毎回恒例ゴミ袋争奪レースに参加してきた先輩達が全員戻つてくる。

「んじゃあ、お約束が終わつたところで全員解散。」

サヤ先輩が息を切らしながら解散命令を出す。解散命令が出された後楠先輩がこう教えてくれた。

「モジユールとか作つてると、そのゴミが出るから毎回ゴミ袋に固めて、サヤ先輩の前に置いとくじやん。それでサヤ先輩がゴミ袋に話しに入ったところでスタートよ。体育館を出て、あっちの2・3年生のチャリ置場のあるところにダストシユートがあるから、そこまでダッシュするの。取られないようにね。それで、取られずにダストシユートにいたら、その人の勝ち。取られたら取つた人の勝ち。」

「うーん。よく解なんいけビ、ゴミ袋持つてダストシユートまで逃げろつてことですよね。」

「そういうこと。面白いから次からやつてみれば。じゃあね。」

「なあ、永島。鉄研つて本当に個性的だな。」

「ハハ、個性的すぎて少しついていけないかもな。」

4月25日。今日もまた部活。9時30分から開始ではあるが、先輩たちは全員パワフルである。北斎院先輩以外は全員集合済みだ。
「善知鳥先輩たち早いですねえ。」
「そうかあ。そんなことより、授業担当誰だか知りたい。」
なんでパワフルという話からこんな話になるのだろう。善知鳥先輩の話方は全く読めない。とはいっても聞かれたことだ。話すのが鉄則だらう。

「えーと、生物の担当が橋本先生で、・・・」

「サッカーボールじやん。サッカーボールつて最悪じやない。授業の教え方とかくそ下手だよ。要点言つだけだし。それだったら教師いらないつていうくらいだから。」

「えつ、サッカーボールつて。」

「だつて、あのメタボ体系。完全にサッカーボールじやん。人にはれながらダイエツトすることをお勧めするよ。」

「善知鳥違うつて。サッカーボールは袋井。」

「袋井。あれは、ラグビーボール体系。腹が出てて、縦に長い。で、
ごめん他は。」

「英語は小林先生で、数学は青梅先生、情報が東中野先生。」

「数学青梅とか最強じゃん。」

「おめえらしいな。青梅先生は指導力あるから。後の小林と東中野
はどうりでもない区分。最悪でもないし、最高でもないってところ
かなあ。」

理数系コースのアヤケン先輩はどうしても青梅先生にあやかりたい
そうだ。

「あとは、国語アド先。社会は四ツ谷だる。」

「何かとすごいな。でも、四ツ谷つて嫌だろ。毎日ノート3ページ
出されるんだから。」

「あつ、確かにそれはちょっと。僕なんか出してませんから。」

「早いなあ。でも、テストとかでいい成績とると特進行けとかつて
うるやくなるぞ。」

「えっ、ナヨロン先輩も言われたんじやないんですか。」

「ああ、言われた。でも、そんなことしたら遊べなくなるからなあ。
」

「どうせ遊び相手いないじゃないか。」

「うつさい。これからできるんだよ。これから。」

するとドアが開いた。見ると木ノ本だった。善知鳥先輩はいまぼく
にしたのと同じ質問をして、ナヨロン先輩とアヤケン先輩はそれを
聞いて楽しんでいる。そうしている間に9時30分になつた。

「はい、みなさんお集まりですね。」

ドアを開けてアド先生が部室の中を覗き込んだ。

「あれ、北斎院君はどうした。」

「サヤだつたら、まだ来てませんけど。」

「部長不在じやあなあ、困ったもんだな。」

と言つてみるとサヤ先輩が息を切らして、部室に飛び込んできた。

「北斎院君。おはよう。」

「ううとアド先生はサヤ先輩の首を後ろからつかむような体制をとつた。

「アド先生。それダメ。やつちやダメ。」

「はいはい。これからは部長が遅れるところとはなによじにしてください。」

すると僕のほうを見て、

「永島君。木ノ本君。^{きのもと}ちょっとそここの木の板とつてくれないかな。」

と頼んだ。いち早く木ノ本^{きのもと}が反応し、白いケースの隣に無理やり押し込んで歩きの板を一枚取つた。木の板は薄いベニヤ版。長方形の形になつていて、木ノ本^{きのもと}がそのべニヤ板をアド先生に渡す。「あと綾瀬君。直線レールの入った箱持つてくれないかなあ。」「へーい。じゃあ、この『ミミ』に植林終わつたら行くから少し待つてちょ。」

その返事を聞くとアド先生は下に来て、と手招きをした。僕たちはそれに促されて、部室から出る。部室から出るとすれ違いに中学生の諫早^{いさはや}と空河^{そらかわ}にあつた。アド先生はその一人にも声をかけて、ステージに降りた。ステージに降りると、僕たちがいつも利用している奥の通路から折りたたみ椅子を取り出してきて、一人勝手に座る。僕たちはその前に思い思いに腰を下ろす。諫早^{いさはや}と空河^{そらかわ}が合流して、数秒経つとアヤケン先輩が緑色の横30cm^{ミリ}くらいある箱を持って下りてきた。アヤケン先輩はその箱を渡してすぐに部室へと戻つていぐ。それを確認してから、

「これがKATO^{カトー}というところから出でているレールです。」

と説明を開始した。アド先生が取り出したものには、当然だが、レールが2本規則正しく並んでいる。そのレールの下にある黒くレールと直角に並んでいるものが枕木。そういえば、今はコンクリートの枕木が主流だということがあつたが、その中で「木じゃないじゃないですか。」とツツ「ミミ」を飛ばしていたことをふと思い出した。

木でなければ、名称は「枕コンクリート」にでもなるのだろうか。

「これはKATOから出ている最も標準的なレールです。これの長さが124mです。KATOのほうはこれを基本にレールの長さが決まっています。例えば、この2分の1のレールは62m。これの2倍のレールは248m。その248mのレールに62m足すと310mという風になります。さらに長さを調整するために64mとかつていう端数レールも出ていますし、このような伸びるレールなどもあります。」

アド先生はまだ箱から出されていない伸びるレールを僕たちに掲示した。このレールには他と違つて真中は枕木ではなくコンクリートをモチーフにした板が取り付けられている。そのレールの上には「78 - 108」と書いてあった。元の長さは78m。最大は108mになるということだろう。

「ただ、このレールはほかのレールより壊れやすいので、慎重に扱ってください。」

直線レールの説明は大体終わつた。今度はカーブレールについての説明。

「これの裏側を見てください。」

アド先生はカーブレールをひっくり返すとその真ん中のあたりを指差した。そこには「R282 - 15。」と文字が浮き上がっている。「これの「R」というのはこのカーブのきつさを表しています。そしてこちらの「15。」というのはこのレールで曲がれる角度を表しています。そして、カーブとカーブの間は33ミリが基本になります。だから、282mの次は315m、その次は348mという風になります。それで、この中に216mのやつがありますが、それは製作には使わないでください。」

説明が終わると今度は箱に入っているレールと2本ずつ僕たちに渡した。

「つなげてください。」

そう指示があった。2本のレールを床に置いて、連結する。中には

空中のまま連結したりする人もいる。連結が完了すると、じょろくそのまままでいた。

「それじゃあ、今度はこれを外してください。」

そう指示が出る。両方のレールに手をかけて引っ張り出す。両方のレールに手をかけて引っ張り出す。だが抜けない。

「このレールは両方に引っ張つても抜けないようになります。だから、この継ぎ田をどちらかに折り曲げるようにして引き抜いてください。エゲージのレールは両方に引っ張つて抜けるやつやこれみたいにどちらかに折り曲げて抜けるタイプもあります。」

説明を受けた後はその通りにぬいていくだけ。これが完了すると後ろに置いてあつたベニヤ板を取り出した。ベニヤ板を床に置いて、レールを3本つなげる。そして、板の上に置き、左右を合わせた。「この板は248m^{ミリ}のレールを3本つなげた長さになつてます。248m^{ミリ}を3本つなげると何ミリだ。計算せい。」

「248×3で、744m^{ミリ}です。」

後ろからナヨロン先輩が覗き込んでいた。

「はい。今名寄君が言つてくれた744m^{ミリ}というのがこの部活のモジュールの基本です。この中にレールが収まるようにしてください。」

その後レールのさらに詳しい説明を受けた後、自分たちで何を作りたいかということを聞かれた。僕としては家にいつぱいある分、何を作りたいかなんて言う欲望はない。だが、ほかの人は駅を作りたいとか山のある風景作りたいとか、川がある風景を作りたいなど意見は様々。その中でも採用されるのはごく一部。今回は山と川の融合と山と駅の融合。後は留置線のある風景を作ることとなつた。

9列車 基本事項（後書き）

だんだん鉄道研究部らしくなってきました。

そういう風になつたとはいっても僕は作り方を知らない。当然一緒に作ることになった木ノ本きのもとも知らない。これでは到底前に進むことはないだらう。

「ナガシイ。何作るの。」

「えつ、留置線のある風景でも作らうかなあつと思つて。」

「そういうことで分からないうことがあつたらアヤケンに聞くのが一番だよ。あいつ器用だし。」

「ああ、はい。そうします。」

「おい、善知鳥。そういうところで俺の仕事を増やすな。まだ、あれ出来てないんだから。ナヨロンにでも頼め。あいつは車両だけだけど何も作れないってわけじゃないから。」

「ナヨロンに頼むところなどがないじゃん。古墳作るつて言い出すかも・・・。」

「そう言つたのはサヤだぞ。それで俺が作つたんじゃないか。結局ごみの一員になつたけどな。」

先輩と話してしたら余計進まなくなる。とりあえず、家に広がつているレイアウトのことを思い出す。だが、家のレイアウトにはこういう風なものはない。自分たちに与えられているのは板3枚だけ。これが家にあるレイアウトみたいになるのだろうか。そう思った。

「まあ、まず配線決めるかあ。」

「そうだな。でも、どうやつて配線すればいいわけ。」

「さつきアド先生がやつてたみたいにやつてけばどうにでもなるだろ。とりあえずポイントと直線レールがあればどうにかなるかあ・・・。あつそれだけじゃどうにもならねえ。ゆるくてもいいけどカーブも必要かあ。」

「ほれ。」

「どう言ひ方かしらべつてこると、

アヤケン先輩がレールを持つてきてくれていた。手に持つているのは248m^{ミリ}レール12本。

「線形が単純ならこれだけで足りる。留置線配置するつていうなら、もうちよつとこの直線レールと道床が片方ないレールと124m^{ミリ}のポイントレール4番とかつていうふざけたやつが加わるから。」

そのレールはふざけているのだろうか。僕たちが探そうという前にアヤケン先輩はそれも探して持つてくれた。さつき言つていたレール。ポイントレールは皆さんお分かりだと思うが、片方道床が欠けているレールというのは見たことがないだろう。見てみるとそのレールは標準の半分くらいの長さで僕たちから見て左側の道床が斜めにカットされている。文字通り片方道床が欠けたレールだ。

「4番ポイントの直線側にこのふざけたレールをつなげて、その片方にR481のカーブを分岐側に組ませる。こうすると両方の線路がつくんだ。もしこの4番ポイントで、道床が欠けてないやつとやると片方ははまつてももう片方ははまらなくなる。だからこんなふざけたレールがあるんだよ。」

さつきから聞いていればアヤケン先輩はそのレールのことをずいぶん迷惑がっている。だけど、その理由は聞いてはいけないことにも思えた。とてもくだらない理由が返つてきそつだからである。

「お前らに必要なレールはこのくらいかなあ。後、その直線レール。道床の色何かに揃えとけよ。その中でも茶色のやつは結構古いのだからあんまりあてにしないほうがいいぜ。」

とだけ言って部室に上がつていった。

アヤケン先輩から渡されたレールを使って配線をする。さつきアド先生が言ったとおりにして、直線レールをつなげていく。248m^{ミリ}の直線レールを3本つなげたところで、一枚目の板の上に置く。すると、ちょうどぴたりとおさまるのだ。もちろんこのことには種も仕掛けもある。

「とりあえずはなつたな。」

木ノ木の隣を見てみるとまだレールが余っている。それもカーブレ

ールとポイントレー。

「お前バカだる。この中に留置線を配置しなきゃ意味ないだろ。これじゃあ、ただレール並べてはい終わりじゃん。」

「知らないよ。大体留置線はそっちに並べるんじゃないの。こっちには余裕が。」

「あるだろバカ。何のためにこの板があるんだよ。こっちには隙間がないんだよ。どこをどうやつたらレールが並べられるんだよ。」
ちなみに今どういう状態でレールが並んでいるかというと、僕のほうはしっかりと板の端を一直線に、木ノ一本のほうはそれに並行して仲良く並んでいる。

しばらくどうすればいいかを考える。もちろん方法はいくらでもある。真ん中に留置線を持つてくる、真ん中に留置線を持つてくる。このうち僕たちがとつた策は真ん中だ。そのため、木ノ一本きのもとが敷設した線路にカーブレールを組み込み、1本レールが入るスペースを作る。次に僕の敷設したほうの1枚目まいめいの終わりにポイントレールを組み込み、留置線につながる線路を作る。2枚目は3本のレールが並んでいる状態のまま右側まで進んで、2枚目終了直前に留置線が終了。3枚目は1枚目の逆バージョン。ポイントレールが組み込まれていないとこだけは1枚目を違うか。その状態で配線が完了した。配線が完了したところで、僕たちのものをアド先生に見てもらう。アド先生のほうは別にいうこともなかつたらしく、配線はこのままでOKということだった。

「よし。じゃあ、ここまで進んだら、野書きをしてください。」

「けがれ。」

「ここのレールの配置をペンかなんかで板に[写]し取ってくださいってことです。わあ、やつて。」

いわれるがままそつやる。レールと板の接着しているところにペンを当てて、レールに沿つて線を引く。そして、全部の線を引き終わったら次は継ぎ目きのめいの部分に今書いた線とは直角に線を引く。これで、どこに継ぎ目が來るのかがわかる。継ぎ目を書くまでが終了したと

ころで、仮置きした線路を板から外す。線路配置が決まったところで次の作業に入る。次の作業とは当然、家などの配置を決めることがある。

「家の位置決めろって言つたつて、わかんないよなあ。ビリビリやつておいていいかわかんないし。」

「こりう時つてどうすればいいんだろう。」

「永島ながしまつて電車に詳しいよなあ。」 こういう方面も詳しくないのか。」

「電車詳しいからつてこれも詳しいなんてこたないよ。」
しばらく考え込む。するとさつきの言葉が思い浮かんだ。

「とこりうわけで、聞きに来たんですけど。」

「はいはい。」

僕たちのモジュールのこりうまで来てもういい、アドバイスをせらう。」

「なるほど、線路配置は決まつたのね。」

そうつぶやくと、近くにあつた家の模型から一つ取り出して、説明を開始した。

「これは、道路の形を想像しながら、建物を配置して組んだ。こういつとこりうはどりうこりう風になつてゐるかなあつとかつてことを想像しながら、家の配置を決めていく。それが難しいなら、先に道路の形を決めちやつたほうがやりやすいよ。」

アヤケン先輩はそう教えてくれた。

アドバイスをもらつたところで、家の配置に取り掛かる。まず道路を決めてからとも言つたが、お互ひ想像力に乏しいわけではない。頭を使つて物を作る。

「ここの道路の感じは線路に沿つてずっと続いてるつてビリ。」
「いいんじやない。それなら、ずっとこちに続けていくでいいじやん。」

「それでもいいけどさあ、ずっと平坦つてなんかやじやない。2枚目だけ丘にしちゃうとか。」

「でも、そんな道路あるのか。それだったらなおさらトンネルかななかだる。」

「それ言つちやつたら、道路がトンネルで並走してゐる鉄道がトンネルじやないつていつとこあるのかよ。私の知つてゐる限りじやないぞ。」

「わかつたよ。じゃあ、2枚目は丘にしだやうでいいか。」「丘にするのはいいけど、それだれが作るんだよ。私汚れるの嫌だからね。」

「汚れるのは俺も嫌だけど、それ言つたらものなんて作れないだろ。だったら、ジャンケンで決めようぜ。」

ジャンケンをやって結果は、

「永島。^{ながしま}お前にかさまとかしてないよなあ。」「

「ジャンケンでどうやつていかさまするんだよ。」

「えつ、簡単じやん。後だしどか、マインドスキャンとか、ジンクスとか。」

「ジンクスはないけど、マインドスキャンって無理だろ。^{ミニアドバイ}千年眼じやないんだから。」

プラノコの歯を発泡スチロールに入れる。前後に動かすとキュー、キューと音を立てる。

「ああ、この音ヤダ。」

「木ノ本、もうちょっと静かにやれないか。」「

「あなたはいいよなあ、耳ふさげて、私はふさげないのよ。ひょひょと変わりなさいよ。」

「ヤダよ。」

「変われ。」

「ヤダ。」

すると楠先輩^{くすのき}がやつてきた。

「あつ、楠先輩^{くすのき}。これ変わつてください。」「

「遠慮しどくね。あたしの専門は物作りじやないから。」「あつさりと断られた。」

次に来た醒ヶ井^{さめがい}は、

「あつ、醒ヶ井^{さめがい}、これ変わって。」

「おへ、いよいよ。」

快く引き受けてくれた。

「醒ヶ井君。こんにちは。」

「こんにちは。ていうか安靈川先生やめてください。今切つてると
かる。」

「こんにちは。ていうか安靈川先生やめてください。今切つてると
ころだから。」

そう言つてゐる間にカット終了。

「これだけなら、俺じゃなくて、自分たちできれよな。おれもこの
音嫌いだから。・・・ん。木ノ本。もしかしてそのためだけに俺に
切らせたのか。」

「うん。思いつきりはまつてくれてありがと。」

何がともあれ、作業が完了したのだ。次は道路の配置だ。

「この発泡をこうやってくと道がふさがるんだよなあ。また切らな
きやダメじやん。」

「おい勘弁してくれよ。また俺に切らせるのか。」

「うん、分かつてる人は分かつてるねえ。」

「分かりたくないんだけど。」

「大丈夫。おれたちも手伝から。だから、醒ヶ井はこっちのここか
ら下を切り出して。俺と木ノ本で、こっちを坂みたいにするから。」

「おい、そつちそんなに入数いらないだろ。」

「気にしない、気にしない。」

「気にするよ。」

と話していると、

「みなさん。12時ですので。お昼にしてください。」
とアド先生から指示があつた。

10列車 製作（後書き）

最初は不定期更新。この頃は毎日更新・・・。
いつかまた不定期更新に戻るかも・・・。
そんなのでも読んでくれる人には感謝。

1.1列車 バスケと走行テスト（前書き）

ストーリー中にある批判はあくまでもストーリーの中だけですのです。
現実にそうじこなことは一切ありません。

1-1列車 バスケと走行テスト

作業は一時中断。部室に戻つて、弁当を食べる。

「ナガシイ、ハルナン、サメちゃん、ミッシィ、イサタン、ソラタ
ン、アサタン。バスケットやらない。」

「おお、面白そうじゃん、やろやろ。」

サヤ先輩がそれに乗る。サヤ先輩に次いで、アヤケン先輩も乗つた。

「おーい、バカタカとアヤノンはやらないのか。」

「バカタカって呼び方やめてください。つうか、いつから僕のあだ
名は変わったんですか。」

「あたしは運動は苦手だからやめときます。一人プレイだつたらし
ますけど。」

「えー、シユートだけ。つまんないじゃん。試合やろつよ。試合。」「
でも、それ下のバスケット部がいなければの話でしょ。」

みしま 箕島みしまが当然の質問をした。

「大丈夫。バスケットは午前中だけ。午後はあたしたちの貸切にな
る。」

弁当を食べ終わつて下に行くと、さつき言つたとおりバスケット部
はいなかつた。

「ほれ、やるぞ。」

体育館のステージから飛び降りて、北の器具庫のほうへ走つていく。
中からボールをつく音がして、善知鳥先輩うとうがドリブルしながら、出
てきた。

「善知鳥先輩。体操服とか持つてきてませんよ。」

「大丈夫。見られたら見られたでじ愛嬌。」

「じゃあ、僕参加します。」

「おお、サメちゃんはすかさず変態を自嘲したぞ。ナガシイたちは
参加しないのか。うまくいけば、女の子のパンツが見れるぞ。」

「そういう釣り方やめろつうの。」

「・・・」

「榛名^{はるな}、参加するなら、あたしの体操服貸すけど。」

「えつ、でも。」

「いひつて。どうせあたしは参加しないんだし。それに、モジュー
ルも作つてないし。」

「・・・じゃあ、私も。」

「じゃあ、ちょっと上来て。ハクタカ。もしのぞきにきたら、頭か
ら飛び降りてよ。」

「のぞかねえよ。」

「ふうん。あたしの時はのぞきに来るのに。」

「それは。お前の着替えてるタイミングが悪いだけだね。」

「ねえ、ナガシイ。本当に参加しない。」

「楽しそうだから、参加します。」

「よーし、4対4でやるか。」

やる人は全員体育館のフローリングに行つてスタンバイする。その姿を見ている人は、

「善知鳥^{よつけの}のやつ。ああいつても中にハーフパンツはいてるよなあ。」

「あれにつられる醒ヶ井^{さめがい}つて。ただの変態なんじやないのか。」

「ああ、ただの変態かもなあ。」

「もう集まってるし。」

「ハルナン。早く、早く。」

「楽しそうなのはいいんだけどなあ。」

「ハクタカ。今日は珍しくのぞきに来なかつたね。」

「だから、のぞいてるんじやなくて、お前の着替えるタイミングが
悪いって言つてるだろ。」

「それ言つたら、ハクタカの来るタイミングが悪いことになる
じゃん。」

「そもそもしれないけど、着替えるタイミングも悪い。」

「ハクタカ言つてるとおかしい。だからバカタカつて言われるん
だよ。」

「いったな。クソアヤ。」

「ナガシイ。バス。」

「いただき。」

「あつ、サヤとるな。」

「申し訳ない。昔バスケットやつてて。」

「少しさ手を緩めろよ。」

「残念。はいスリーポイント。」

10分後。

「つ・・・疲れた。この頃動いてなかつたからな。」

「最後なんか体育苦手な善知鳥にもボールとられてたもんな。」

「うるさい。ああ、暑い。服ぬぎてえ。」

「脱げばいいじゃん。」

「女子がそんなにさらつと脱げばつて言つなよ。」

「サヤ先輩、上から扇風機持つてきますか。」

「ああ、お願ひ。」

「はあ、久しぶりにバスケットやつたなあ。1年生以来だつけ。」

「そつだな。いのたに猪谷さんうとうがいた時以来だな。昔はバスケットがいない

ときは製作そつちのけでよくやつたな。」

「サヤ先輩たちそんなことしてたんですか。」

「ああ、あのときは俺たちも若かつた。」

「若かつたつて。もう年寄りみたいな言い方ですね。」

「人間18になればおじいちゃんの仲間入りすんの。18になると体が言うこと聞かなくなる。」

「サヤ先輩。そんなこと言わないでくださいね。」

「扇風機を持ちに行つた楠先輩くすのきが言つた。」

「だつてそうなるんだからしょづがないだろ。」

「扇風機の前に行つて誰もがよくやることを始める。」

「だから、サヤとるなつて。」

「マジックカード。部長権限を発動。」

「トラップカード。無効を発動。」

「あー、バカたれ。トラップカード。カウンターを発動。

「サイクロン。」

何を始めると思えば・・・。

「おいおい、何こんなところでヒュエルしてるだよ。」

サヤ先輩と善知鳥先輩がそんなことをしている間に扇風機はナヨロノ先輩が占領していた。だが、僕には別のこと思い出していた。萌とよくやつたのだ。カードはほぼそのままでモンスターカードだけ電車にしてやつたことがある。あれについては自分でもよく考えたものだと感心するところがある。

それはさておき。13時45分から作業再開。

「これ、塗料で塗ったほうがいいよ。」

アド先生に言われて上から筆と塗料の缶を持ってくる。この塗料缶の固まつたふたを開けると、中で塗料が固まっていた。カツピカピになつており、乾ききつた土のようにひびが入つている。仕方がないでの、体育館を突つ切つて近くの水道まで歩いていく。水を入れて、筆で押したりすりつぶすようにしながら、水に浸らせていくと塗料が復活。ここまで来てようやつと塗る作業に入った。

発泡スチロールと板の道路と家の部分に塗る作業を施行すると、この先の作業が進まなくなると思ったが大きな間違いだった。塗料は一度塗っただけでは下地が透けてしまうらしい。そのため何べんも塗つて色を濃くする。それが完了すると外に持つて行って、干す。その間塗料の缶にふたをして、筆を洗う。この部活では筆を洗わなかつたら制裁があるという。何ともおかしな風習がある。

筆を洗い終わつてもとの位置に返す。これが終わると次は配置すると決めた家の組み立て。Nゲージの家屋は組み立てられ終わつているものからプラモデルのように自分で組み立てるものまで様々。僕たちが使うと決めたものはジオコレという中の数種類。近郊住宅地の全シリーズを網羅してモジュールに配置することにした。これを箱から出すと、地面と壁など数枚のパーツに分かれている。それ

を組み合わせて、地面となるといつもこなしていい。これをさし終わるときれいな近郊住宅ができる。このころには塗装した板のインク

も乾いており、中で持つてきて、どのよひに置くか仮置きする。

「おーおー、やあ、おはよう。おのづかさん

「醒ヶ井ツツコんだら負けだと思つていいよ。」

「どういう意味だよ。」

「いいじゃん。二年生がやる気あるね。朝一寝起きたのに

۷۰

「工場にでもすればいいだろ。」

「えり、ちゃんと古臭い感じのじれにあるのか。」

「そりだな。

「おい、そつちまうびーこよ。ひがしまだいすくんだよ。そつちば

「たゞ、たゞ意図なしにせんじ。」

「コンビニとか。トラックステーションでもいいんじゃないかな。」

「えー、トラックステーション。」

卷之三

「いいよ、何も思ひつかないし」

「永島君。他を決める前に線路つけちゃつていいよ。まず電気が通

るかどうか確認して。
」

アド先生がレールを取り付けていいといつ。午前中に決めたレールを元通りに直して、幅のある両面テープで張り付けた。レールをつけ終わると、バラストをまく。バラストとはレールの下にひかれている砂利のこと。あれは車輪からかかる重みを少しでも分散させる効果がある。一種のキャタピラなのだ。僕たちの取り扱っているレールは道床という部分があつてその道床の部分がバラストの部分で

ある。まかなくもいいのではあるが、まかないまだと木の板があらわになる。そのために薄くまく必要がある。さつきの両面テープと同じように上からバラスト（カラーパウダー）の入った容器を持ってきて、指でつまみながらまく。地道な作業がツボにもなる。

一枚にバラストをまき終わると板を立てていらないバラストを落とす。滑り台のように駆け下りていったバラストをさらにかき集めて、2枚目に転用。2枚目も同じ作業を行つて余つた分は3枚目に転用。3枚目で余つたバラストはごみを含まないよう容器に戻す。バラストをまき終わると車両の走行試験。順番が逆なのはご愛嬌。とりあえず、走れば今はOKだ。部室にある名鉄「パノラマデラックス」とフィーダー、コントローラー、フィーダー線接続用の線路を持つてきて、試した。

コントローラーのコンセントを差し込み、コントローラーのパワーリットスイッチが点灯したことを確認する。そして持つてきた「パノラマデラックス」を線路上に置いて、ディレクションスイッチを前進に入れた。そして、コントローラーのつまみをゆっくりと回す。電気に反応した「パノラマデラックス」の顔が次第に明るくなる。ライトがついているのだ。そして、ピクッと前に動いた。するとぎこちないがゆっくりと動き出し、僕から見て手前側。板の端の線路を完全に走破した。

今度はディレクションを後進にして、同じように走らせる。こちらも良好。「パノラマデラックス」は順調に走った。

走るということが確認されたら今度はフィーダーをさしている線路を変えてテストする。「パノラマデラックス」もそつちへお引越しして、同じ動作を繰り返した。今度もよく走つたのだが、2枚目と3枚目を越えるところで、急に止まつた。

「あれ、どうかしたの。今までよく走つてたのに。」

見ている全員が異常に気付く。「パノラマデラックス」を覗き込むと、顔がさつきと違つて暗いことに気付いた。電気が行っていないのだ。「パノラマデラックス」を走っていた位置まで後退させると

「ギュイーン」とモーターが動いた。電気はある位置まではいっている。だが、進むとすぐに止まつた。

「これの位置変えてみればいいんじゃないか。」

「いや、それじゃあない。」

今度は「パノラマテラックス」をどかして、走らなくなるといふを検証した。すると、2枚目と3枚目の継ぎ目はジョイナーと呼ばれる部位が一つしかないことに気付いた。

「分かつた。こいつだ。」

2枚目と3枚目を切り離した。切り離し終わると上に行つて、アヤケン先輩に言つた。

「アヤケン先輩。このジョイナーつてどこにありますか。」

「ジョイナー。ああ、レールの入つてる箱から、ジョイナーのついてるレール出して、あーって取り外せばいいよ。」

なぜ「あー」のところだけ裏声だつたのか。それはさておき、レールの入つた箱を探す。レールの入つている箱を見つけたが、なかなかジョイナーのはまつたものに出くわさない。出くわしてもなかなか外れない。だんだん外れないジョイナーにキレたくなつてくる。「あーっ、もう。なんで外れないんだよ、バカたれ。一いつはまつたの出でこいや。あつたら返事しろーつ。」

全部独り言です。

「すげえ。永島がどんどん鉄研色てつけんじやくに染まつてく。」

善知鳥先輩は何か別なところに感心している。

なんとか2つジョイナーのはまつた線路を見つけて、持つているレールとつなげる。そしてすぐに外す。すると本来ジョイナーのはまつているほうにジョイナーがはまる。これで問題は解消だ。

そのレールを下に持つて行つて再びはめる。また走行テストを行うとこの区間もとあるよつになつた。内側の線路も電気が通ることが確認された。

そして時間は16時。今日の作業はここで終了した。

翌日。4月26日。今日もモジュール製作である。今日はほとんど走ることを楽しむだけ。午前中はほぼそれだけで終わり、昼はまたバスケットボール。午後になつて初めて、製作を進めた。今日は2枚目の住宅地づくりである。

「ここも近郊住宅だけだとなんか張り合いないよね。」

「それはないだろ。一枚目で近郊住宅を使つていいじょうそれはできない。どれもこれも同じよつになるからなあ。」

「醒ヶ井さめいつて本当にこれだけだよな。」

「つるさいなあ。」

「あと、変態つていうのもあるよねえ。」

「だまれつつの。」

「まあ、それは置いといで、こいどづする。」

「近郊住宅から田舎に通じるといひだろ。こいこは結構古臭い建物にしどくのがいいんぢゃないか。」

「確かにそれもあるけど、今は田舎から町につながるといひつて大体新しい家が建つてるだろ。反対に近郊住宅よりも近代的なもの建てたほうが効果的かも。」

「何。2階建てとか、3階建てのやつ。」

「そひ。それくらいのほうが自然ぢゃないかつてこと。」

「うーん。」

しばらくどうするか考え込んだ。しかし、何分考へても答えが出そうにないため、

「アヤケン先輩だったらどうするのが一番自然ですか。」

「えつ、自分が思つたとおりにやつてくのが一番いいよ。道路配置が決まつたら何も考へないでやつても何とかなるよ。」

という回答だつた。道路配置が決まるまでは想像力。道路配置が決まつたら自分の勘。このつくり方つて効果的なのだろうか。それともアヤケン先輩だけに通じることなのだろうか。

結局アヤケン先輩が言つたとおりにやつしていくことになつて、古臭い建物を配置。実際あるかどうかは別として、その家の隣。2枚

日始まつてすぐ（1・2）のところに畠を配置。そのあとは一列に家を並べて、反対側の切り出されたところに詰所を配置した。実際のところ、この詰所は郵便局もどきといつ設定となつた。

概略ができたところで、家をベニヤ板に張る作業になつた。模型の家を張る作業はいくらでもあるのだろうが、この部活でとつている方法はストラクチャーの地面のふちに両面テープを張つて張り付ける方式。こうすれば、確実に接着できる。

上から細い両面テープを持ち出して、裏側に張る。縁から反対側の縁まで行くとテープを適当な長さに切る。それを4回繰り返して、仮置きしたところに置いていく。一枚目の建物はすべて決まりたため、一枚目はすぐに完了。3枚目は設置が決まった建物は貼り付けていつた。2枚目使う発泡スチロールと設置する建物を張り付けた。なんかとんとん拍子に進み気味である。

ここまで作業が完了すると醒ヶ井以外は墜落した。僕は中学生のほつの進行状況を見に行つた。

「諫早。どうだ進み具合は。」

「えつ、この山をハゲからモツサモツサにするために植林してゐですよ。」

諫早はアド先生をちらつと見てそう言った。

「なんですか。永島さんもやるんですか。水分たっぷりの山にするために。」

「いや、ただ見に来ただけだよ。ていうか。これ走行テストやつた。」

「あー。やり忘れてた。・・・でも、7000番台（223系 網あら）。」
「千区（ぼしく）のくそつたれだつたらふつうに通りますよ。ゴリゴリやないか。」

「おいおい。それやめてくれよ。」

「俺が一番最初に作ったのもそつたけど、サヤが作った「安曇川」。

顔を上げるとナヨロン先輩の顔があつた。

「あとがわ」と書かれた「安曇川」。

マイクロエース Micro Ace の車両が通らないっていうやつもあるし、テストはしどけ。でないとごみを量産することになるから。」

「あの。その一つ今どうなったんですか。」

「んっ。俺のはちょっと前にジロックピストルで破壊して、サヤのやつは・・・まだ残つてたかなあ。まあ、寮に行けばあるかないかわかるよ。」

「・・・」

「じゃあ、明日7000番台持つてきます。」

「いよ。今調べる。部屋に確か。サヤの際物があつたはず。サヤに貸してもらえ。」

諫早はナヨロン先輩に促されて上に行つた。上ではスピーカー全開で曲を聴いている。今はやつのEPOのとかいつやつだと想つ。

「サヤ先輩。」

「んっ。何。」

「モジュールの走行テストやりたいんですけど。」

「ああ、分かった。俺の貸してやるからちょっと待つて。」

サヤ先輩はそう言つて開拓してはいけないといわれたところのものをどかして、中から車両ケースを取り出した。

「はい、諫早。『ふみさん特急』。」

（間違い方がひどいなあ。）

「ありがとうございます。」

サヤ先輩がくれたのは富士急行の特急「フジサン特急」の模型であつた。それをモジュールに持つて行って走行テストを行う。車両はスマーズに走り出し、つなぎ田にある鉄橋も難なくクリア。植林しそうのよつに思える崖の部分も何の支障もなく通過した。次に線路を変えて、同じようにテスト。車両はまず僕たちが覗き込んでいる側の線路と別れて、奥に進路をとり、つなぎ田で鉄橋を渡る。そしてトンネルに入り手前側の線路と合流する。トンネルの中もさほど支障はないようだ。

「よーし。行け。『フジサン特急』。」

「諫早。いつまでそんな際物走らせてるんだよ。」

「なあ、諫早。やめようぜ。横の富士山が気持ち悪い。」

「フジサン特急」の拒絶反応はナヨロン先輩だけではなかつた。空

河も嫌いのようである。

「気持ち悪すぎて吐き気がする。」

「電車見ただけで吐き気でもすんのかよ。」

「いや、電車は大丈夫。でもこれはダメ。」

イコール好みの問題である。

「確かにそうだな。名寄さんが「際物」つていつた意味もわかる。サヤさんってこうこうもの好きなんだな。」

「そう。サヤこうこうの好きだから。」

「・・・。」

「際物好きで悪かったな。」

目線を後ろに向けるとサヤ先輩が立っていた。いつの間に下に来たのだろう。

「ナヨロンか。俺の際物伝説広げたの。」

「ああ。それがどうかしたか。」

「お・・・お前。」

「ああ、サヤ先輩もナヨロン先輩もなぐり合つんだつたら外に向こうでやつてくださいね。」

「大丈夫。なぐり合つ氣はないから。・・・よし、ナヨロン。上で平和的に話し合おうじゃないか。チャカとか、チャカとか、チャカとか。」

「それ絶対に平和的な話じゃないですよねえ。」

さて、話を進めよう。と言つても今日は終わりまでこんな調子のままであつた。そして一番最後に掃除。楠先輩曰く毎回恒例のごみ袋争奪戦も行われて今日の部活は終わつた。

1-1列車 バスケと走行テスト（後書き）

作者が後ろ向きなのに後ろ向きじゃないってどうですかねえ…。
話は変わりますがこれから先さらに濃くなっていますが、読んで
くれる人には感謝。
自分自身のつて書いているこじょう面白こもの（多分）できてると思
うのでこれからもよろしくお願ひします。

12列車 原則

翌日。4月27日。

「・・・。永島。ながしま 今日めちゃくちゃ疲れてるな。」

「いや、そうでもないよ。確かに休日なかつたけどさあ、意外と楽しいから。」

「へえ。先輩とはもうなじんだの。」

「うーん。なじむというか。部活の先輩「もつ鉄研色に染まつてきた。」とかって言つてたからなあ。」

「本当にその順応性には感心するよ。」

あきれたのと関心とが入り混じつた顔だ。そういう顔をしているのは宿毛すくもである。

「ところで、静岡まで何円かかるか知りたいんだけど。」

僕はこの手のものには詳しくない。といふか知らない。

「1280円。」

佐久間が口をはさんだ。いいところに助け舟がいたものである。

「1280円かあ。ありがと。」

「ていうか、そんなこと聞いてどうすんの。遊びにでも行くの。」

「まあね。」

「それよりも、もつと安く静岡に行く方法があるぜ。」

佐久間がそのあとなんといったかというと、

「それ、法律的にダメだろ。立派な犯罪だぞ。」

これがその言葉に対する宿毛すくもの答こたえだつた。何を言つたかといふところは想像に任せるとしよう。もちろん、いま言つたことは実行してほしくない。

その日の放課後。同じように部室に赴いた。部室の前には醒ヶ井さめがい がいた。もう一つカバンがあつたが誰のものかはわからなかつた。しばらくすると、サヤ先輩と箕島みしま が来て部室を解放した。

中に入つて、製作途中のモジュールを眺めてみる。この2日でだ

いぶ進んだものだ。今日はこれの製作をちょっと進めて終了した。

一方。宗谷学園に入学した萌のほうはとくと、今日は友達と街に出でた。今は帰り列車の中である。ロングシートに肩を並べて、ちょっと前のほうを見てみた。そこは行き止まりになつていて、一人男の子が前を見てはしゃいでいる。

「萌、さつきから笑つてるけど、なんかあつたのか。」「

ずっとニヤニヤしてたのが気になつたらしい。

「えつ、なんでもない。ただ、昔のこと思い出してください。」

黒崎も萌の見ていた方向を見てみる。何を見ていたかはすぐに分かつた。

「にしても、電車の前ではしゃいでる子供を見て思い出し笑いするとはなあ。」

「だつて、なんか笑えない。ああいうところ見てると。」「

「よくわからん。少なくともあたしはあれを見てても笑えない。」「じゃあ、私だけかな。昔の友達みたいだなあつて思うの。」

「へえ。萌の友達って電車好きなのか。」「

(それだから萌は電車に詳しいのか。)

「うん。幼稚園の時からずっと電車のことが好きでさあ。浜松によく新幹線見に行つたり、家で模型で遊んでたり、インターネットで動画をあさつたりとかね。中でも新幹線の100系が一番好きでさあ、連れてかれたときはダダこねて「帰りたくない。」って言つたり、小学校の修学旅行じや自分の座る席に座らずに16号車のドアまで行って東京駅に着く直前までそこにいたりとかしてたからね。」「それ、先生に叱られたよなあ。」

「うん。でも、怒られた後も100系見たさくに復活したりするから。」

「あたし電車のことは全くわかんないけど、その人にとっては特効薬なんだな。だから、ああいう風にしてる人を見ると過去のその人みたいに見えてくるのか。」

「過去のっていう意味じゃないんだけどねえ。今もそういうところ

があるから。」

「その人って成長してるのか。」

「ぜんぜん。大きな子供だよ。でも、そういうところがかわいいんだけどね。」

会話は一呼吸置いたらまた始まった。

「そういえば、宗谷に入学したとき私驚いたわ。世界には同じ顔つきした人が3人いるとかつていうけどさあ、マジでその人に会うとは思わなかつた。」

「誰かと、その人似てるのか。」

「うん、鳥峨家^{とりがや}大希君^{だいき}だつたかなあ。顔つきもそうだけど、声までそつくりだつたんだもん。」

「・・・萌。まさかそれで鳥峨家のこと好きになつたとかつて言わないよなあ。」

「いわないよ。・・・なに、梓^{あずさ}、鳥峨家君のこと好きなの。」

顔が赤くなつた。

「いや、そういう意味じやないけど・・・。」

「へえ。」

「な・・・何か疑わしいことでもあるのかよ。」

「ううん。別に。」

といったとき外を対向列車が通り過ぎた。すると頭を抱えて、「はあ。ここからだとパンタ見えないからダメだよなあ。」

「何。パンタとかつていうやつ見ただけで車両の判別つくの。」

「うん。遠江急行なら菱形だつたら1000系。シングルアームだつたら2000系つていう風に決まつてるから。ちょっと複雑つていえば遠州鉄道のほう。あれは基本1000形は菱形で2000形はシングルだけど、1000形のうちの1001がシングルアームになつてゐるから。モーターしか違わないから紛らわしいんだよねえ。」

「自分の手で菱形とくの字を作つてパンタグラフを再現する。」

「遠州鉄道つて全部同じ車両だろ。あん中にも違はあるのかよ。」

「梓。マニアの前でそう言つたら殺されるよ。全然違つんだから。」

2000形はVVVFインバーターつていう高い音の出るやつだけ
ど1000形はそんなのじゃないもん。それに乗り心地で言つたら
1000形より2000形のほうが上。同じことは遠江急行の20
00系と1000系にも言えることだから。」

「あたしには、そんなこと言われても何もわからん。」

「とりあえず、聞けば分かるって。どんなバカでも。」

「それってさあ。もしわからなかつたら、萌があたしを馬鹿にする
材料になるよなあ。」

「そのつもりはないから安心して、梓。」

この後列車はすぐに駅に停車した。その時になると音に少し耳を傾
けていたが、やはり梓には違ひは分からなかつた。

「何がどう違うの。あたしには全部同じようになんだけど。
「逆にあたしにはなんでみんな同じに聞こえるかわからん。ビリ
いつ聴覚してるか・・・ああ、あとこれもあるか。そう思つ」と。」

梓が少し首を傾けた。

「遠州鉄道つて結構古い車両も持つてるじゃん。」

「持つてゐるじやんつて言われてもあたしにはわからんといつて言つて
るじやん。」

「あれ。一番モーター音つるねこんだよ。あの中でよく寝れるなあ
つて思う。」

「へえ、つるねこんだ。」

「本当につるねこんだよ。時折その電車に乗つてくるんだけどさあ、満
員になつた状態でも西鹿島側のところまでモーター音が聞こえてく
るぐらいだに。」

「いや、だからあたしに・・・。」

「あの中で寝れる神経がおかしいよねえ。一度精神科医とか耳でも
直してくればつて思うくらいよ。」

「何。電車の中で寝ちゃダメなの。」

「梓。電車の中で寝て何が面白いの。電車に乗つたら根気でも起き

てることでしょ。」

「その考え方あたしには理解できない。」

「えつ、何で。これってふつうのことだと・・・。」

「いや、ふつうじやない。ふつうじやない。」

「そりかなあ。」

「おい、自分。その考え方ふつうじやないつて思ったことないのかよ。」

「ないよ。だつて、電車乗つたら携帯いじらない。音楽聞かない。あんまり人と話さない。寝ない。前ずっと見てるは鉄則じやないの。」

「

（どんな五原則だよ。）

ふと前にまた目を向けてみるとやつきの男の子の姿はなかつた。今止まつてゐる小楠おぐすで降りたのだらう。ずっと普通に乗つてゐる萌たちにとつては関係のないことだが、ここでは急行と普通の接続が行われている。ここで終点まで用がない人は急行に、途中駅に用がある人は普通に流れてくれる。しかし、寝過ぎねすぎして急行に終点鹿島まで連れてかれるといつた客はよく見る。自分も4日前にやつてしまつたことだ。

「そういえば、あしたたち浜松はままつから急行に乗つてこなかつたけど、何で急行きゅうこうじゃダメなんだ。急行なら結構早く家につけるじやん。」

「急行はダメ。寝過ぎねすぎると痛い目に合つ。」

「痛い目つて。もしかして、自分もやつちやつたのか。」

「うん。やつちやつたよ。目を開けたらなんか知らない」ところ走つてゐるあつて思つてたらさあ、間もなく終点鹿島ですつて言つてたんだよ。でも2000系に2連ちゃんと乗れたから結果オーライなんだけどねえ。」

（転んでもただじやおきなこやつ。）

4月28日。昼休み。

「ねえ、永島ながしま。N700系の喫煙ルームでバーベキュウとかやつち

やダメかねえ。」

佐久間さくまがネタを振った。思わずふいてしまつ内容だ。

「やつちやダメだろ。」

「でもやつちやいけないとも書いて無いよねえ。」

「確かに書いてないけど、そういうことするやつがいるからじやねえ。」

「なあ、永島ながしま何。喫煙ルームつて。」

木ノ本きのもとから質問が出た。ちょっと予想外だ。

「喫煙ルームつて、N700系エヌナナについてるやつだよ。そこ専用で喫煙ができるんだ。」

すると頭を抱えて、

「ダメだ。この頃離れすぎてたから私の中の情報が古い。なんかいろいろなのどうちやになってる。」

「そのうち思い出すつて。今はいわば我慢の時かなあ。」

その頃先輩たちはといふと、

「行先つてATMエーティーエムでいいんじゃない。」

「うーん。なんか思いつかないもんなあ。じゃあそこにするか。」

「ATMエーティーエムに行つて戻つてくるだけかよ。それだけじゃ能がないな。」

アヤケン先輩が口をはさんだ。

「だから、それだけじゃだめだからKODケイオーディーまで行つて放物線に乗つてグルつて帰つてくれればいいんだよ。NMDエヌエムディーまで。そうすれば時間がそんなにないだろ。」

「それだとまだ時間が余るだろ。大体何時の「ホームライナー」に乗つてくんだよ。つて言つても一本しかないけど。」

ナヨロン先輩は時刻表を取り出して、ざつと田を通した。

「ふつうに無理だな。どつかで暇つぶさないと。」

「じゃあ、SMZエスエムゼットのエスパルスドリームプラザとかどう。あそこ正直言つてみたいって思つてたし。」

「果たして、それに1年生が乗るかだな。」

「1年生が乗るか。そるかか。鉄道好きには少々きつこといふも

あるかもな。移動意外。」

「そんなこと言つてたら旅行なんかできないじゃん。」

「確かにそういうだけだ。」

「まあ、いまそんな話するのよけうぜ。乗るかどうかは別として、乗らないことはないだろ。初めての旅行なんだし。」

「そうだな。後は俺たちがどう味付けするかだもんな。」

「時間は俺に任せろ。善知鳥じやだめだし、アヤケンじやこいつの読み方知らないだろ。」

「なんで俺じやダメなんだよ。」

「サヤは間違えずにこれ読めるのか。」

「うつ。そ・・・それは。」

「だろ。だから俺に任せろ。えーと、全員昼抜きでいいよな。」

「いいわけないだろ。」

さてさて、いつたいどういう旅行になるのだろうか。

今から登場人物

黒崎梓	誕生日	12月12日	血液型	B型	身長	157cm
-----	-----	--------	-----	----	----	-------

12列車 原則（後書き）

こんな5原則ふつう守れない。

13列車 初旅行の工程

4月29日。今日は岸川学園の寮で部活動である。岸川学園の寮（岸川寮）は正門を出て、南に歩いて行く。すると職員駐車場が見えて来る道を左に曲がって、近くにある神社の前を通つてすぐのところにある。この2階はほぼ鉄道研究部の貸し切り状態になつており、中の階段の右側にモジユールなどが保管されており、学習室のほうはほぼ自由に使っていいそうだ。

「えー、今日は5月2日の歓迎旅行にどこに行きたいかってことだけど、どこに行きたい。」

「つで、1年生に聞く必要ないじゃないですか。もつ行き先決まつてるんだから。」

「ナヨロン。ちょっと書いて。」

「サヤ、ATMつて浜松から東だよなあ。」

「ナヨロン。それやばくない。編成に詳しいんだから分かるだろ。ふつじ。」

「うつさい。知つてて言つただけだよ。」

黒板にうねうねした線を一本。それにつながった線を一本。その端に至り豊橋と至り東京と書いた。

「えーと。まずこれで浜松がどこか分かるか。」

「だいたいここじゃない。サヤ合つてるよねえ。」

「合つてるけど、善知鳥が書くなよ。」

一呼吸おいて、

「まず工程を話す。5月2日に浜松駅改札口・・・言つの面倒くせえなあ。ハカグチに6時45分集合。集合したら「休日乗り放題」とかつていう2600円の切符渡して、7時05分に出る「ホームライナー」に乗つて静岡まで行く。そんで、静岡まで行つたら普通でATMまであーつていつて、それから国府津とかいつ・・・。」「国府津な。」

ナヨロン先輩が訂正する。

「それはどっちでもいいから。で、その国府津とかいうところまで着たら御殿場線に乗つてあーって戻つてくる。そんで清水のエスパルスドリームプラザとかいうところであーって休んで、普通であつて帰つてくる。ざつと工程はこんなもん。説明終了。」「にしていいわけないだろ。」

ナヨロン先輩とアヤケン先輩がすかさずツッコんだ。

「えーと、サヤだとまた端折りそうだから、俺から工程言つとく。説明はサヤ先輩からナヨロン先輩に変わつた。

「まず、集合はさつき言った通り6時45分。この時間に集合できなかつたやつはたとえサヤでも置いてく。それで今回の旅行で使う切符は「休日乗り放題きつぱ」とかつていうやつで、旅する。これが2600円。だから当口は2600円忘れるなよ。で改札とおつて一番最初に乗る列車が7時05分発の「ホームライナー 静岡」。それで終点の静岡まで行く。次が8時51分に発車する普通熱海行き・・・。」

「あーつ。」

サヤ先輩と善知鳥先輩が叫んだ。すると、ナヨロン先輩をどつかに連れて行つた。

「しようがない。今度はぼくが説明するか。」

説明のバトンはナヨロン先輩からアヤケン先輩に変わる。

「さつき言ってた8時54分発の熱海^{あたみ}行きに乗つて、終点熱海の到着が10時04分。次に乗る列車は11時30分発の普通だから、この間に食つもん食つとくように。まあ、食いたくない人は別だけどな。で11時30分のふつうで途中の国府津で降りる。国府津で降りたら御殿場線の12時32分発の列車に乗つて終点沼津が13時50分着。それで、沼津から14時15分発の普通で、途中の清水まで乗る。その清水到着が14時59分。そのあとエスパルスドリームプラザとかつていうところに行つて、清水に戻つて17時15分発の普通で終点浜松が18時41分。とまあ、こんな感じだ。」

ああ、あと言い忘れてたけど「ホームライナー」に乗るために310円必要だからそれも忘れるな。忘れたやつはたとえサヤでも置いてく。」

「はい、分かりました。」

すると、ナヨロン先輩を抱えて、サヤ先輩と善知鳥先輩が戻ってきた。

「何一人でネタばらしちゃってんだよ。」

サヤ先輩に抱えられている状態だったナヨロン先輩がそこから抜け出して、

「ネタばらしじゃないだる。いくらなんでも通じないって。」

「そうそう。ナヨロンの言ひとおりだぜ。とりあえず工程はやっと話しておいたけど。」

「そうか。」

サヤ先輩はため息をつくと、

「よし、本当に分かつたか今からおさらいする。まず「ホームライナー」って何て呼ぶか分かるか。」

ほとんどの人が手を上げて、自分の考えを述べる。まず醒ヶ井が、

「「ホームライナー」。」

「違う。永島。」

「違っ。永島。」

「H R。」

「そうだ。H R。」

「サヤ。H Rじゃなくて、H Lな。」

またナヨロン先輩が訂正する。

「んじやあ次。A T Mつてなんだ。」

「現金自動預け払い機。」

「醒ヶ井バカだろ。違う。空河。」

「熱海。」

「そう。次、御殿場線つてなんだ。」

「御殿場線。」

「木ノ本。いい加減気づけて。」

「あつ。分かつた。突起、突起。」

「違う。」

「突起違うんじや分かんないよ。」

「うわ、スゲエ。永島當てやがった。」

「感心するところ違うだろ。」

「ナヨロン先輩がツツコム。」

「とまあそんな感じだ。全員覚えろー。」

「サヤ。まだ注意事項いってないだろ。」

「ああじゃあ頼む。諸君聞けー。」

「えーと、注意事項今からいいます。注意事項はまず車内へのマッ

クスの持ち込み禁止。」

「善知鳥先輩。もしマックス持ち込んだらどうなりますか。」

「もし車内にマック持ち込んだら、窓開けて外に投げ捨てる。」

（今の車両つてだいたい窓あきませんよねえ。）

「その2。車内でもし携帯とかが鳴つたら、その人の携帯壊します。どうやつて壊すかって言うと、折り畳み式携帯はスライドして、スライド式携帯は折りたたんで壊します。」

「もし両方だつたらどうするんですか。」

「もし両方だつたら窓開けて、外に投げ捨てるか。開かなかつたら着いた駅でゴミ箱に捨てるか、車内のトイレに流す。」

（とにかく。まともな壊し方しないってことね。）

「その3。来た列車が吊りかけじゃなかつたら、界磁チヨツパヤダ吊りかけがいいって言うこと。」

「言わなかつたらどうなりますか。」

「一番最後。やらなくていいだろ。だいたい、今の車両なんてVVV
VFが多いんだから。」

「んじやあ、VVVVFヤダ吊りかけがいいで。」

「関係ねえよ。とにかく言わなくていいってこと。」

「ちなみにナヨロンはその犠牲者です。」

「放物線。」

「うわ、スゲエ。永島當てやがった。」

「感心するところ違うだろ。」

「ナヨロン先輩がツツコム。」

「とまあそんな感じだ。全員覚えろー。」

「サヤ。まだ注意事項いってないだろ。」

「ああじゃあ頼む。諸君聞けー。」

「えーと、注意事項今からいいます。注意事項はまず車内へのマッ

クスの持ち込み禁止。」

「善知鳥先輩。もしマックス持ち込んだらどうなりますか。」

「もし車内にマック持ち込んだら、窓開けて外に投げ捨てる。」

（今の車両つてだいたい窓あきませんよねえ。）

「その2。車内でもし携帯とかが鳴つたら、その人の携帯壊します。どうやつて壊すかって言うと、折り畳み式携帯はスライドして、スライド式携帯は折りたたんで壊します。」

「もし両方だつたらどうするんですか。」

「もし両方だつたら窓開けて、外に投げ捨てるか。開かなかつたら着いた駅でゴミ箱に捨てるか、車内のトイレに流す。」

（とにかく。まともな壊し方しないってことね。）

「その3。来た列車が吊りかけじゃなかつたら、界磁チヨツパヤダ吊りかけがいいって言うこと。」

「言わなかつたらどうなりますか。」

「一番最後。やらなくていいだろ。だいたい、今の車両なんてVV
VFが多いんだから。」

「んじやあ、VVVVFヤダ吊りかけがいいで。」

「関係ねえよ。とにかく言わなくていいってこと。」

「ちなみにナヨロンはその犠牲者です。」

「言わなくていいつうの。」

最後はナヨロン先輩が善知鳥先輩を押し潰して、この話は終了。

「旅行とかはだいたい決まった。」

横で聞いていたアド先生が口を開いた。

「あっ、だいたい。」

「それで、北斎院君。きたざいやくん自己紹介とかはしたの。」

「あっ、とりあえず名前だけぐらいは言いましたけど。」

「1年生に顔とか覚えてもらつたために、もう一度やつて。クラスと名前と一言でいいから。」

「あっ、分かりました。えーと全員席について。今から顔覚えてもらうために3年生から順番で自己紹介することになつたから。とりあえず俺から始めるけど。3年5組。きたざやだいち北斎院大智です。よろしくお願ひします。」

「カツ」「す」く天然です。」

「一言余計。次、善知鳥。」

「3年5組善知鳥茉衣です。何か分かることあつたら聞いてください。」

「3年8組綾瀬健斗です。よろしくお願ひします。」

「こいつの作ったゴミモジュールいつぱいあるよ。」

「ゴミじゃないだろ。・・・3年6組名寄真佐哉です。鉄道には詳しいんで何でも聞いてください。」

「地図を読むのは苦手です。それと彼女募集中です。」

「一言余計だ。次、ハクタ力。」

「2年8組。鷹倉俊也です。よろしくお願ひします。」

「「チャンダーバード」と「パクチャカ」にしか詳しくないぞ。」

「「サンダーバード」と「はくたか」だけで悪かつたですね。次絢乃。」

「2年8組の楠絢乃くすのきあやです。よろしくお願ひします。」

「自称。鉄研のホームヘルパーです。」

「違います。次、1年生。」

「1年5組の佐久間悠介です。電車は新幹線が興味あります。よろしくお願ひします。」

「1年4組 算島健太です。よろしくお願ひします。」

「1年7組 醒ヶ井瑛介です。電車には全く詳しくありませんがよろしくお願ひします。」

「1年4組。木ノ本榛名です。よろしくお願ひします。」

「1年5組。永島智暉です。電車にはそこそこ詳しいのでよろしくお願ひします。」

「次中学生。」

「1年A組の諫早轟輝です。よろしくお願ひします。」

「1年A組。空河大樹です。よろしくお願ひします。」

「1年A組、朝風琢哉です。よろしくお願ひします。」

これで部員全員の紹介が終わる。読者の皆様も少しは覚えてくれただろうか。

4月30日。今日で部活決定が仮決定から本決まりになる。

13列車 初旅行の工程（後書き）

ようやくここにまできました。

これから2話程度の旅行シリーズになります。どうぞ自分がそこにあると思って読んでみてください。

本当に読んでくれる人には感謝。それと感激です。

14列車 搖られて（前書き）

現実と大きくかけ離れているところが、いつもおさがりの中だけです
ので。

自ら満足などいうがあつて本当にすみません。

14列車 搖られて

5月2日。4月29日にサヤ先輩から言われたプランで旅行。
6時45分浜松駅在来線改札口を守るため、余裕を持つて浜松駅に到着した。だが、余裕を持ちすぎたかもしれない。そこには僕以外誰もいなかつた。しばらくそこからそんなに離れないところをふろふろと行つたり来たりを繰り返していると、

「ナガシイ。」

聞き覚えのある声だ。でもこの声は萌の声ではない。善知鳥先輩の声だ。

「ナガシイ早いなあ。本当に鉄道好きつていう表われかもなあ。」

「・・・。」

いうことは何もなかつた。

またしばらく待つているとアヤケン先輩が、また数分後にはハクタ力先輩と楠先輩が、その数十秒後には醒ヶ井と箕島が、そのまた数分後にはナヨロン先輩が集合した。6時40分現在、まだ集合していないのは木ノ本と佐久間と中学生3人。そしてサヤ先輩だ。

改札口が少し大きな荷物を抱えた人で込み始める。でも人数は少ない。荷物が大きいために込んでいるように見えるだけだろう。この2分前には西鹿児島からの「寝台特急はやぶさ」がお目見えする。その7分前には南宮崎からの「寝台特急富士」が参上する。両者とも東京と九州を結んでいる寝台特急の仲間である。

「よーす。永島。」

後ろから肩をたたかれた。振り向いてみると木ノ本だった。さらに諫早、空河、朝風の姿もある。

「お・・・お前らいつたいどこから來たんだよ。」

「えつ。どこつて、こん中からだけど。」

木ノ本は親指で改札口の向こうをさした。イコール。今の今までホームにいた。イコール。「富士」「はやぶさ」を撮影していた。

「まさか。「富士」と「はやぶさ」の写真撮りに行つてたのか。」

「うん。それにしても大変だつたよ。お祭りから逃げるために口実作つて、昨日の20時からここのにもつて、「富士」と「あさかぜ」と「はやぶさ」と「出雲」^{いずも}と「瀬戸」^{せと}と「さくら」と「みずほ」と「銀河」^{ぎんが}と「スーパーレールカー」撮影してたんだから。」

「よくやるなあ。」

「ああ、それにしても久しぶりにやつたなあ。だから今すつゞく眠いんだよねえ。ちょっと電車の中で寝ながら行くわ。」

「おい、まさか中学生も一緒にたとかつて言わないよなあ。」

「それは言わないよ。空河^{そらかわ}が来たのが6時00分ごろで、朝風^{あさかぜ}が来たのが6時12分ごろで、諫早^{いさはや}が来たのは6時21分だもん。」
(全員俺が来る前にホームに上がつてたのか。だんだん木ノ本の撮り鉄根性がむき出しになつってきたかも。)

「あつ、そう。」

6時45分。まだ現場に現れていないのはサヤ先輩と佐久間だけ。
「サヤとユウタン。置いてけぼり決定。」

善知鳥先輩はそのことを喜んでいるらしく万歳^{さくし}をしている。

「相変わらずだな。あいつ毎回時間通りに来ないからなあ。俺たちが1年生の時の歓迎旅行もボイコットするみたいな勢いがあつたらな。」

「サヤ先輩つてそんなに時間守れないんですか。」

「守れるには守れるんだけど、こういうときはルーズになるつていのつかなあ。ホント。遊びに行く時だけはこういう風になる。遊ばないときは真剣に時間守るんだけどね。あいつつて変だよなあ。」

「まったく。後輩を待たせるなつうの。鉄研部の部長が。」

先輩たちが口々に文句を言つて遅れてくる部長を待つている。すると、3分遅れでサヤ先輩が到着。さらに5分遅れて佐久間^{さくま}が到着した。佐久間が到着するとみんなから「休日乗り放題きっぷ」の2600円と「ホームライナー」の整理券料金310円を徴収。しばらくその位置で待つているとサヤ先輩とナヨロン先輩が「トイカ」

の宣伝が書かれていた包みを持って戻ってきた。それを順番に渡していく。渡された包みを開けてみると、切符が2枚入っていた。横に長い水色が買つた切符が「休日乗り放題きっぷ」。小さくオレンジ色つぽくなつていて、「ホームライナー」の整理券だ。その整理券が示していたのは6番B席。後でだれがとなりか確認してみると僕の隣は諫早だつた。

6時55分。コンコースでやる作業はすべて完了了。それぞれ改札口に上がる。「休日乗り放題」は普段皆さんを使つてているきっぷとは違う。改札機を通らず、直接窓口のほうを通つて改札を抜けるのだ。そのとき5月2日と書かれたハンコを押される。この後改札を通ることについては改札で駅員に提示するだけでいい。無人駅だった場合は車掌か運転手に提示すればOKだ。

ハンコを押された切符はこの後熱海まで用はない。包みの中にしまって階段を上る。階段を上ると今度は右にかじを切つて1・2番線ホームに上がる。

僕たちの乗る「ホームライナー」は1番線に控えていた。窓周りが黒。その下に入るオレンジ色の帯。JR東海の特急車両373系だ。これの3号車に乗り込み、発車の時を待つ。7時05分。「ホームライナー」は時間通り浜松駅を発車した。

浜松^{はままつ}を発車した373系は快調に東海道本線を飛ばす。浜松を発車するとすぐに新幹線とはずれ、しばらくすると天竜川を通過する。天竜川^{てんりゅうがわ}を通過すると坂を上つて鉄橋を通過する。

「永島^{ながしま}。静岡^{しずおか}まだ。」

後ろの席に座つている佐久間^{さくま}が話しかけてきた。

「まだだよ。まだこれ天竜川^{てんりゅうがわ}だろ。」

「えつ、これ天竜川^{てんりゅうがわ}。もう安倍川^{あべかわ}だと思つたよ。」

とぼけていることは知つてゐる。弁当を食べているときによく話していることだが、本物を聞くとあきれる。

「なんことあるかよ。どこをどう曲げたらこれが安倍川になるんだ

よ。

「ハハハ。そうだな。」

話が終わると、窓のほうを眺めた。下流には東海道新幹線の天竜川鉄橋が見える。

「ちょっと行ってくるよ。」

後ろに流れしていく浜松の風景^{はましき}にさよならを言つて、外を流れる風景に見入った。

時折下り列車がこちら側の視界を遮る。その時には何系かということがふつうに気になる。

「前が313系で、・・・後ろが211系。」

諫早が側面の色で判断をつけた。読者の皆様にも簡単に見分けたポイントを説明しておこう。まず、313系のラインカラーはオレンジ一色。211系のラインカラーは湘南色^{しょうなんいろ}と呼ばれる緑とオレンジのライン。そして、顔。鉄道は皆同じ顔という概念がある人はねぐい捨ててほしい。鉄道にはそれぞれ個性があり、皆が皆同じではない。313系はオレンジ色のラインが入った顔、211系は湘南色^{しょうなんいろ}のラインが入った顔をしている。もちろん、違ひはこれだけではないが、今ここで説明してしまつと処理ができないなくなると思うのでやめることにしよう。

「313系と211系か。」
「じーじー辺つてそういう編成ふつうにやつてるんだな。」

「確かに。名古屋圏^{なごやけん}はこんなくそつたれ編成やつてませんもんね。」

「くそつたれかよ。」

「ああ、くそつたれはありますんでしたね。名古屋圏^{なごやけん}はこんな『ミリ編成ないですね。』

「あんまり変わつてない気が・・・。」

そんな話で1時間。「ホームライナー」は8時03分^{静岡}に到着。次に乗車するのは8時51分発。^{あたみ}普通熱海行き。これまで少々時間がある。

373系「ホームライナー」から下車して、まず集合がかかる。

8時5分発の列車に乗るためにここに集合しひとりひとりだった。それの確認が終わると自由行動になる。

「なあ、永島。^{ながしま} おなかすかない。」

木ノ本^{きのもと}が話しかけた。

「えつ、どうして。」

「だつて、ご飯食べてないんだもん。昨日の晩御飯から何も食べてない。飲み物は飲んだんだけどね。」

「あつ・・・そう。よくやるなあ。」

「よくやるなあつて、このくらい当然だ。」

「俺は撮りに行つたりとかしたことないから、当然とか言われてもわかんねえよ。」

「えつ。ないの。」

「そんなことより、なんか食べてこよ。そいら辺にキヨスクだの蕎麦屋^{そばや}だのなんかあるから。」

「それくらい知ってるよ。で、話が脱線したけど、永島^{ながしま}もなんか食べる。」

「食べねえよ。つうか、ご飯家で食つてきた。」

「そうかあ。」

と言つたら階段の向こうにある蕎麦屋^{そばや}に一人駆けていった。

ふと373系に目をやつてみるとヘッドマークがさつきの「ホーミライナー」から「ふじかわ」に変わっていた。案内には8時17

分発^{けいたい}、「特急ワイドビューふじかわ」甲府^{じゅふ}行きとある。

携帯電話を取り出して、その写真機能を使う。373系を収める

とそのあとに収めるものはなくなる。

「「ふじかわ」かあ。」

横を見るとさつき蕎麦屋^{そばや}のほうに行つていた木ノ本^{きのもと}が戻つてきていた。

「いつの間に戻つてきた。さつきまで蕎麦屋^{そばや}に行つて……。」

「ああ、さつき食べて戻つてきた。いつこうとき便利だよねえ。あ

の手の蕎麦屋そばやとかうどん屋。ホームにあるから外に出る必要ないし。

「・・・そこまで食べるのが早ければ、おにぎりとかのほうが効果的なんじやない。」

「それもそうかもしけないけどさあ、気分によるんだよねえ。今はおにぎり食べたいっていうと氣じやなかつたから、そばにしただけだけど。それにそばとか麵類めんるいつてするする入つて、早く食べ終わりそうな感じしない。」

「ああ、確かに。」

「だる。こいつときはああいつ店に駆け込み入店するのが一番いいと思つ。」

（駆け込み乗車じゃなくて、駆け込み入店か。）

それは一理あると思つた。自分も麵類は好きだし、麵類だと早く食べ終わるという先入観もある。

という話は置いといて、8時45分。自由行動は終了。さつき確認された位置に全員が集合する。しばらくすると313系を先頭に6両編成の普通列車が入線してきた。この列車で終点熱海まで揺られる。

「ナヨロン先輩。さつきから何見てるんですか。」

僕は純粹にナヨロン先輩が向けている目線が気になつた。彼はさつきから313系ではなくて上を見ている。それもずっと向こうの上だ。

「いや、パンタの向きがどっちかなあつて思つて。」

ピンポン、ピンポン。ドアが開いたので、ホームに人があふれる。ドアから吐き出される人の波が終わると今度は乗る人の波。さつきと同じで降りる人も乗る人も同じくらいなのでさほど混みようも変わりない。ナヨロン先輩は先頭のドアのところに荷物を置いて、さつきの説明を続けた。

「313系サンイチサンと211系ニイチイチつてシングルパンタのつき方が逆なんだ。つまりどっち向きでついているかわかれば、後ろの車両やつを見ないで判

別できる。」

ナヨロン先輩は手でくの字を作つてさうに続けた。

「これがシングルパンタとして、これが東に開いてる車両。つまり今乗つた位置からすれば右に開いてたら313系。左に開いてたら211系つていう風になる。それで先頭車だけ判別したかつたらヘッドライトの色を見ればいい。だいたい黄色っぽいヘッドライトしている車両が211系。まあ、運用のあれで、311系だつたり313系の名古屋圏の車両だつたりすることはあるけどな。それで、白のヘッドライトが313系2500番台。ここいら辺で白は2500番台しかいながら、見分けやすいよ。」

「へえ。」

「ナガシイ。そんなところ固まつてないでこいつにくれば、座れるよ。」

楠先輩に呼ばれて、そつちのほうへ赴いた、

「ほら、ナガシイ座つて。」

「えつ、でも。」

「いいの、いいの。あたしはこれくらい大丈夫だし。やせ我慢するなつうの。お前にそ座つとけ。」

ハクタカ先輩が口をはさんだ。

「別に・・・。」

「いいから座れ。どうなつてもしらねえぞ。」

楠先輩はハクタカ先輩に無理やりという形で座らせた。

「チッ。アヤノンのやつうまく逃げたな。せつかくのいじる材料がなくなつちゃつたじやない。」

隣は善知鳥先輩。今のことはどうやらいじられるという立場から逃げたかったからだそうだ。気づくと列車はすでに発車しており、次の停車駅東静岡の案内を行つていた。

東静岡に止まって、すぐに発車。次は草薙と言つてゐるこひ、善知鳥先輩が話しかけてきた。

「ナガシイ。こうやつてるのをひまだし、なんか話そつか。全員の

面白い話とか、いろいろ。」

こう持ちかけてきた。今の僕にはそんなに暇ではないのだが、さつきまで「ホームライナー」に乗っていたという反動が大きかった。

「別にいいですよ。」

了承すると後は一方的に善知鳥先輩にペースになつた。

「そうだな。まず、アド先生の異名とかって聞きたいくて思わない。」

「うーん。はい。」

「アド先生のもつ一つの異名はねえ・・・ハゲ友の会会長よ。」

「えっ。」

「だからその名の通りだつて。アド先生今髪の毛ないでしょ。だからそういう異名も5年前の先輩がつけたんだつて。そういう話。」

「アド先生のほかの話つてないんですか。」

「アド先生は何かと少ないんだよねえ。でもほかの人だつたら、いついうの多いよ。例えばナヨロンとか。」

「ナヨロン先輩にもなんか異名みたいなあるんですか。」

「ナヨロンの場合は伝説だよ。伝説。あいつ電車に異常に詳しいじやん。」

「じゃんって言われても。僕はまだ付き合つてそんなに経つてませんから。」

「それでもわかるだろ。あいつ電車に乗つたら見るところが違うんだよ。パンダグラフとかつていう・・・。」

「パンタグラフです。」

「いいよそんなこと。あいつそれ見て、あつこれは何系だとかいうからね。他にあいつが入部したときに青木さんつていう人たちと電車のこと話してたのよ。その時ナヨロン、エスエルの話して、知識で先輩たちを撃ち落としたからね。」

「えつ、ナヨロン先輩つてそんなに詳しいんですか。」

「詳しそうだよ。ここがこうなつてるからこれは何々だねとかつて、もうひとつかの先生みたいに言うから。」

確かに。どこか先生じみているとこうじゅうはある。

「じゃあ、鉄道知識でナヨロン先輩に勝つって無理じゃないですか。

「あつ、でも勝つことができる分野もあるよ。例えば、料金とか、距離とか、駅名とか。ここ覚えてるとナヨロンに勝てるよ。」

料金。駅間。駅名。すべて僕が詳しくないところだ。

「ダメだ。僕はナヨロン先輩には勝てませんね。」

「何。ナガシイも電車のことだけなのか。」

「はい。僕、新幹線を除外するなら223系が好きなんですけど・・・。」

「「めん。あたしその時点についていけない。そもそも223系つて何。211系とかじゃなくて。」

「善知鳥先輩。あまりそういうこと言わないほうがいいですよ。」

「それは分かつてるよ。でもあたしには違いが分からんんだって。なんせ〇系もわからない人よ。」

自慢げに言われても何の自慢にもならない。

「223系つてJR西日本の新快速なんですよ。それの1000番台と2000番台の違いはテールライトがヘッドライトのすぐ下にあるかないかなんです。」

「えつ、それだけ。もつと顔が大々的に違いますとかじゃないんだ。」

「だつて同じ車両ですよ。違いが少なくなるのは当然です。でも、視認性だけで違いが判断できるわけですから、まだまだ優しい間違い探しだと思いますが。」

「うーん。そうなのか。」

電車のことを話して首を傾げられることは今までなかつた。そもそも萌はこの違いは理解していたし、223系すべての違いも分かっていた。それとも、僕が今までそういう人としか話していなかつたからこういう結果になつたのだろうか。

「ダメだ。やっぱりあたしには電車のことはわかんない。それより

まだまだ面白い話あるんだけど、聞きたくない。」

何かと停滞した空気を進めたいらしい。うなずいて話を進めさせた、「ナガシイ。この部活の中で好きな人ついている。」

「いませんけど。」

「うそつ。ハルナンのこと好きじゃないの。」

「好きとか嫌いとかいうわけじゃないんですけど、そういう田では見てません。」

「なるほど。他の人かあ。ならいいや。ちょっと掘り込んだ話しちゃってごめん。でも、この部活には部活内恋愛しちゃってる人いるんだよねえ。」

興味はないのだが何か答えを返さなければと思つて誰ですかと聞いた。

「アヤノンとハクタカ。一人とも幼馴染同士なんだけど、冷やかさると否定するから。」

「それって自分がただただ冷やかしたいだけじゃないですか。」

「その冷やかすのが面白いんだって。」

「これはどう反応したらいいものか・・・。」

14列車 搖られて（後書き）

新入部員歓迎旅行。ようやくと鉄道研究部らしくなりました。

でもこういう旅行にいくとマニアの人の恐ろしい能力が發揮されるんですね。それがあらわになつている人が多いですが、これだけどどまらない人も世の中には・・・。

あーあ。マニアのパワーって本当に恐ろしい。

15列車 熱海 国府津 清水

しばらぐ313系に揺られて熱海まで行く。途中にはパルプの盛んな富士。旧東海道本線。御殿場線との分岐駅沼津。新幹線の車両基地がある三島と主要駅が続く。三島を発車すると次は函南。函南を出ると次は終点熱海だ。ここ函南と熱海の間には丹那トンネルというトンネルが存在している。このトンネルを通りぬけると隣に東海道新幹線の線路が見える。そしてまたトンネルに入る。そのトンネルを出ると熱海のホームに滑り込む。

「やつとここまで来た。」

善知鳥先輩は体を伸ばした。

「よく耐えたな。」

サヤ先輩はそれに感心している。

「よく耐えたなって。よっぽど耐えきるのが珍しいみたいな言い方だな。」

「だつてそうだろ。お前の場合寝てるかなんかしないとビリくなるだろ。」

この話を聞いていると善知鳥先輩がこの部活に入った理由がなんのかわからなくなってくる。

「みなさん。集まつてください。」

アド先生が集合をかけて、全員を集める。全員集まつたら改札に向かい、朝渡された「休日乗り放題きっぷ」を駅員に掲示して出た。改札を出ると人盛り。歩くところが狭いからか東京よりも人がいると錯覚する。僕たちが出た出口付近には足湯と蒸気機関車が展示されていて。多分、日本に鉄道が走り始めたころに走っていた蒸気機関車だと思う。その蒸気機関車の前まで来るとアド先生から指示があつた。

「みなさん。これから自由行動にします。11時10分にここに集合してください。」

「はい。」

全員の声がそろいつ。それが済んだところで、みな思い思いに解散していった。

「さて、俺たちは昼飯にでもするか。」
佐久間さくまが僕を誘つた。

「昼か。早くない。」

「早くないだろ。乗る電車が11時30分なんだから。」

それもそうかと思いそれに同意することにした。熱海駅側には長屋みたいに建物が建っている。そこに2階はどうやら飲食店が並んでいるらしい。そこに入つて、全員で昼を食べることにになった。入つたところは2階に上がつてすぐのラーメン屋。そこで昼をとつたあとは何もすることがない。1回のお土産屋のあたりをふろふろと歩いて、家用に買つていいくお土産を選んだ。それが終わつたらせつきの蒸氣機関車のところに戻つた。

そこにはすでにナヨロン先輩がいた。ただ、厳密にいえば違う。のんきに足湯に浸かつているのだ。

「ナヨロン先輩。」

声をかけた。すると振り向いて僕のほうを見た。少し驚いたようだ。

「永島ながしまか。善知鳥うとうかと思つたよ。」

「善知鳥先輩だったら都合が悪かつたですか。」

「悪すぎたよ。もしかしたら、この足湯に突き落とされるかもしないからな。」

「そりなんですか。」

「いや、それくらいしてきかねないっていうのかなあ。まあ、そんなとこ。・・・ところで、永島今まで何してきた。」

正直に昼ご飯を食べてきたと答えると、

「そりかあ。真面目まめだな。」

「えつ。お昼ご飯食べる」とつて真面目なんですか。」

「そう真面目。いや、真面目すぎる。」つい業界にいくと昼なんてただ邪魔なイベントになるだけだぞ。永島ながしまもそういうタイプだから

らすぐに分かる。」

(そういえば、アヤケン先輩「昼食べたい奴は食べとけ」って言つてたなあ。もしかして、アヤケン先輩も食べてないのかなあ。)

「アヤケン先輩はいま何してるんですか。」

「んつ。確か綾瀬あやせなら、海のほうへ歩いてつたと思ったけどなあ。何か写真にでもとつてるんじゃないかな。ギャルとか、ギャルとか、ギャルとか。」

「それしそうなのは断然ナヨロンのほうだけどなあ。」

後ろを見てみるとさつき噂していた善知鳥先輩だった。その姿を見るとナヨロン先輩はわざと足湯から出た。

「どうしたナヨロン。」

「いや、何となく。」

一息おいて、

「ところでなんだよ。俺がギャルの写真撮りに行くつて。」

「だつてしそうじやん。ナヨロン彼女いないんだし。それに初恋もないらしいし。」

「初恋はあつた。フラれただけ。」

「どつちも同じじやん。そんなことよりナヨロンで遅れてるぞ。このナガシイでさえ彼女いるくらいだぞ。」

このナガシイでさえつて言い方はなんだ。

「へえ、そなのが。」

「ナヨロンいつまで、電車が彼女だつて言つてるんだよ。」

「勝手に話進めるなよ。俺はそこまでじゃないぞ。・・・といふで、

そういう善知鳥には春が来たのかよ。」

ナヨロン先輩がそう聞いた瞬間善知鳥先輩の顔が少し赤くなつた。

「い・・・いえるかよ。恥ずかしい。」

少しは恥じらいというものあるらしい。

11時10分。サヤ先輩が1分遅れて集合場所に到着。これで全員そつた。揃つたところで改札口を通り抜けて、またホームに戻る。ホームで待つていると函南側かんなみから白いヘッドライトをつけた車

両が接近してきた。JR東日本的一大勢力。E231系のお出ましである。乗車位置は8号車。15両編成の車両のちょうど中間である。

11時30分。僕たちを乗せた15両編成の車両が熱海を発車する。その隣には185系の「特急踊り子」など。東海道本線の特急列車が並んでいる。熱海を出るとしばし、外の風景に目を向けていた。

しばらくすると眼下に相模湾さがみわんが広がるようになった。世界に比べれば相模湾などほんの点でしかないのだが、ここから見る限りはそんなことは思わない。かなたには地球の輪郭がわかるように少し丸みを帯びて見える。

「海だ。」

普段海に縁のない人のテンションが上がる。しかし、すぐにトンネルに入つてその視界が遮られる。

「このトンネル死ねばいいのに。何やつてるんだよ。」

トンネルに文句を言つてもどうにもならないと思うが・・・。そのトンネルを抜けるとまた海が見える。しかし、今度は木に邪魔されてしまうくなる。これを何度も繰り返して、根府川に停車。その後早川まで相模湾を望み、早川から沿岸部を外れて小田原に。次の鴨宮かものみやは東海道新幹線が開業する前モデル線があつたところである。ここから30km程離れている綾瀬までモデル線は伸びていた。ここで新幹線のための各種試験が行われたのだ。鴨宮の次は国府津。ここで東海道本線からは分かれる。

12時00分。国府津に到着。8号車から下車して、E231系を見送る態勢をとつた。しばらくするとE231系のドアは3回電子音がしてしまった。すると高い歌声を奏でて国府津のホームを後にいしていった。国府津を発車すると線路が左にカーブしている。そこに差し掛かるころにはスピードは70km/hを優に越していくだろう。こんなに早いものかという速さで走り去つていった。

それを見送つたら、御殿場線のホームに赴いた。ここに列車が来

るのはまだ先である。そのころ。さつきE231系が走り去つていったホームにはまた別のE231系が入線してきた。これもさつきと同じスピードでホームから走り去つていく。

「早いなあ。」

ふと言葉が漏れる。

「あんなに早いものかなあ。いつも寝台特急とか見てるからみんなに加速率いいとはつきり驚くわ。」

木ノ本も意外な感じで話している。

「まあ、そこは人それぞれだらうな。普段電車しか見てない人はあの速さがふつうと思って、寝台特急とかが発車するときはこんなに遅いのかつて思う。だけど、そのほうが見慣れてる人はあれくらいの速さが速く見え、寝台特急のほつがふつうに見える。木ノ本はそういう方面では正常だよ。」

ナヨロン先輩がさらには続けた。

「乗ってるぶんにはそういうこと考へないんですけどねえ。」

「乗ってるときはそういうこと考へないだらうなあ。他のに気をとられてるから。」

(他のに気をとられてるかあ。そつかもな。)

「・・・。」

この会話が終わつてしまつと3人とも黙つてしまつた。全員見る風景に気をとられて、そういうことを考へないようだ。

数分後。御殿場線の列車を待つているホームに電車が入線する。

今度はさつきの313系と違ひ211系という車両である。違ひは前述したとおりである。

「211系かあ。乗り心地悪い奴だな。」

佐久間が211系を見るなり文句を言った。

「えつ。乗り心地悪いのか。」

「悪すぎだよ。こいつ発車したときにガックンガックンなるからな。」

「

この表現は相当悪いといつてうらしく。

「佐久間。乗るんだつたら前がお勧めだぜ。」

隣で会話を聞いていたナヨロン先輩が答えた。前の車両のパンタグラフを遠目ながら見てみると2つあった。僕にはそれが何系なのかわからなかつた。

御殿場線に乗車して、発車を待つ。12時32分国府津を発車。しばらく外に目を向けていると隣に大量の線路が現れた。車両基地のようだ。そこには211系など御殿場線で活躍する車両が止まっていた。この光景を後にすると山に分け入り、風景的にはそんなに面白くない光景が続く。また数十分揺られていると目の前に富士山が現れた。今日の富士山は晴天に恵まれ頂上まで見える。その写真を僕は写真ではなく目に焼き付けた。しかし、そのころになると風景にも飽きてしまった。もちろん、こうなつたらやることは一つだ。席を立つて数人誘つた。

乗った車両は3号車。隣の2号車に向へその数人を引き連れて歩いて行つた。2号車に入るとシートの形が変わつた。さつきまでのロングシートがクロスシートに変わつた。

（なるほど。ナヨロン先輩が「前がいいよ」とて言つたのはこういふことか。）

ここでようやつと白黒はつきりした。

そのころ、誘つた諫早、空河、朝風はすでに一番前にかじりついていた。僕もその一員に加わつて前を見る。さらに木ノ本、佐久間が加わつて6人で前を見つめた。

この状態を終点沼津の手前までや手、沼津に到着する直前に元の場所に戻つた。

「お前ら何してんだよ。」

戻るなりハクタカ先輩にそう聞かれた。

「大目に見てやれつて。ハクタカだつてわからないわけじゃないだろ。」

「確かにそうだけど。ガチでそれをやられると・・・。」

「何か不都合なのか。まあ、普段裏声上げてるハクタカが言うのに

も説得力つていうものがないけどなあ。」

「このう。」

沿津に到着。ここからは東海道本線を逆戻りだ。14時15分発の普通列車で、途中清水まで揺られ清水で下車。下車してからは清水の繁華街っぽいところを抜けて、東海道線をまたいで、清水の東側にある公園を通り抜ける。途中に踏み切りがあつて、そこを21系が通過していくのが見えた。さらに歩いて静岡鉄道の鉄橋が見えるところまできた。そこをゆっくりと通り過ぎていく静岡鉄道の車両を眺めて、また歩き出す。そのあとはいろんなところを通つて行つたため、どこをどう歩いたかなんて覚えていない。30分か40分くらい歩いただろうか。エスパルスドリームプラザに到着。しかし、鉄道好きの僕には何もすることがなく困っていた。ふろふろと中を歩いていると佐久間ながしまが僕の肩をたたいた。

「おい、永島ながしま。見てみろよ。フェラーリ乗り場。」

笑いが噴き出た。当の佐久間さくまも笑いをこらえられないでいる。

「フェラーリって。フェリー乗り場じゃないか。」

「こつから乗れるのは、フェリーじゃなくて、フェラーリに変わったんだよ。」

こんな冗談誰なら受けるだろ？。

15列車 熱海 国府津 清水（後書き）

高い歌声ってモーター音のことですよ。
電車を人に見立てた描[写]がまた多く出でてくるときがあるかもしれません。

また、電車にも感情があるんですよ。
読者のみなさん。これからはたとえものとこねだいたわってやつて
と思つて今日この頃です。

16列車 3cars or 6cars

16時30分ごろ。エスパルスドリームプラザの2階入り口に集合。そこから今度は道を一直線に進んで清水に帰る。予定では乗る列車は17時20分発の列車である。帰路。僕、諫早、空河、朝風はさつさと歩いて一番先頭に立ち、その後ろに木ノ本、さらにその後ろに先輩たちが続く形になつた。先輩たちとは距離が離れて、5メートル0mぐらいあつたと思う。

しばらく歩いて、長い歩道橋らしく物が見えた。その西側に目を向けると清水の駅舎が見える。僕たちの前に現れた歩道橋は自由通路らしく清水まで伸びている。中学生たちはすぐにその通路を伝つて清水まで走つていき、僕はそれを追う形になつた。改札を通りに抜けて17時15分。十分間に合う。階段を下りてホームに向かつた。ホームにはすでにその列車に乗る人たちの人盛りができていた。その頃先輩たちは、

「17時20分。まだ間に合うけど・・・」

「そうだな。最後の最後ぐらいゆつくり帰らせてくれよだよなあ。」

「これじやあ、死んじやうじやん。」

「できれば、もうちょっとあつたほうがよかつたなあ。」

電光掲示板に書かれている「3両」の表示にため息をついていた。

17時19分。その列車が入線。そのころには先輩たちもホームに降りてきて、列車を待つていた。

「最後に乗る列車はこいつですね。」

諫早が乗り込み、空河が乗り込む。僕もそれについて乗り込もうとした時、

「待て、その列車に乗るな。」

サヤ先輩が待つたをかけた。

「おい、諫早。空河。降りる。」

その声を聞いて、下りるように促す。すぐに反応した二人はホーム

に降りて、数秒後にドアが閉まつた。間一髪である。ドアが閉まつた211系はホームから走り去つていった。

「サヤさん。なんで今の列車に乗らなかつたんですか。」

諫早が下りろといった意味を聞いた。

「今のは3両だぞ。あんな中に放り込まれたいか。

「いわゆる。混むから乗りたくないってことだ。」

アヤケン先輩が解説する。

「なんですか。それ。今のに乗つていくつていう風になつてたじやないですか。だつたらあれに乗るべきでしょ。たとえ1両でも。」

「大丈夫。こんなの日常茶飯事だから。お前たちに今後の部活の予定表渡してあるだろ。あれ。今までなかつた日にやることつてなかつたか。」

善知鳥先輩の解説には何となく納得できた。4月の24日以降あつた部活は25日、26日、27日、28日、29日。予定されたいた日は25日、26日、29日。27日と28日の部活は最初から予定になかつた。それをやつているのだ。そして、24日の部活も予定されていなかつた。つまり勝手に行われている部活があるので。「だから、予定表なんて気にしちゃいけない。予定表通りにやらなのがこの部活なんだから。諸君。分かつたか。」

「こういう部活で、そんなにルーズじゃいけませんよねえ。」

「いけないんだけどねえ。でもすぐになれるよ。」

この後聞いた話だが、善知鳥先輩たちが入部したときからこの状態だつたらしい。ほぼ伝統化してしまつているそうだ。

次に来る列車は17時37分発。^{はまつ}普通浜松行き。これには行先の隣に6両とはいつていた。そのため、この列車に乗つて帰ることになり、^{はまつ}浜松到着は19時04分となつた。

17時37分の列車は211系を先頭にする6両編成。パンタグラフを見ていたナヨロン先輩の判断では後ろは313系ということだつた。

211系のシートに座つて、ボーッと外を眺めていると新幹線の

線路が隣に現れた。静岡に着いたのだ。その静岡には長居せずにすぐ

に発車。この後「ホームライナー」で通過してきたすべての駅に

停車しながら、浜松を田指す。その間はびりしても暇になる。

「永島。柿ピーでも食べる。」

「おう、食べる、食べる。」

柿ピーがなんなのは別にして、今は何かしていたほうが暇ではない。そう思つて佐久間から柿ピーをもらひ食べる。

「木ノ本も柿ピー食べるか。」

「おやじか。お前は。」

「うるせえな。いいだろ好きなんだから。」

数分後。

「結局木ノ本も食べるのかよ。」

「そうじやないって。なんか食べてたほつがましつてこと。なんかやることなすこと久しづりすきて体がついていくてない。」

「あー、そう。」

「あー、もうこれがタジ飯でいいや。」

「えつ、柿ピーが。」

「だつて、この後タジ飯のことなんか考えたくないもん。それにお父さんにはタジ飯食べてくるねつていえばそのあとはスルーしてくれるし。」

「なぜお父さんにメール。」

「ああ、うちイクメンだったから。お母さんがJRWで働いてるつて

言つただろ。だから、自動的にあたしの世話はお父さんになつたわけ。」

「いや、育児休暇みたいなのが取らなかつたのかよ。」

「取らなかつたらしいよ。お母さんが休んだのは私を出産する間の1年ぐらいで、私を産んだりすぐ職場に戻つて運転やつたんだつて。」

「木ノ本の父さんよくそれ了承したよなあ。」

「今考えてみるとかんなんだよ。お父さん昔よく私を連れて駅とか

に出かけてつたから。だから、お父さんも鉄道マニアだつたんだと思つ。だけど理由あつて、仕事続けられなくなつたんだと思つ。

「なんで仕事続けられなくなつたんだよ。」

「そんなこと知らないよ。それに小さい時からそんなこと知つちゃつたら運転手になりたいなんて思わないって。」

「・・・。」

掛川を過ぎると東海道本線は新幹線と並走する。

「なんか来ないかなあ。」

前の新幹線を見て、木ノ本きのもとがつぶやく。

「なんか来てくれるといいな。でも新幹線つてさあ、なんか来てほしいなあつて思つてる時に来なくて、どうでもいいかつて思つてる時に来るんだよなあ。」

「あつ、それよくある。なんで新幹線つてあんなにK.Yケイワイなんだろうなあ。もうちよつと空氣が読めればいいのに。」

「ハハ。空氣読めか。・・・なんかわかる。」

すると前を新幹線が通過していった。特徴は鼻の先に光っていたテールライトだった。

「N700系エヌナナだな。」

「N700系エヌナナだな。はあ。この頃あいつ多すぎ。」

「これからあの手の車両しかいなくなるんだろうなあ。私N700系エヌナナあまり好きじゃないんだよねえ。まだ700系のほうがかわいかつたというか。」

「えつ、700系かわいいか。俺あれ一番最初に見たときなんじやこりやつて思つた車両だけど。」

「なんじやこりやか。そこは人それぞれだもんなあ。・・・永島さんながしま、自分が一番好きな車両つて何。」

この手の質問には正直困る。それそれでいちばんがあるためだ。例えばJR北海道ならキハ261系「スーパー宗谷」。JR東日本なら253系「成田エクスプレス」など。他にもたくさんある。

「一番か。・・・答えるのに困るなあ。」

「あつ。じゃあ、新幹線でいちばん何。」

「100系と200系のH編成。俺それが好きだな。」

「100系はどういう顔してるかわかるけどさあ、200系のH編成ってどんな顔してる。いまいちよくわかんないんだけど。」

「H編成って、あの100系の顔した200系だよな。」

佐久間が確認してきた。

「そうそれ。」

「あつ、なるほど。……じゃあ、永島^{ながしま}って「グランドひかり」の100系も好きなのか。」

「「グランドひかり」の100系は好きじゃない。鼻の下にあるひげが……。」

「あれって空気取り込み口なんだってなあ。俺もあんまり好きにはなれないな。」

「あつ。そうなんだ。知らなかつた。」

「えつ、永島^{ながしま}なら知つてるとと思つたのに。」

「俺確かに電車には詳しいけど、そういう方面詳しくないんだ。それに今の今まで遠江急行の駅と遠州鉄道の駅全部言えなかつたから。山手線の駅は全部言えるけど。」

遠江急行と遠州鉄道とは地元を走つている私鉄のことである。

「それふつう逆だろ。」

「だつて、そうちだつたんだから仕方ないだろ。」

「でも、今なら言えるんだ。」

「いや。まだひとつ座じことこりがあるけどなあ。順番通りに言える自信ねえし。」

こんな話をしながら211系に揺られた。浜松到着は19時04分。定刻通りに到着した。

翌日。5月3日。この間は浜松祭りも絡んで部活はない。毎日のように家の模型で遊んでいた。しかし、今日はちよつと携帯をいじつて遊んでもいた。

「昨日、部活の歓迎旅行で国府津まで行つてきたよ。文面をこいつして相手に送る。その返信は、

「ふうん。といひで、何か珍しい車両とか見た。」

「見てない。」

「そう。じゃあ、100系とかも見てないんだね。ナガシイの好きなやつだけど。」

「確かに。でも本物見て失神しても困るから。」

「失神じゃないだろ。その前に死ぬだでしょ。うれしそぎて。」

「ハハ。そうかも。」

「でも、ナガシイいいなあ。いろんなところに行けて。次行くときは何か撮つてきてよね。お土産はいらないから。」

「何がお土産はいらないだよ。いるじゃねえか。」

「まあ、いいじゃん。でも、このお土産だったら買つ手間ないよね。」

「確かに。次臨地研修が夏にあるから、その時は何か撮つて帰るよ。」

「じゃあ、どこ行くかわかつたらメールしてよね。予約入れるから。」

「へいへい。」

「そう送つてスライド携帯ケータイの端末を閉じた。

「さて、そろそろ貨物にでも変えるかなあ。」

寝そべつた状態から体を起こして、車両子に入る。これを何十回も繰り返してこの日を過ごした。他の日も同じで6日までの暇つぶしには困らなかつたが、ホールディングウェイーク中に出された宿題は何もやつていなかつた。とりあえず6日の午後に片づけて、次の日からまた部活だ。

5月7日。宗谷学園では、

「何、安希。」

「赤電あかでんつて芝本しばもとから新浜松しんはままつまで乗るといいくらかかる。」

「赤電あかでんつて何。」

「えつ。萌ちゃんそれでも電車詳しいの。」

「分かんないものはわかんないんだから。そもそも赤電あかでんつて……
あつ、遠州鐵道のことか。」

ようやつとその意味が分かつた。

「400円だよ。」

「400円ね。そのあと名古屋まで行きたいんだけど、名古屋まで
いくらかかるかわかる。」

「じめん。詳しいの車両だけだから。」

「あつ、そななんだ。じゃあ、「ひかり」か「じだま」どっちが速
い。」

「えつ、「ひかり」だけど……。それわかないつてヤバくない。」

「ヤバくないって。これって知つてたほうがいいこと。」

「そういう意味じゃないけど、それくらいふつひじやないつて」と
つてじめん。話が脱線しちゃつたね。」

（本当に萌ちゃんつて電車のこと好きなんだな。これで、電車が彼
氏あきとか言わないよねえ。）

安希はそう思いながら、自分のクラスに戻った。

クラスに戻ると友達に話しかけた。

「ねえ、梓あずさ。梓あずさの言うこと本当だつたよ。あれつてすゞじよねえ。
「すゞいというかすゞすぎだよ。前なんか、電車なんか見分けられ
てふつうみたいなこと言われたから。」

「えつ、電車つて違うとかつてあるんだ。」

「そちらしによ。この前なんか電車来たのにあれには乗りたくない
とかつて言つてたし。」

「へえ。」

今度はそのことを萌の中學からの友達に振つてみた。

「そのことだつたらあたしたちはどうとも思つてないけど。」

「あれつて受け流しとけばいいんだつて。梓あずさも安希あきも真剣に受け止
めようとするからそななるんだつて。聞き流しておけば軽い反応で

済むから。」

「萌ちゃんって昔からああいう子だったのか。」

「いや、少なくとも小学校1年生の時はああじゃなかつた。」

「小1の時は……。つまり小2からああなつたっていうわけ。」

「そういうこと。萌よく電車に詳しい男子と休み時間中話してて、本人が言つにはそれだけで覚えちゃつたらしい。新幹線のこととかいろいろ。」

「へえ。」

お弁当を食べ終えて、机にのめつている萌の姿を見る。

「でも、この『』る元気がないんだよなあ。彼氏と違う学校になつたからかなあ。」

「えつ、あれで。」

「あつ、梓たちが知つてるのは電車の話するときの萌だけ。中学の時とかもそつだつたけど、授業とかになつたらあれがふつう。だから、電車の話してゐる時のほうが生き生きしてゐるよう見えるだろ。」

「・・・・。」

「本当はその人のことが死ぬほど好きなんだよ。なのに、何で別の学校に行つたんだかあたしにもわからんない。」

「・・・・。」

ところどころ聞こえてくる言葉を背中で受けける。ふと机の中からスライド携帯ケータイを取り出して、端末を開いた。待ち受け画面は阪急8000系。永島が好きな車両の一つである。

「・・・・。」

5秒くらいの間8000系を見つめて端末を閉じた。

一方岸川学園では、

「結局ボイコットするとかみたいなこと言つてたけど、しなかつたじゃないか。」

醒ヶ井が呆れたように言つた。

「するわけないだろ。1年生のいない歓迎旅行つてなんだよ。まあ、サヤ先輩がやりそつみたいだつたけど。」

「善知鳥先輩が言つてたけど、サヤ先輩つて時間にとつてもルーズ

なんだって。それだから、歓迎旅行の時に「サヤがボイコットした歓迎旅行」だつて先輩が言つたんだって。」

「鉄研の部長が時間守れないって死んでるよなあ。」

「あれで、将来なんになるんだか知らないけどさあ。」

「ハハハ。」

「その頃3年生のほうは・・・、

「ハックション。」

「食事中にくしゃみするなよな。サヤ。」

「いや、誰かに躊躇されてる。まったく誰だよ。こんな時間に躊躇する『ハミ』なやつは。」

「『ハミ』なやつって。それお前十八番だな。おはい」

「ところで、今日部活あつたつけ。」

「ないよ。」

「ないのかよ。ホント、『ハミ』だな。」

「その頃部室では・・・、

「お・・・お前。のぞきに来たわけじゃないんだから、ハンマー投げることないだろ。ていうか、それで窓が割れたらどうするつもりだつたんだよ。」

「そういうときは、のぞきに来たバカタカに弁償しても『ハミ』わよ。なんでそんなにあたしの下着姿見たいわけ。」

「見たいわけじゃねえよ。ちょうど絹乃^{あやの}が着替えてることが多いんじやないか。つうか、そんなに見られるのが嫌ならあっちの更衣室^{ういしつ}に着替えればいいじやないか。あっちなら見られないんだから。」

「今ちゅうじ体育でバレーボールやってるんだからしあうがないだろ。あたし教室じゃなくてここでお昼食べるんだから。」

「一人で食事かよ。さびしい奴だなあ。」

「別に。教室で食べるとバカタカと一緒に食べないのかつて冷やかされるから。」

「教室に帰つてくれれば同じだろうが。」

その言動にあきれ閉じた目を開けると、

「何胸見てるんだよ。体育の後は制服が透けて下着の解像度がいいみたいな目で見てるなよ。」

「それ、お前の一方的な考えだ。」

「黙れ、このバカタカ。」

絢乃は机の上に置かれている小物入れの引き出しからボンド水を滴下する注射器を取り出した。

「バカやめる。それはヤバいって。」

「バカタ力。どっちの目に打つてもらいたい。」

「どっちも嫌だわ。」

とまあ、今日も一日ふつうに過ごしている僕たち鉄道研究部である。

今回からの登場人物

園田安希	誕生日	3月10日	血液型	B型	身長	157
c m						

16列車 3 cars or 6 cars（後書き）

この小説に出てこむほとんどのキャラクターには電車からの由来があるんですよ。

今回の安希も東京～広島間を走っていた「特急女郎」からきてます。

17列車 中間テスト

5月9日。歓迎旅行^{かんげいりょこう}が終わって最初の部活。ゴールデンウィークの時浜松では盛大なお祭りがあるため、ほとんどの浜松市民はそつちへ貸し出される。浜松祭りとして有名である。凧上げや屋台の引きまわしなどなど。いろんなことをやっている。

今日の活動は文化祭に展示するモジユールというものの製作である。モジユールとは小さなレイアウトをたくさん繋げて一つの大きなレイアウトにするためのパーツのことを言つ。それを作っているのだ。僕達が作っているモジユールは中に留置線を設けた駅の様な風景のもの。まあ近くに駅はないためただの引き込み線と言つた方がいい。それを作っているのだが、あれからほとんど進んでいない。それから少し日がたつてテスト期間になる。この時はどうしてもモジユールの進行はストップしてしまう。それよりも少し心配がある。

「永島^{ながしま}。今回のテスト勝負しようぜ。」「友達の宿毛^{すくも}に誘われる。

「おう、いいよ。今回は絶対負けないからな。」

「よく言つよ。でも、今回はいい勝負になるだろうな。英語に至れば中学の復習だもんな。」

「ハハハ。で、ソッコウで悪いんだけど、数学教えて。」

「おい、数学こそ俺が教えてほしいわ。」

「まあ、そういわずに。」

「はいはい。そうしないと勝負になんないもんな。特にお前の場合は。」

宿毛^{すくも}から数学、国語、英語、現代社会、生物。いろいろ教えてもらつてテストで勝負する。45分後。テストが始まり50分のガチンコ勝負がスタートする。それを3時間。次の日に2時間。終わったらどうなるかというのは想像に任せよう。

テストが終了しテストが返却される。

「永島何点だつた。」

宿毛に聞かれてテスト用紙を見せる。

「マジかよ。この点数チートだぞ。」

「宿毛は何点。」

「これ。でも永島の点数にはどどかないな。その点数取られると。

他での挽回しなくちゃいけないじゃないか。」

「大丈夫。俺も国語が足引つ張るから。」

「その割にはいつも勝つてるじゃないか。」

「永島。何点だつた。」

佐久間が聞いてきた。

「まあまあだつたよ。」

(こいつ。頭いいってこと知られたくないのかよ。)

数日後。テストの合計と平均点、クラス順位が出る。

「やつぱりこいつの結果かあ。今回もまいりました。」

「いい加減にしてくれよな。俺こいつの好きじゃないんだよなあ。」

「順位だけはお前嫌いだな。俺が頑張つてるときにお前が手を抜いてくれればいいのに。」

「それじゃ勝負にならないだろ。」

「お前なら勉強しなくても大丈夫だつて。」

「さすがに勉強はしないと無理。1時間くらい。」

「今回1時間も勉強してないよな。」

一方他のクラスでは、

「今回のテスト、5組の人人が学年トップなんだつて。」

「蘭それどこから。」

「興津先生の話をちょっとと聞いたから。名前までは聞きとれなかつたんだけどね。でも、そんなに珍しい名前じゃなかつたと思う。珍しいやつだったら覚えてるし。」

(5組つて。もしかしてあいつかな・・・いやいや。バカっぽい

し、ないよな。)

「心当たりとかつてあるの。」

「いや別に。」

「だよねえ。」

友達の室蘭にはこういつたが、やつぱり気になつた。

「だから聞いたんだけど。誰だかわからない。」

「何。どうこいうこと。」

「うちの担任の沖津さんの話だと5組の生徒が学年トップ亭」といういんだけど。誰か心当たりないかなあって思つて。」

「永島。宿毛君だよねえ。学年トップ亭。」

「ああ、そうじゃない。宿毛頭いいし。」

だが算島はこう思つていた。

(学年トップつてこいつだぞ。木ノ本さんこいつが同じバカ友とかつて思つてるのか。そして、同じクラスの佐久間はこの事実知らないんだ。)

「じゃあ、宿毛君つていう子が今回の学年トップなんだ。」

「ああ。多分ね。」

ふと、このとき室蘭が言つた言葉が再生される。

(珍しい名前・・・。宿毛つてふつうに聞くような名前じやないか。じゃあ、鈴木とかつていう名前だよねえ。だつたら覚えてないのも裏付けるけど・・・。)

だが、そう思つただけで声にはしなかつた。

「ていうか。今日からだよねえ。部活。」

「ああ、そうだな。」

「あー、これでまた文化祭まで休めなくなる。もうちよつと家でゴロゴロしてたいのになあ。」

「ゴロゴロつて。永島の場合それ毎日やつてるだろ。」

「ゴロゴロしてるから休めるんじゃないか。あー、家で遊びてえ。」

「永島の場合はもう遊ばなくともいいだろ。普段から遊んでるようなんなんだから。」

「ダメ。普段から遊んでるけど、遊び足りない。」「

(いつまでこんな子供みたいなこと言つてるんだよ・・・)

そのあと永島にどう話しかけていいのか。その言葉を失った。

6限目終了。これからホームルームをやつて、掃除。今週は掃除担当ではないため、長いホームルームが終了したら、部室に即行で向かつた。

「宿毛。永島とテスト勝負してたみたいだけどどうだつた。」「

「あ。ああ、それなら、永島の勝ちだよ。俺は今回も負けた。」(えつ。)

その会話を聞いて目が点になつた。

(永島。あのとき学年トップは多分宿毛だつて言つてたよなあ。まさか、そういうの知つててああいう風に言つたのか。知られたくないのかよ。いづれはれることなのに。)

「あいつ生物で満点取りやがつたからなあ。俺も90点台は叩き出したんだけどシクツチまつてな。それがあつちの決勝点つて感じなんだけどなあ。」

「ところで、お前合計何点取つたんだよ。」

「えつ。俺が474点で、永島が475点だつたけど。」

「はつ。おめえら最強じやん。」

「まあ、今回は内容が中学からの布石で簡単だつたていうところもあるけどな。」

「お前らその学力でなんでここに来たんだよ。」

「永島は鉄研やりたいから。俺は併願校落ちたから。」

「マジかよ。俺あんなバカっぽい奴に負けたのかよ。」

「気落とすなつて。俺もこの頃勝ててねえんだよ。」

「宿毛に勝てないつてもう無理じやん。俺勝つてこないじやん。」

「あきらめんなつて。俺もいつかは抜いてやろうつて思つてんだ。あいつ一番嫌いだから。そうしてやれば、永島のまつは満足してくれるんだけどね。」

「だつたそれだけ。」「

「だつて。そうしなきゃ、永島がつるせこんだよ。」

「永島つてホントよくわかんねえな。」

「・・・。」

その話を耳で受けながら、掃除を終わらせると家に帰った。

17列車 中間テスト（後書き）

こういう人いたらウザいですね。

またこれって案外敬遠されがちなんでしょうか。

登場人物のほとんどが鉄道に興味があること以外はふつうだと思いま
すが・・・。やっぱりその知識量が掘り込みすぎますかねえ・。
・。

話は変わりますが、感想は受け付けておりますので・・・。感想が
ありましたらどうぞ書いてください。そうしていただけると嬉しい
です。

テストが終了すると部活は再スタート。これから文化祭までピッチを上げる。6月に入ると衣替えで、男子も女子もポロシャツに夏のズボン・スカートに替わる。6月初頭。僕達のモジュールが完成。ここまでくれば何をすることがない。

「名寄君。文化祭で使う車両を決めたいんだけど。」

「分かりました。」

すると、

「永島。車両庫行くけど、一緒に行かない。」

「行きます、行きます。」

ナヨロン先輩についてまた岸川寮に赴いた。

岸川寮に入つて階段を上がつて右にかじをきると右側に5枚扉が現れる。ここには分けて鉄道研究部のものが詰まっている。

「とりあえず説明しとくけど、相談室4には展示で使うときのモジュールとかが入つてて、自習室1が車両庫。自習室2と3がモジュール保管庫。自習室4はどうでもいいもんが入つてる。」

そう説明してくれた。

アド先生が自習室1の鍵を開けて、ナヨロン先輩と僕が続けて入つた。

「名寄君。6時間で4周回だから・・・。」

「10分に1回交代が1時間で6回。6時間で36回。それが4つで144回。それだけ選べばいいんでしょ。」

「そうです。」

「じゃあ、適当にやつときますから任せください。」

それを聞いてアド先生は他の部屋に言った。

「あのう。ナヨロン先輩。ここにあるものつて全部アド先生のなんですか。」

「ああ、だいたいな。時折OBが寄贈した奴があるだけ。」

「あつ、223系とか「サンダーバード」とかいろいろある・・・。

「自分が走らせたいやつなんでも入れていいよ。でも時折・・・。

「それじゃあ223系と「サンダーバード」と「253系」^{ネックス}と100系。」

「ああ、ごめん。言つてなかつた。走らせたいって言つても新幹線はなしだ。^{しんかんせん}新幹線が在来線走ることになるからな。」

「でも、E3（イースリー）系とか400系はあつてことぐるよね。」

「確かに。そういう言い方するとそなつちやうな。・・・入れたいのか。」

「はい。」

「分かつたよ。じゃあ2本はHントリーでいいな。」

それからといふもの僕達は2段ベッドの下を占領している箱の中から走らせたい車両を引き抜きまくつた。キハ283系「特急スーパーおおぞら」。485系3000番台「特急はつかり」。E351系「特急スーパーあずさ」。383系「特急しなの」。373系「特急東海」、「快速ムーンライトながら」。683系「特急しらさぎ」。787系「特急つばめ」。代表的なものはだいたい入れた。だが144も車両を選ぶとなるとどうしてもネタが尽き気味になる。3年もこの部活にいるナヨロン先輩でも困るくらいだ。

「そうだな。今回は313系の0番と211系の5000番つなげて中央線の快速やるっていうのもいいな。」

「ナヨロン先輩。去年の文化祭きて思いましたけど、313系に211系を連結した運用つてあるんですか。」

「あるよ。歓迎旅行の時にも乗つただろ。御殿場線の列車。後ろは211系だつたけど前は313系の3000番だつたじゃないか。」

「あのう、そんなこと言われても分かんないんですけど。」

「だよなあ。313系つてややこしいからな。」

ため息をついて説明し始める。

「まず0番台が東海道線の快速で4両編成だろ。300番台がその2両編成バージョン。1000番台は0番台の中央線バージョン。1100番台はそれのLEDバージョンで、1500番台が1000番台の3両編成バージョン。2300番台は2両編成でダブパン装備準備車。3000番台はダブパンの2両編成。2500番台はここ辺の3両編成で5000番台が6両固定の快速用。8000番台は中央線のセントラルライナー用つてな感じだからな。まだいっぞいあるけど。」

「えつ。313系つてそんなに番台あるんですか。」

「ああ。でもこれなんか西日本の223系に似てるんだよな。」

「223系だつたら分かります。0番台と2500番台が関空快速用で1000番台と2000番台が東海道線の新快速用。」

「あと6000番台のダブパン車が地下鉄東西線に乗り入れることができる、ワンパンのやつは221系との共通運用。5000番台は「快速マリンライナー」で5500番台が霜取りようこダブパンになつた2両編成つてな。」

「あつ、223系の中にも知らないのがある。」

「永島なら知つてると思つたけどなあ。知らないんだ。この部活に入つてればいやでも詳しくなる。」

話しながら車両を選ぶ。

「そうだ。永島。貨物列車だつたらどれがいい。2軸貨車だけの古き良き国鉄貨物か、コキ50000形だけの旧高速貨物か、コキ100系だけのJR-Fの高速貨物か。もしくは鮮魚特急つていう「とびうお」か、タキ1000のタンク貨物列車か。」

「別に何がいいっていうやつはないんですけど・・・。つうかそれだつたら家にもあります。」

それを聞くとナヨロン先輩は何か思い出したようだった。
「あつ。そうだった。これ聞いてなかつた。お前文化祭当日何持つてくる気。」

「えつ。考えてるのは「カシオペア」と「北斗星」と「トワイライ

トエクスプレス」と「出雲」と「瀬戸」……。」「寝台特急のほとんどだな。」

「あとは「雷鳥」と「しらとり」ぐらいかな。」

ナヨロン先輩はしばらく考えてから、

「なら。「出雲」はDD51（トテゴイチ）の重連で持つてきてくれない。あと他に「カシオペア」や「北斗星」の牽引機はなにが来る予定になってる。」

「「カシオペア」はEF510の北斗星色で、「北斗星」はEF81の予定ですけど。」

「EF510（アオカマ）とEF81（ホシカマ）かあ。分かった。それで「雷鳥」っていうのはパノラマグリーン。それとも非貫通グリーン。」

「それって何か重要ですか。」

「いや、自分の中にあるイメージを膨らませてるだけ。永島だったら分かるだろ。模型は想像だつて。」

「はい。何となく。・・・パノラマグリーンですけど。」

「はい、了解。・・・「ネックス」のさあ253系の12両編成持つてこれる。」

「できるにはできますけど。」

「じゃあそれも頼む。で持つてくる寝台特急は「カシオペア」、「北斗星」、「トワイライトエクスプレス」、「出雲」、あとは九州特急の何か自分が好きなの・・・って言って分かんないか。「あさかぜ」とか東京から、大阪から九州に言ってた寝台特急のことこういうんだよ。それだけでいい。できれば、牽引機は全区間エンタリーが望ましいけどな。」

「はい、分かりました。」

「大体こんなところかな・・・。これじゃあサヤ達のほう考えてなかつたな。自分達のほうはこれで終わりでいいか。よし永島。サヤ達のほうも考えるぞ。」

他に残っていて有名な車両や特急は883系「特急ソニック」。

小田急のH.I.S.E、L.S.E。2000系「特急南風」。キハ85「

なんぶう

特急ひだ」。781系「特急ライラック」など。

「かわいそだから221系でも入れといてやるか。あとE259系もこっち。225系もこっち。」

「いっちはんも「北斗星」入れときましょうか。あとは「カシオペア」

も。」

「そいつら牽引するEF510（カシカマ）とEF510（アオ力マ）が「いやだ、いやだ。」つていいてるぜ。」

「なんですかそれ・・・。」

「まあそれは冗談だけど。これも入れてやれEF210（モモカマ）。」

「いや、ナヨロン先輩にはEF200のほうがいいですよ。」

「EF200（ハイカマ）。そいつやめとけ。スカイダイブ経験6回の強豪だから。」

「ともかくそれどういう意味ですか。」

「今は知らなくていい。そのうち分かる。」

そんなこと話していくうちにこちらもほとんびナヨロン先輩が決めてしまった。ここにはずっと所属していたから何がどうなつているのか分かつているのだろうか。それともただ自分の好みで選んだのか。

その日の帰りの列車。小楠おぐすに停車した時だった。

「あれ、ナガシイ。」

振り向くと萌の姿があった。同じ方面に通っているのだが、いつもあつたのは久しぶりだ。

「よーす。久しぶり。」

「なあ、萌。あたし邪魔見たいだからどつかいつてるか。」

萌の隣の人くびきが聞いた。

「別にいいよ。ここにいても。」

「お前が小楠おぐすくるって珍しいな。」

「今日は友達とこっちに来ただけだから。」

「へえ。」

「そうだ。ナガシイ。そつち文化祭つていつある。」

「確か、・・・何日だっけ。」

「そういうと思つたよ。ナガシイそういうことにしてないもんね。」

6月13日でしょ。」

「ああ、確かに。」

「見に行くからよろしく。家から何か持つてくれる。」

「「カシオペア」とか「北斗星」とか。まあいろいろ持つてくれよ。」

「じゃあ、貨物も持つてくわけ。」

「貨物は持つてかない。学校にあるみたいだから。」

「そう。じゃあ26両はやらないんだ。」

外を浜松方面に向かう列車が通り過ぎる。

「何系。1000系。それとも2000系。」

「パンタ見えないから分かんねえよ。△分普通だから1000系だろうな。」

「でも、1000系も2000系も関係なしに普通とか急行に使つてるよね。」

「確かに。最初から運用が分かつてればいいやつて苦労することもないんだろうけどな。」

「ハハ。・・・部活楽しい。」

「うん。先輩達はみんなハイテンションだし、一年生は多いし中学生からも入部があつたくらいで。」

「へえ、多いんだ。その中に女子とかいる。」

「いるよ。同じ学年の中に隠してなければお前と似てる人もいるんだけどなあ。」

「・・・。」

このとき会話を聞いていた友達。黒崎には端岡が言った言葉が再生されていた。

(あのことって本当だつたんだな。電車の話してる時のまづが生きしてるので。)

「へえ、そつか。かくしてなければ私と同じね。中に入るんだね。
そういう人。」

「まあ、女子ならそういうことは意識しちゃう人もいるだろ? な。

「・・・なんでそんな話すんのよ。暗くなるじゃん。」

「ああ、そうだな。じゃあなんか別な話でもするか。でも、何話す。

「ナガシイ、2日で熱海行つてきたって言つてたじやん。その時の
話でもいいじゃん。」

「ああ、そん時の話かあ。いいよ。」

話している間に芝本に到着。萌は小楠おぐすから乗つてきた友達と別れ
て、僕と帰路に就いた。

「文化祭に持つてるのは去年と同じで身分証でいいんだよねえ。」

「ああ。多分それだけでいい。」

「それじゃ6月13日見に行くから。」
そういうて萌と別れた。

18列車 模型選び（後書き）

今回は会話がマニアックすぎる「めんなさい」。この先も時折このような列車が出てくるかもしれません、が、読んでくれる人には感謝。

19列車 運び屋

6月8日。岸川寮に集合。

「おーい、諸君。運ぶぞー。やれーつ。」

サヤ先輩がみんなに指示を出した。するとまずアヤケン先輩が動いて、

「はーつ。」

相談室4から裏声。するとアヤケン先輩はとても大きく口を開けた木の箱を持って相談室4から出てきた。

「おめえらもやれー。」

アヤケン先輩に促されて僕達も相談室4に入る。相談室4にはさつきアヤケン先輩が運んで行つたのと同じ箱が5つ。1年生は2人ずつでこの箱を運び出す。だが、必ずと言つていよいほどドアから出るときには問題になるのだ。箱を長いほうのままドアを抜けようとするときがある。縱に持つと今度は自分達が聞える。でも何とか抜けることができる。抜け出したら階段を下つて寮の玄関まで輸送する。これをこの後何度も繰り返す。2階に戻ると今度は大きな箱の代わりに衣装ケース。部活では白い箱で通じている。これには引き出しの代わりにモジュールが入っている。それを2・3年生は2段。もしくは3段。1年生は1個ずつ運んでいく。

しばらく同じ動作を繰り返していたが、モジュールを乗せる岸川のハイエースの荷台が満タンになつたため、まずこれを学校に運んでいくことになった。

「えーと。一人乗つてください。」

先輩達は行きだそうとしない。むこうで何があるか分かっているのだ。

「えーい。全員右手を上げる。」

何が始まるのか・・・。

「最初はグー、ジャンケン、ポン。」

何が始まるのかと思えば、ジャンケンかよ。

「はい、ハクタ力行つてらっしゃい！」

「アムがお。

「いやあ北斎院君。上にしまってあるモジユール全部出しちゃださ

- 1 -

ハイエースが寮から出でていったところで、僕達は2階に戻つてさつきから出している白いケースを下に運んでくる。玄関には白いケ

「うーん。二重ねで読むのが、いいやつだなー!」

アヤケン先輩が注意する。

「アヤケンその持つてゐ奴また上にのつけようぜ。」

卷之三

四庫全書

「バカ。
下ろせ。もう乗せるな。」

「アケ先輩注意もいいんですけど、運んでくださいね。」

じはなくすると第二陣でハイエースが戻ってくる

が満タンになると第3陣に持ち越し、第3陣が来ると運び出したものはすべて乗りきつた。荷物が全部乗ると僕達は歩いてホールのところまで向かう。

鉄道研究部が展示を行うホールは僕達1年生が授業を受けている南棟ではなく北棟というところにある。ここのは1階なのだ。

ホー^ルの北側には第1陣で連れてかれたハクタ力先輩と第2陣で連れてかれた楠先輩が運びいれたものが詰まっている。僕達は第3陣が到着するまで待つていい。待つこと数分。第3陣のハイエースが到着。後ろから荷物を降ろして、いつしょに運んできた車両も運び出した。

今日の部活はここで終了。これからの一週間はずつと文化祭の準備である。

翌日6月9日。今日部活動はない。6月10日。今日から本格始動。

「まずは作ったモジュールを運びこんでください。」

アド先生の指示で部室にある作ったモジュールを運びこむ。運びこんだら8日に運び入れたところにまず入れる。

「ええ、次は……。名寄君。^{なよひ}1年生ひきつれて特教6の机をここに運んで来てくれる。あと事務室に頼んで昇降口下の長机も出して。」

「分かりました。おーい1年生と中学生行くぞ。」

まずはアド先生に言われた長机から。ナヨロン先輩曰くめんどくさいらしい。その長机を運び出すと佐久間^{さくま}がこういうことをやった。

「永島。バズーカ隊用意。ズドーン。」

「おいおい。」

それをホールに運び込む。軽いには軽いのだが、何回も往復すると手が痛くなる。3往復目で長机がなくなる。次は南棟1階の一番東の部屋特別教室6から机を運び出す。ここには2段重ねで学習机がぎっしりと埋まっている。

「うわあ。「ゴミ」というけにあるなあ。」

「ゴミかよ。」

「とりあえずこれ運んで。一人2つずつでいいだろ。・・・よし、行けーつ。」

今度は学習机を抱えて何往復。もう何回行つたり来たりしたかなんて数えてられない。ふつうなら軽い机でもずつしりと重く感じられた。

学習机が必要数に達すると次はモジュールが並ぶように机を並べていく。一つはホールにある長机とさつき運び出した長机で收まる。もう一つは学習机が長机の代わりになる。

「永島。^{ながしま}その机こっちに持ってきて。」

「アヤケン先輩。これはどっちに持つてたら。」

「木ノ本。^{きのもと}まだモジュールはいい。・・・ああ。あとその「ゴミ落と

してもいいから。」

「ハクタカ。これ中にいれるから受け取つて。」

「んつ。バカ。箱ごと中にいれようとするな。」

「ナヨロン。部誌間に合いつる。」

「サヤのバカ。なんで進めとかないんだよ。」

「おーい、ナガシイ。この・・・アヤケンこれなんだつたつけ。」

「えつ。ああ、「ミニ2号だよ。」

「この「ミニ2号をむにじつに運んどいて。そんでもうつてサメちやん。」このアヤケンの「ミニ3号はあつちに運んどいて。」

「あつ。アド先生。313系の5000番台のギアボックスクださい。」

「ナヨロン裏切るなー。」

「絢乃。フィーダー」の向きで「ここにこれといで。」

「はいはい。」

「こっち一般人通行不可ね。」

「なんですか。そのハルヒ的な。」

「あつ、そうだサヤ。今年はみんなでコスプレする。」

「いいよ。」スプレなんかしなくても。まあ帽子だけはかぶりたいけどな。」

「じゃあナヨロンは全身ね。あとは帽子だけでいいか。」

「勝手に決めんなよ。」

「大丈夫。あれ着て似合いそなのは一年生の中にもいるし。それにナヨロンが着るとなんか渋くなるんだよね。Sレ好きつていうのがその渋さを後押ししてる感じで。」

「どういうやつじや。それ。」

「ねえちょっと1年生集まつて。」

善知鳥先輩に言われて、ひとまずサヤ先輩達のところに集合する。

「ねえ、みんな乗務員が着てる服、着てみたいって思わない。」

「ちょっと考えるところがある。なおこの問い合わせについては醒ヶ井と箕島はヤダ。木ノ本、僕、諫早、空河、朝風は帽子だけならと回答。しまきのもといさはやそらかわあさかぜみ

「でも、一つだけ問題があるんだよねえ。今回は帽子だけつていつもこの数ないんだよね。去年作ったから8人分しかなくて。」

「善知鳥もよくやるよなあ。」

「逆を言うと家庭以外ダメダメだからなんだけどなあ。」

「それは今関係ないだろ。でも何人でかぶるかなあ。女子のやつはあたしのアヤノンの分しかないし・・・、男子のやつは6人分しかないもんな。うーん。よし。あたしの独壇場で決めよう。えーとサヤはかぶるでしょ。アヤケンは外回りってことが多いからいいですよ。ナヨロンは向こうの内勤だからかぶつて、ハクタカもかぶる。あとはナガシイかな。でもあと一人余ってるなあ。・・・じゃあ残りはサメちゃんでいいか。」

「ここまで考える頭があるんだつたらもうちょっと進路のこと深く考えろよ。」

「うるさいなあ。いいだろ。で、あとは女子のほうか。ハルナンがかぶりたいって言つたから・・・。アヤノン別にかぶらなくていいよねえ。」

「はい。」

「うーん・・・。やつぱりかぶせよう。」

「や・・・やめてください。あれかぶつてるとなんか冷やかされそうで。」

「よし。かぶせよう。」

「嫌です。」

この時今まで部誌に取りかかっていたサヤ先輩が何かに気付いた。

「お前ら何やってんだよ。ちゃんと仕事しろ。」

「おいおい。それ今気付いたのかよ。」

「サヤ。本当に眼科か精神科医に行つたら。ヤバいよ。」

「眼科が精神科医に行くのはナヨロンだろ。この知識量と今更教師になりたいっていうこの頭どうにかし・・・。」

「ポカッ。」

「黙つてやれよ。」

「はい。すみません。」

今日はホール入り口手前に凹の集会を完成させるとここまで進んだところで解散。この次は次の日にまわる。

6月11日。今日は真ん中に設置する大周会の一〇〇田。この周回は長方形で組成させる。

「ナガシイ。この「綾瀬車両区」をむこうに運んで。」

ここで呼ばれた「綾瀬車両区」とはモジュールに付けられたタイトルらしい。

「で、ハルナンはこっちの「青木海岸」を運んでつて。それで、ミツシイは「青木海岸」の片割れ運んで、サメちゃんはこの「ピザ」をお願い。」

ちなみに「ピザ」とは45センチ四方のピーナーのことである。

「あのう、善知鳥先輩。このピーナー・・・。」

「ピーナーじゃなくて言つたでしょ。」「ピザ」よ「ピザ」。でもいいから運んどいて。」

本人はどうしてもピーナーのことを「ピザ」と呼びたいらし。

「それで、・・・ハクタカ。お前の作った「鷹電」のやつってどこのにある。」

「それだったらもう使いましたけど。」

「ここに一枚余つてんだけど。」

「善知鳥先輩バカですか。それは「鷹電」じゃなくて「貨物駅」ですよ。目玉あんのか。」

「ナガシイ」めんね。ちょっとハクタカ待てー。」

「まったく。子供かよ。永島。この「貨物駅」持つてつて。セッティングは俺がやるから、仮置きだけでいいよ。」

とまあごたごたがありながらも何とか完成。ここで今日の活動も終了。続きは6月12日に持ち越しである。

19列車 運び屋（後書き）

気づいたら文字数がえらいことに・・・。
このままいつたら最終回までに文字数と読了時間が・・・。
自分でもこれはすごいと感心します。

あと展開が遅くてすみません。

それでも読んでくれる人には感謝です。

これからも根性で続けていきたいと思います。

20列車 文化祭前日

6月12日。いつものように朝学校に登校する。

「はあ。ながしま永島いいよなあ。部活でクラス展の準備逃げられるんだから。」

「何。逃げたかったらお前も鉄研とかに入ればよかったのに。」

「いや。俺はもう部活には入る気なかったからな。こうこう時に限つてそういうのが裏目に出来るとは。」

「そういうえば、俺たちのクラスってどんなクラス展やるの。」

「お前ホームルームの時に言つてたやつすぐ忘れてんだな。そこまではつきりした頭だつたら俺も持ちたいよ。・・・お菓子みたいなの作つて売るんだつて。」

「へえ。」

「でも、ながしま永島の場合は来れないの前に来たくないだよなあ。クラス展より部展のほうが楽しいだらうから。」

「まあ、確かに。」

「ならこいつから見に行くか。その時は差し入れ持つてつてやるよ。」

「気持ちだけにしてくれ。」

「分かつた、分かつた。気持ちだけってこと投票は鉄研部に入れとくからな。」

「えつ、何。投票つて。」

「本当にほつきりした頭だな。何も聞いてない。ある意味感心するよ。」

「いやあ、それほどでも。」

「ほめてないつてこと分かつてるよねえ・・・。」

「そりや当然。」

8時30分。普段通り点呼。9時00分。文化祭準備開始。部活としての集合は10時00分。それまでの間クラス展の準備をほん

の少しだけ手伝う。9時55分。南棟3階の部屋から田の前の階段を使ってホールに赴く。ホールにはもうすでに部隊は終結済み。僕達が最後に集まった。

昨日とおとといで模型を走らせる周回は完成している。今日やるのはこれから設置するプラレールの展示と周回に電気を流すための配線作業をすることだ。

「おーい一年生。むこうの武道場とかつていつといからベニヤ板持ってきて。」

サヤ先輩の命令でまずはベニヤ板。それを持ってくると次は学習机を等間隔で並べその上にベニヤ板をかぶせ、シートをせりにかぶせる。だが、このシートをかぶせる作業が以外と疲れる。

「ねえ、善知鳥先輩。こゝ机ありますか。」

今机の上に乗っているが、足を降ろすところを間違えば机に頭を打つ。

「大丈夫。そこにはあるよ。」

善知鳥先輩が机の下に入つて上にいる僕に安全だと信号を送る。それが終わつたところでゆっくり足を降ろす。下の地盤がかたい。机の上だ。端まで来て、飛び降りる。もちろん端まで机があるわけではないので、ここも踏み外したら机に頭を打つ。とりあえず何の事故もなく完了。

次はOBが持つてゐるというプラレールを設計図通りに敷設すること。設計図にはレールに当たるところが線で示されており分かりやすい。そしてその線に少し交差するように書かれているのは継ぎ目のことだという。

「とりあえずやるか。青木さんもこゝもつちよつと詳しく書いてくれれば分かりやすいんだけどなあ。」

「まあそれでもやるしかないだろ。今日は青木先輩手伝いに来れなんだから。」

「んじゃあ。ナガシイ。このレール類とにかくつなげまくつて。直線レール5本。」

プラレールは鉄道ファンたる者全員が通る道。いつもの手つきでレールを繋げていく。一方その時サヤ先輩達はプラレールをガンガン繋げていく。だんだん形ができてきて真ん中あたりに橋脚を10個くらい積み上げたタワーが完成した。

「おーい、サヤ。そつちから何人か引き抜いていい。」

「ああ、いいよ。」

「永島、箕島。ちょっととこっち来て。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹の周回にやつてくる。

「これから配線つてやるんだけどさあ。それやつてくれない。そんでやつて覚える。以上。」

「あの。名寄先輩。それじゃよく解んないですよ。」

「さすがにいい加減すぎたかな。」

と言つて床に置いてある黒い箱を手に取つて僕達に見せた。そこには青と白のコードの先端に端子が1個ずつついているコードとうかる端子が3つついているコードの2種類が入っている。またそのコードの中には赤と黒だつたり茶色と白だつたりと色にバリエーションがあった。

「これをファーダーつてとこひにつけないのは内回りと外回りを1つちとこひまでつなげる。永島だつたら分かるよな。」

「ああ、まあ。」

「それで繋げる時にやつちやいけないのは内回りと外回りを1つちやに結線すること。そうしたらどつちかが逆走することになるからな。そこだけ気をつけてやれ。」

「これだけ支持された。ようはつなげばいいのだ。」

ファーダーというのはだいたいどういう恰好をしているかというと3パターンあると言つていい。まず一つ目は線路にコードの端をくつつけているタイプ。二つ目は線路に電気を流せるようになつている専用の線路にくつつけるタイプ。あともう一つは線路の特定の場所に差し込んでくださいといつタイプ。学校にあるのは2番目にいったタイプ。このタイプのファーダーはこの周回の中にも4カ所。

コントローラーの位置からは柱の陰になってしまった部分。その次は一つ目のファイーダーのあるコーナーの反対側のコーナー。三つ目は二つ目のファイーダーがある一の反対側のコーナー。ここがコントローラーから一番近い位置にある。そして四つ目のファイーダーは三つ目のファイーダーの反対側のコーナーに設置してある。ここからさつきナヨロン先輩が見せてくれたコードをバンバンつなげてコントローラーに結線した。

結線が終了したら次は電気が流れるかどうかのテスト。前にナヨロン先輩と選んだ中からEF210を取り出して外回りの線路に乗せる。アド先生曰く機関車とマイクロエース製の車両が滞りなく走れば問題ないそうだ。

コントローラーの電源投入。ディレクションスイッチを前進にいれてコントローラーのつまみをまわした。だが、EF210はピクリとも動かない。ライトもついていない。

「どうしたんだよ。こいつ。」

「あっ。永島。ながしま そいつはゴミだ。モーターがいかれてるから。EF

510（レトサン）にして。」

「あっ、はい。」

EF210を線路から外し、ナヨロン先輩が持ってきたEF510を線路に乗せる。気を取りなおして、再び電源投入。するとEF510は少しピクッと後ろに動いた。このままでは逆走になる。ディレクションを前進から後退にしてまたつまみをまわす。今度はちょっと前に進んすぐに滑り出した。コントローラーから離れて少しの間EF510の走っている姿に見入る。家でいつも見ている光景と分かっていても飽きない。

とりあえず何の滞りもなく一周。次はマイクロエースの箱を探してその車両を走らせる。とりあえず手に取ったのは783系という九州の特急車両。それを外回りに並べて同じ動作を行つた。すると少しづかり突つかかってしまうところがある。そこを木の板で修復しながら、783系を何周かさせる。その間に問題も解消。次は貨

物列車などの編成もの。これが途中で連結を解除しなければ完了。」

なのだが、毎回どこかで貨物列車は開放すると言つたので、これに完璧を求めるることはできないようだ。

とりあえず貨物列車も何の滞りもなく一周。これで電気系統は完了だ。

この時にはプラレールのほうも50%がたで完了している。ふと時計を見ると12時13分となっていた。昼ごはんの時間だ。昼ご飯には持ってきた弁当。食べるのが面倒くさいと思いつながら、流しこんで13時05分作業再開。午後はプラレールの準備。遊びながらやっていたため15時ちょっと前に作業を完了。次は、体験運転の「ナー」の設置である。

「諸君集まれ。」

善知鳥先輩が全員を衣装ケースが積まれている前あたりに集めた。

「これから体験運転のやつを組み立てるんだけど、時間ないから全員でやるつ。」

「だから、あれさつと片付けとけって言つたの。」

「さつさとつていう前に青木さんいなかつたからビリ組み立てていいかわかななかつたじやん。」

「てめえら、時間がないならはじめよ。そんなとこひで時間くつてるなよ。」

アヤケン先輩が話に歯止めをかけて、全員に複線の高架レールを手渡した。

「まずはそのレールつなげ。」

全員に行きわったのを確認して指示を出した。

「あつ、待つた。まだダメじやん。おい、善知鳥。白い子ない。白い子。」

「えつ、白い子。」

「ほら、アヤケン。白い子。」

「サンキュー。」

ナヨロン先輩から渡された箱の中には横2cmくらいしかない直方

センチ

体の白い物体がたくさん入っていた。アヤケン先輩はその1個を取り出して、

「まず、この白い子を高架レールの下の子の部分に取り付ける。2個くらい取り付けて、取り付け終わったらほかの高架レールをつなげる。これやつて。後、下についてる突起下になるように取り付けなきゃダメだぞ。でないと、あーってなるから。」

「あーってどうなるんですか。」

「深入りしなくていいから、まずはやれ。」

さつき言われた動作を行つて高架の直線レールをつなげていく。

それを10何人でやると20本くらいの束が一気にできる。

「全員で直線レール量産してんじゃねえよ。こんなにいらないつて。」

「そのことに気付いたアヤケン先輩が量産を止める。」

「カーブレールだれかやれよ。カーブしない体験運転所作つてビデオすんだよ。運転面倒になるだけじゃないか。」

「あたしそんなこと知りませーん。」

「知つとけ。」

「アヤケン先輩これどうするんですか。」

「多分6ペアぐらい、12本は使うかなあ。それの束ねたやつをもう一度束ねて、4本にしたやつを俺にバスして。そのあとはどうにでもなるから。おい、善知鳥。^{うとう} 橋脚のやつどこにあるかわかる。」

「橋脚つてあのラーメンみたいなやつか。」

「そう。食えるラーメンのやつ。それどー。」

「お前の足元にあるだろが。」

「あー、あーた。じめん。」

「アヤケン先輩。言つたとおりにやりましたよ。」

「あー、サンキュー。うわつ、バカたれ。マガソボケ。」

それを受け取つたら、新幹線^{しんかんせん}のよく見る橋脚を3つ取り出し、線路の継ぎ目に取り付けてる。「カチヤ」という音を立てて、何かがはある。1個取り付ける作業が完了したみたいで、アヤケン先輩がそ

の位置から手を放した。すると橋脚は継ぎ目のことろに礼儀正しくはまっている。さつきの音はこれがはある音だつたらしい。他の2か所も同じ作業で、はめ終わると、体験運転コーナーになるところの一番奥に置いた。

僕たちもただ見ているわけではない。僕は箕島みしまが4本にした高架レールを受け取つて同じように橋脚を取り付ける作業を行つた。

「アヤケン先輩。他のもやつておきますか。」

「いや、これはもういいよ。ていうか、そつちに駅作つてくんない。」

「何駅がいい。綾瀬駅あやせとかでいい。」

「何でもいいけど、綾瀬駅あやせはやめて。出来ればサヤ駅とかのほうがいいんじゃない。」

「それ関係ないだろ。はあ。木ノ本きのもと。多分その箱の中に駅舎の建物があると思うから、それとつて。」

サヤ先輩が指差した箱の中を探してみると汚れた白い駅が出てきた。その看板には「新大阪」と書かれている。どこをモチーフにしているかはすぐ分かるが、本物とは似ても似つかない。

「ありました。」

「サンキュー。後、そん中に白いプレートみたいのがいつぱいあると思うからそれもとつて。それに空いてる溝の部分にさつきの白い子を逆向きで入れて、ほかのプレートとドッキングさせる。それやって。」

サヤ先輩に促されて作業を開始。プレート同士をさつきのレールと同じ要領で取り付け、ほかのプレートを取り付けていく。それが4枚くらいになつたところで善知鳥先輩に手渡し、そのプレートをさつき掘り出してきた駅舎の上に設置した。さらにその上にレールとホームを設置。1面2線の島式ホームが現れた。

「よし、こつちは終了・・・。」

すかさずナヨロン先輩がツツコんだ。

「なわけないだろ。駅舎を境にして両方に垂れ下がつて高架駅が

「狭い日本でも、そういうところくらいはあるよ。」

「あるかもしれないけど、これはないだろ。駅舎過ぎたらすぐに地

面まで下がるのかよ。実物にしても40メートルくらいしかないと。

「なあ、善知鳥。ボケるのもいい加減にしようぜ。こんな駅ないとには変わりないんだからさあ。」

この駅舎から急速落下するフレートの下に橋脚を設置して、垂れ下がりをなくす。これで、さつきからアヤケン先輩がつなげていた高架橋と連結。一周する体験運転コーナーが完成。すぐに配線がなされ、カーブの下にあるフイーダー専用取付口に高架線用のフイーダーを取り付け、コントローラーと結線。E1（イーワン）系新幹線「MAX」と800系新幹線「つばめ」をそれぞれ3両ずつおいて、電気が通ることを確認。両方ともスムーズに走ったため走行テストも完了した。そして、なんとか前夜祭に間に合わせた。

20列車 文化祭前日（後書き）

話を作つていくとだんだんキャラクターに個性が・・・。自分にはもうちょっと文才と考える能力が必要だと感じます。

なお次の話でも文化祭のことなので・・・。本当に展開が遅くてすみません。この状態だと8月のイベントまで行くのにいつたい何日かかるんだか・・・。

2-1列車 前夜祭

前夜祭。

「1年生諸君集まれ。これからも系の運転訓練やるぞ。」

運転訓練とは文字通りのことをする。なんで必要があるのだろうか。
「注意事項は急発進、急停車しない。脱線したらすぐに列車を止める。の一つよ。」

「善知鳥が言えることか。」

「だから、2人ずつ来てまずナガシイとハルナン。次がミッシイとユウタン。次がサメちゃんといサタン。最後がアサタンとソラタンだよ。」

凹の周回に入つてコントローラーのつまみを握る。線路上に置かれた車両はJR東海の車両311系と313系だ。つまみをゆっくり回すと311系のモーター車（3号車 モハ310形）だけがむなしく動き出した。

「列車は知らせてる時はもれなくマックスにしていいから・・・。ポカッ。」

「しちゃダメだぞ。まあどうしてもこいつがだつてゆう模型があつたらやつていいけどな。」

三つ目の注意を受けて1周。1周したら訓練生交代。箕島に代わって運転訓練終了。

1年生全員の運転訓練が終了すると前夜祭に入る。その前に先輩達が配置を決める。

「ナヨロン。そつち何人必要。」

「明日青木さんも来るつていうからこつちは後2人くらいでいいよ。」

「じゃあ、そつちにミッシイとナガシイでいいでしょ。でハルナンがこつちの内勤で、中学生は新幹線の体験運転でしょ。あとは外回りでいいでしょ。」

「それでいいな。」

「永島。箕島。ちょっとこっち入つて。」

ナヨロン先輩に呼ばれて凹の周回に入る。

「えーと、次はここにある車両どれでもいいからここに線路上に並べて。」

「リレーラーとか無いんですか。」

「あるはあるんだけどねあれ青木さんの私物だとかって明日手伝いに来る人がいるもんで、基本使わないほうがいい。」

「なんですかそれ。」

「気にしなくていいよ。ともかくリレーラー使わずに線路上に早く乗せられればいい。」

僕は223系を探して内回りに、箕島は何でもよかつたらしく373系を手に取つて外回りに置き始めた。これはなないと少し難しい。特に機関車などの車輪の多い模型はすぐには言うことを聞いてくれない。僕はいつも家でやっている手つきで次々と車両を整列させていったが、箕島のほうはそうではないようだ。車両の高さに田線をおとして両手で丁寧に並べている。箕島が373系3両をレール上に設置し終わるとき、僕は223系8両のうち6両（3号車サハ223形）を置き終わり7両目（2号車 モハ223形）に取りかかっている時。作業スピードが浮き彫りになる。10秒後ぐらいに作業を完了した。

「終わりました。」

「やっぱりやつてる人は違うなあ。」

ナヨロン先輩独り言のように呴いてから、

「永島。明日223系も持つてこれる。」

「別に必要なら何両でも持つてきますけど。」

「さすがだな。」

「おーい、諸君。」

善知鳥先輩がみんなを読んだ。

「これから、これでレールを磨いてもらひ。」

善知鳥先輩が持っていたのは右手に綿棒、左手に「JUNIOR CLEANNER」と書かれたボトルだった。これでやる作業は大体見当がつく。

「Jのレールクリーナーで線路を磨け。」

そう言つていった。

「さて、やるか。」

「正直これ面倒なんだよなあ。」

「何。永島家ながしまに模型ながしまそういちでもあるのか。」

「ああ、じいちゃんが作ったこれの10倍くらいあるやつがな。」

「・・・」

思わず顔が引きつった。

（さすが、永島家。それを作つたつていうと永島宗一氏ながしまそういちか・・・。）

なんつう社長だよ。暇人なんだか。）

「へえ。根っからの鉄道好きなんだな。」

「ああ。でも・・・、この構図つてちょっとやりづらっこりもあ
るかも。」

やってみると案の定そういうのが出てきた。例えば凹の周回になつているほうでは駅構内。この駅の屋根は線路側に大きくせり出している。つまり綿棒が入り込める隙間が小さいく綿棒の頭も小さいため、レールと接地しにくいのだ。

「ナヨロン先輩、もうちょっと便利なやつつてないんですか。TO MUXのクリーニングカーとか。」

「んな便利なものこの部活にあるけど、持つてきてない。時折、そ
こだけにレールクリーナーぶちまけるだけっていうのがあるから。」

「最低なクリーニングカーですね。」

「永島。その言い方はちょっと違つたぞ。Jの部活はそういう不都合なことは「ゴミで片づけるんだ。」

「ああ、そうですか。ていうか、いまそんな話どうでもいいです。
「ナヨロン先輩。これって他にどういったらしいですか。」

「全部だよ。」

「全部。まだ、駅しかやつてないの。」

「ていうか、木ノ本もここに固まってるなよ。早くしないと6時までに終わらないんだから。」

「でも、時間通りに終わる例つていうのも少ないんですよねえ。」

「そう。時間通りに終わるつていうのも少ないし、予定した日でならないつていう例まであるからなあ・・・で、そんなことどうでもいいだろ。やれー。」

「はいはい。」

全体にレールクリーナーをやると同時進行で、モジュールには列車が走っている。今僕たちのほうには223系が走っている。

「永島。もうちょっとでそっちに列車が行くぞ。」

ナヨロン先輩から注意がある。僕はそれを聞いて手を引っ込んだ。223系はぼくのほうに接近してきたのだが、あるところを境にしてガクッとスピードが落ち、ついには止まってしまった。それもありがたいことに僕の前だ。

「ナヨロン先輩。223系止まっちゃいましたけど。」

そういうと、すぐにナヨロン先輩が駆けつけてきた。

「あー、もうこいつダメだな。」

そう言つてモーターが入つている5号車（モハ223形）を抜き取つて、床を見た。

「永島。ちょっとレールクリーナーと綿棒貸して。」

綿棒とレールクリーナーを渡すと、ナヨロン先輩は車輪を外して、車輪の一つに綿棒の頭を当てた。そのあと車輪の上のあたりから延びる緑色の棒を少し回すという作業を開始した。それを1台車3回。2台車6回繰り返して、再び線路上に戻した。

「永島。走るかどうか見て。」

そう言い残して、コントローラーのほうに行つた。

「永島行つてる。」

「まだ行つてしません。」

そういつたすぐ後、223系のモーター車がピクッと動いた。そし

て、さうぢなくではあるが前に進み出した。

「ナコロン先輩。走りましたよ。」

「了解。」

それを聞くとすぐ223系を止め、前と後ろに詰めた車両を連結。8両にして、走らせた。8両編成もゆっくり動き出し、何とか走ることが確認された。

「永島。これなんて言ひやつ。まあ、特急じゃないのは見ればわかるけど。」

木ノ本が話しかけてきた。

「223系。関西の新快速だよ。これはライターの部分が広がってるから2000番台だね。」

「他のどどう違つんだよ。」

「明日223系の1000番台持つてくるからその時見せてやるよ。一発で分かる違いだぜ。」

「ふうん。そんなに違つんだな。」

「ああ。だつて、テールライトのついている位置も大きさも違つからな。」

「なるほど。」

「おい、木ノ本、永島。話してるものいけどやんと仕事しろよ。」

「だつてもうレールクリーナーは終わつたんだもん。」

「なんか別なこと探してやれ。」

そう言われて、ほかのことを探す。だが、結局レールクリーナーの仕事に落ち着いた。今度はEF510が牽引する貨物列車が走っている。

「なんかいっぽいつないでる。」

「おい、ナコロン。加減しりよ。加減。つなげすぎだろ前夜祭なの」

「いいだろ別に。」

「1、2、3、4、……。」

木ノ本は隣で「ンテナ貨車の数を数え始めた。何ともカラフルなものである。赤、緑、黄色、青、黒、ピンク。本物の貨物列車はここまでカラフルではない。

「15、16、17。全部で17両つないでる。」

「17両か。なんか驚くような数字じゃないね。」

「永島が驚く数字ってなんなんだよ。」

「えつ、32両とかそんぐらい。」

「32両つて。機関車にひけないだろ。」

「いや、引けるつて。1600t級の貨物列車は計画上だけだけどあつたわけだし不可能じゃないつて。それに模型だつたら脱線しない限り何両でも引けるんだから。」

「じゃあ何。40両の貨物列車だつて可能とかつていうの。」

「ああ、言つ。だけどうちじやできないんだよなあ。26両しかないから。」

「十分あるじやないか。」

その話はナヨロン先輩にも聞こえてたらしい。

「なになに。永島コキ26両あるの。じゃあ持つててくれよ。俺17両じゃ物足りないつて思つてんだ。頼む。」

「あつ、いいですよ。機関車どうしたらいいですか。」

「機関車は学校にあるやるでなんとかする。機関車つて走ればコキ引けるんだからな。」

「なんですか。その走ればいいみたいな考え方。」

「だつてそうなるだろ。模型の場合特に機関車は走りさえすればそのあとに何両続いても関係ない。だからそういう答えに行きつく。間違つてないだろ。」

「確かに。」

「うちのEF210（モモカマ）で最高のやつに引かせる。東海道・山陽本線の長大貨物列車をやつしちゃ。」

「いや、それだったら学校のコキも使って32両にするべきです。」「バカ、32両なんてEF200（ハイカマ）が引ける量だぞ。3

390kWのEFF210（モモカマ）に引けるわけない。」

「・・・。考えてみればそうですね。EFF200って定格出力600でしつたつけ。

「そう。6000kWだから引けるの。」

「それ実際やつてませんよねえ。」

「やる前に電氣的問題があつてな。今の電氣事情のままじゃだめだからやれないだけ。もつと電氣の供給能力が上がれば、やれるらしい。」

「持つてくるか持つてこないかつていつところから結構話が脱線してるんですけど。」

「あつ。そうだったな。じゃあ、悪いけどそれもお願ひね。」

「はい。」

18時00分。前夜祭終了。作業もやることがないため活動は終了した。

家に帰るとすぐに車両庫に走った。

（えつと、223系1000番台とコキ26両と「253系」と、「カシオペア」と「北斗星」。なんかたくさんあるなあ。引き受けすぎたかな。）

つすうすそう感じながらも執事に頼みに行つた。

「お願い。明日の文化祭でこれを高校まで運んでほしいんだけど。」
「そういうことでしたら、喜んでお引き受けしますよ。車両を運ぶついでに坊ちゃんもお乗りになつたらどうですか。」

「いや、送つてくれるのは芝本まででいい。そこからは電車で行く。」

「はあ、しかし・・・。」

「いいんだつて。そのほうが楽しいから。じゃあ、箱はもう車に積んどくから。」

そつと車両庫のほうへ走つていった。

その後ろ姿を見ていたのは執事だけではなかつた。

「なんか、昔駿君に引き連れられて浜松駅まで行つていた時と変わ

らないな。

「

「隆則様。

」

「和田山 手伝つてやれ。」

「

「・・・はい。隆則様。」

「

3箱目を運び出している姿を見ていると昔同じようにここに通つていてたいことのことを思い出した。今自分の息子はその人と同じ学校にいるのだということを改めて実感した。

今回からの登場人物
永島隆則
和田山

2.1列車 前夜祭（後書き）

ようやく文化祭の前夜祭まで行きました。
これから2・3話かけて文化祭の中身。まだまだ先が長いなあ。
ネットにアップしている原作を作りながら思つ今日この頃です。

6月13日。文化祭当日。文化祭は9時からであるが僕達はいつも学校に行くように登校しなければならない。結局家の車で送つてもらつた。こういう措置は模型の輸送のためである。運転手も手伝つてケースをホールに運び込む。

「よーす、ナガシイ。早いじゃん。」

ホールには既に3年生と中学生が集まつている。皆考へることは同じのだろうか。

「ナヨロン先輩。言われたやつ持つてきましたよ。中に言われてないのも入つてますけど。」

「あつ、ありがと。これで今日1日は持つな。」

中で僕の持つてきた箱を受け取つて中身に見入る。
 （うーん。「北斗星」と「カシオペア」と「出雲」と「富士」。あとはEF510（アオカマ）・・・。）これは「北斗星」に対応してゐんだよな。それとEF81（ホシカマ）。いや、これが「北斗星」か。あの機関車はその通りか。で、永島の言つてた言つてないやつつていうのが「しなの」。でも10両つて。まさかな・・・。）

「何がありましたか。」

「いやなんでもない。・・・それと一つ聞くけど、これ全部走るんだよな。」

「昨日走行試験やつてきましたから大丈夫ですよ。全部走ります。」

展示場に箱を入れてから8時25分までホールで遊んで、8時28分に体育館入り。8時50分ごろまでの開会式を経て、9時00

分から文化祭開始だ。

「永島。外に5000番（313系）と300番（313系）の併^{けい}結入れて。」

「はい。内何にするんですか。」

「373系^{サンナナサン}か、311系^{サンイチイチ}か。それとも2500番（313系）と2

「11系の併結か。迷うところだけど、ここは373系の「東海」だろ。」

「ですね。」

「箕島。俺たちが行つていいよつたらすぐに走らせて。」
ナヨロン先輩はすぐさま373系の箱を探して、線路に置く。先に内回りの作業が完了し内回りから走りだす。だが、・・・、「ヤベ。永島がパンタ車あつち向きで入れたつてことはあれ逆じやん。」

「名寄先輩。止めますか。」

「もういいよ。直すの面倒だから。そのまま行つちゃえ。素人にはわからん。」

「箕島。外線も行つていいよ。」

「よし、永島次だ。」

「えつ、早くないですか。」

「一つの列車の走行時間は10分。10分の間にに入れ替えしないといけない。もたもたしてられないよ。」

「じゃあ、次は「しなの」行きますか。」

「うん。じゃあ「しなの」外に出して、内回りは・・・0番（313系）と211系の併結でいいか。並べて。」

「10両でいいですか。」

「6両だろうが、8両だろうが、10両だろうがなん両でもいい。」
持つてきた箱から「しなの」を取りだす。この「しなの」は基本編成6両と付属編成4両の10両編成。編成は大阪→長野間で走っている「しなの」の運用である。今からナヨロン先輩が外に取りだそうとしているのは中央本線（中央西線）である快速列車。東海道線の静岡圏（しづおかん）でもそうだが、ここでは313系という新型車両と211系という従来の車両の併結運転が行われているらしい。

作業をしている間に9時00分。一般客の入場が始まり、たちまちホールは子供たちでごった返す。

「さて、ゴジラが入つて来たぞ。」

そういうのは何となく分かる。子供は何でもかんでも触りたがるといつのがある。これは模型にとつて強敵だ。触るということは脱線の危険性が増すということ。普段脱線しないところでも脱線するらしい。ひどい時には走ってる車両を押さえつけるため走っている車両すべてが横転することもあるらしい。

とりあえずこのゴジラは外回りの人任せるとして、9時05分内回りを373系「特急東海」から313系0番台（運用は100番台）と211系の併結に変える。外回りは東海道本線の新快速列車から中央本線の特急「しなの」に変える。ポイントを変えて「しなの」が発車していくのを見送つてまた次である。次はJR東日本に移るらしい。253系「特急成田エクスプレス」とE231系（209系？）の総武線をこれまで走ってきた車両を片づけて線路上に出す。作業を行つていると、誰かに話しかけられた。

「おい、名寄いる。」

「誰だろうか。その問い合わせよつとしていると、

「青木さん。青木さん僕の独断でこっちだから入つてくれさい。」

「マジかよ。そんでもって、これはどうにかならないのか。」

走つてゐる「しなの」を指差した。

「素人には分からないから大丈夫です。」

「分かる人来たらどうするんだよ。」

「来ないことを信じましょう。」

「あのなあ。」

どうやら今来た人は青木というらしい。左側に展開しているブラーールの持ち主なのだ。よくあんなに集めたものだと感心する。その人は机の下をくぐつて僕達の周回に入つてくる。

「とりあえず紹介しとく。OBの青木洋輔さん。」

「それだけかよ。・・・まあようしぐ。時折こうやってくるかもしれないから。」

「あっ、よろしくお願ひします。」

「で、名寄。俺の「きたぐに」が入れる隙間はあるのか。」

「あつ、それ考えてなかつた。」

「おい、考えとけよ。じょうがねえ。サヤのほうで走らせてくるか。

「それやつたら「あたぐに」が死ぬと思ひます。」

「そうだな。じゃあ、次こいつを行つちやえつて。走らせてみよ。」

「へいへい。永島。^{ながしま}外回り「雷鳥」出して。」

「あつ。はい。」

TOMIXの「^{ひこちょう}雷鳥」の箱を開けて作業を開始したが、ナヨロン先輩が言つたあのことが少々気になつた。

「ナヨロン先輩。これ持つてくるつて聞いたときパノラマグリーンかパノラマグリーンじゃないかどつちかつて聞きましたよねえ。なんですか。」

「パノラマグリーンだと支持率がいいつていつかなあ。結構違うからな。」

「へえ。そなんですか。」

「ああ、それもあるけど。パノラマグリーンとそういうやつの違いも見ておきたかったつていうのもあるかなあ。まあ、それはさつき見て分かつたけど。」

「どこのがどう違うんですか。僕にはどつしても国鉄車は同じように見えるんですけど。」

「同じように見えるか。まあしようがないよなあ。大体そういうものしか作つてなかつたていうのあるからなあ。」

外側に「きたぐに」を並べながら続ける。

「パノラマグリーンつてふつうのやつに比べると窓が小さい。後、トイレのところにある行先表示がふつつのまづはドア側の密室窓上にある。だから簡単に見分けがつくよ。でも、中には変り種があるからなあ。パノラマグリーンの最終編成あたりだと思つけど、あいつはほかのパノラマグリーンに比べて窓周りが広い。だからちよつと見分けづらい。」

「へえ。そんなに違うんですね。同じよつて見えるやつも似て非な

るものってわけですか。」

「まあ。そういうところだな。」

「雷鳥」を出している間青木さんは今走っている「しなの」に田を

やつていた。

「名寄。これ持つてゐるの誰だ。」

声をひそめて聞いた。

「永島。あいつだけだ。」

「俺思うんだけどさあ。これ明らかに南さんのやつだよなあ。」

「永島遠江急行の社長の孫だし、南さんがその親戚つてことじやな

いのか。」

「・・・。そういうことだよな。ものすごい大物が入つてきたじゃ
ないか。それでの性格だから誰もそつ思えない。そこがすうじ。」

「ハハハ。」

その頃僕はとくに、文化祭を見に来た鉄道マニアしき人と話
していた。

「」の「しなの」は10両だから大阪から来るやつですわね。」

「ああ、はい。」

「私も高校生の時にねえ、」の「しなの」で名古屋から長野まで行
つたことがあつてね。」

「へえ、そなんですか。」

「私が乗つたときはまだ383系じゃなくて・・・。」

「381系の時ですか。」

「いやいや。もつと前。確かディーゼルカーだつたかなあ。もう4
0年位前の話かなあ。」

そういうとその人は持つてゐるカバンの中から携帯できるサイズの
アルバムを取り出し、その車両を探していった。

「あつ、あつた。これだよ。」

指差した車両の真ん中には「しなの」、その下にローマ字で「SH
INANO」と書かれている。今僕が親しんでいるヘッドマークと
は全く縁のないものである。そして車両はどうかで見たことがある

ような顔をしている。車両は確かキハ181系。おおさか
んでいる「特急はまかぜ」と同じ車両のはずである。

「今じゃこれもねえ、「はまかぜ」だけになっちゃったからねえ。

本当はこれにはもつと走つてほしいんだけどねえ。

名残惜しそうに語つている。この人はキハ181系のことが好きな
のだろう。昔から親しんできた車両であることには間違はないの
だ。

「そうですね。」

なんか暗い話になつてるので話を変えよう。

9時25分。583系「急行きたぐに」、485系「特急雷鳥」
に交代。

「ナガシイ。」

誰かに呼ばれる。今度は誰だかしっかりと分かる。萌だ。だが、そ
れを聞いて唾然とする人もいる。それは3年生と2年生。あとは木
ノ本きのもとである。

(今、ナガシイって呼んだよねえ。この人。)

(まさか。ナガシイって他の人から呼ばれてたあだ名。気に入つて
んだな。)

(彼女か。)

「よーす。「雷鳥」走つてるじやん。それも「きたぐに」と一緒か
あ。」

(この人分かつてる。まさかとは思つけど編成違うとか言わないよ
なあ。)

「それで次はなに走らせるの。「カシオペア」。」

ちょっとナヨロン先輩に目線を向けた。ナヨロン先輩は首を横に振
つて、持つている箱を掲示した。「ワム38000形」の貨物列車
と今自分が手に持つている281系「関空特急はるか」が次に走る
列車だ。

「まだ「カシオペア」は出さないよ。」

「最後まで出さないつもり。」

再びナヨロン先輩に目線を向ける。何もなかつたけどいつか出すと
いうことだらう。

「！」の間にには出るよ。」

「ふうん。」

背をかがめてホームの中をのぞきこむ。

「ホームに停まっているのは「ワム」と「はるか」かあ。」

(「はるか」はまだしも、「ワム」まで分かるなんて・・・。ふつ
うの人だったら「あつ、貨物列車だ。」で終わるリアクションなの
だ。)

「あの「ワム」って駿兄ちゃんの。」

「ううん。部活にも持つてる人がいてね。これその人の私物なんだ。」

(今この人駿兄ちゃんって言つた。間違いない。南さんのことこの
2人は知つてる。)

「んじゃあ、他のどいつもこりと見てくるから。また来たらよろしくね。その間に「カシオペア」走らせたりとかしないでよ。」

「しねえよ。俺の独断でやつてるんじゃないから。」

萌は模型を見ながら、隣の周回のほうへ歩いて行つた。

(あの人つて永島のなんなんだろう・・・。)

今度は木ノ本のいる周回に来て同じように田線をおとした。する

と向こう側から緑色の先頭の車両がこちらに向かつてくる。

「ねえ、これつて「スーパー白鳥」。」

おそらくこれは私に聞いたのだろう。

「ああ、ちょっと・・・。ハクタ力先輩。これつて「スーパー白鳥」
ですよね。」

「うん。そうだよ。」

「だつて・・・。でもよく解るね。」

「昔からナガシイと電車のこと話してたから。特急だつたら名前と
使われてる車両。あとはナガシイが好きな車両くらいだけだけど分
かるよ。」

(永島の彼女なのか。)

「それで、ナガシイの言つてた、隠してなければ私と回りつていうのは君かな。」

(あいつそんなこと言つてたのか。)

「まあ違うってことはないよね。ナガシイと同じ上履きはいてるのこんな中に何人もいたけど、女子つていうのは君だけだつたからね。」

「・・・。」

「あつ、名前言つてなかつたね。坂口萌。^{さかぐちもえ}また展示とかで会つと思うからとりあえず覚えといて。」

「永島から聞いてるんじゃ隠すこともないか・・・。木ノ本様名よ。^{きのもとなまな}同じ鉄としてよろしく。」

「木ノ本さんね。よろしく。」

ふと永島を見て、

「やつぱり彼女創るなつていう方が無理だよな。」

「いや、別にあいつのこと彼氏とか思つてないから。」

「ふうん。木ノ本さんがどう思つてるか知らないけど、ナガシイは私以外に彼女を創らない。これは断言できるんだけどねえ。でも言つといてよかつたかも。」

「・・・。」

「ただ、一つだけ問題があるんだよねえ。まだ本当のことを言つてないし・・・。」

「おい、言つてないなら言えよ。」

「私が今言つたのはそういう意味もあるけど、違う意味もある。あいつには秘密にしといてほしいんだけど。」

その内容を聞くと、

「秘密にしとく必要があるのかよ。それ。正直に話した方がいいだろ。」

「そつは思つてゐるんだけどね・・・。『めん木ノ本さん。この話はまだどこかで会つた時にお願ひ。今はいろいろとまづいから。』(今のこと)全部本当・・・。」

永島のいる周囲のほうに歩いて行く後姿を見ながら心の中でつぶやいた。

今回からの登場人物
青木洋輔 誕生日 11月1日 血液型 A型 身長 159
cm

22列車 当田（後書き）

話がブレしていくすみません・・・。

展開は考えたところで成り行きとすることが多いので、これからも
そういうのが出でてくるかもしれません。

そんなのでも読んでくれる人には感謝。

根性でまずは高校一年生の最後まで持つていきたいと思います。

23列車 話し合ひて・・・

一方僕達はとこりと展示に追われて、次に何を出そひか話しあひている。

「今まだ1-1時。「カシオペア」とか行くには絶好の時間なんだろうけどな。」

「見に来てる人も多いし、今出しちゃえればいいじゃないんですか。12時になつたら食料調達しこどつか行つちやいますよ。」

「おい、名寄。^{なよろ}ネタに困つたらここれ走らせればいいじゃん。」

「青木さん。「ライトレール」はまだ。文化祭の最後の最後で暴走させるんだから。」

「「ライトレール」暴走させるつて。それはどうだろうか。」

「でも、「ライトレール」はそつこり走つてるんだよ。風景以外は問題ない。」

「いや、別な意味で問題があります。40km/hしか出ない車両がなんで400km/h出すんですか。」

「そこは御愛嬌。」

「そんなことよりもまだ走らせてないやつだつていつぱいあるじゃないですか。223系とか、^{二二三系}223系とか、^{二二三系}223系とか。」

「お前、223系^{二二三系}好きだな。」

「100系がいなければ1位ですから。」

「じゃあ100系暴走させようぜ。在来線だけび、^{レイチャウ}新幹線がありならありだろ。」

「その片割れ何にするんですか。0系ですか。0系はちょっと。^{レイチャウ}」

「何の系嫌なのか。」

「そんなことはないです。でも、両方ともこりに持つてきません。」

「なんでそんな話になつたんですか。もう「カシオペア」と「北斗星」出しますよ。」

「いや、待て。「北斗星」は「北斗星」でもバリエーションを持たせた方がいい。例えば「夢空間」とか「夢空間」とか「ゆうトピア」とか。」

「最後関係ないぞ。なんで「夢空間」って言つてて「和倉」になるんだよ。おかしいだろ。」

「青木さんもナヨロン先輩もやめてください。オヤジギャグにもなりません。」

「よし。永島。何に牽かせる気。EF81（カシカマ）。それともEF510（アオカマ）。はたまたEF81（ホシカマ）か。」「カシオペア」はEF510-（の）502号機で「北斗星」はEF81-（の）133号機です。」

「分かつた。並べる。」

ナヨロン先輩の承諾を受けて内回りに「カシオペア」を外回りに「北斗星」を並べ始める。すると、

「ナヨロン。次なに行くつもり。」

サヤ先輩がモジユール越しに話しかけてきた。

「内回りが「カシオペア」で外回りが「北斗星」の1号だな。いや編成の向き・・・。」

「なあ、「カシオペア」いつに貸してくんない。いつからは「北斗星」貸すから。」

「んなカオスにしたいなら「トワイライト」でやればいいじゃないか。」「トワイライト」だったら珍しさがないだろ。」

「その前に「カシオペア」貸してほしいかは永島に聞け。こいつのだから。」

「ごめん。「カシオペア」貸してくんない。」

「それだったら毎回家でやつてますから。それに撤去すんの面倒だから嫌です。」

「1年に拒否権は・・・。」

「ある。」

すると、潔くあきらめていった。サヤ先輩のおかげで作業が停滞していたが、作業を再開。すぐに2・1号車（スロネE27-200形・カハフE26形）と牽引機（EF510-502）をレールにのせた。ナヨロン先輩の腕時計で11時01分「カシオペア」が出発。11時04分に「北斗星」が出発した。

「永島か。箕島。どっちが昼食食べてこい。」

「えつ、でも。」

「大丈夫。こっちが編成順に片しどぐらい。」

「・・・。」

「じゃあ、僕が行きます。永島。運転変わつて。」

と言つわけで、まず箕島が昼を食べに行くことになった。僕は箕島から運転を変わり、運転席についた。青木さんとナヨロン先輩は次の車両について何にするか話し合つている。

「ナガシイ。次はなに走らせるわけ。」

「永島。お前の「出雲」DD51（デデゴイチ）の重連で召喚して。」

「分かりましたけど。外回り何にするんですか。」

「外回りは泣く子も黙る「急行だいせん」だぜ。」

泣く子も黙るのか・・・。

「だつて。」

「「出雲」は聞いたことがあるけど、「だいせん」って何。キハ58とか使つたやつ。それとも「きたぐに」みたいに583系使つたやつ。」

「おいおい。山陰本線は電化されてないんだぜ。583系走れるわけないじゃん。」

「あつ、そうか。・・・ああ、ちょっと私バカになつたかも・・・。」

「それ分からなかつただけでバカになつたつて言つなよな。また1

から覚えようつていう人もいるんだから。」

（木ノ本さんのことだな。）

「へえ。一からね。」

「坂口じやん。」

その声とともに来たのは宿毛だった。

「宿毛久しぶり。」

「宿毛。クラス展のほうどうなつてゐる。」

「クラス展のほうはまあふつうくらいだよ。やつてる位置が悪いっていうことはないけど、なかなか客の量が上がらないっていうかなあ。多分ほかのところと割れてるんだと思つ。」

「クラス展何やってるの。」

「お菓子とかの販売。」

「楽しそうだね。」

「楽しそうだねって言つても坂口も来る気はないんだね。いろいろほつが断然楽しいから。」

「まあな。」

永島は「出雲」を線路上に出すために今は運転台にいらない。その

コントローラーを見つめていると、

「ねえ、宿毛。これいじつていいと思つ。」

「ダメだろ。いくら模型いじれるからってそれはダメでしょ。」

「いいじやん。少しくらいマックスにしたつて。」

その会話は十分聞こえた。

「おい。そのコントローラーマックスにするなよ。家じゃないんだから。」

と注意されてしまった。

「はいはい。ただの冗談だから安心して。」

「お前の場合どこからが冗談でどこからが本気なのかわからんねえよ。」

「ほんとは冗談のはずだから。」

「はずってなんだよ。」

「ハハハ。」

(永島のやつ。やっぱり坂口と話してたほつが生き生きとした感じ)

ねえか・・・。そつか。鉄研だからこいついう機会があるのか。だつたら俺が心配するまでもなかつたかもな。」

一方、他の区画では。

「ねえ。あの人つてわざわざからナガシイと話してるけど、ナガシイの彼女かな。」

「善知鳥先輩には何でも彼女に見えるんですね。」

「永島のやつ。うらやましいな。」

「何。サメちゃんもナヨロンと同じで彼女募集中か。」

「えつ。まだ一度も縁がないですから。て言つか名寄先輩も募集中つて。彼女いないんですか。」

「頭いいけど、半分電車が恋人状態だからな。それで縁がない。ところで、佐久間はどこに行つたか聞いてないか。」

「多分他のクラス展とかに行つたんじゃないですか。」

「あのバカ。アヤノンだけに任せるとんじやない。アヤノンをいじれないじやないか。」

(そのためだけに。)

また・・・、

「おーい、アヤケン。貨物ぶつ倒れた拾つて。」

「なあサヤ。これどこで落ちた。」

「ここのおぐすかもつ小楠貨物で倒れた。」

「おぐすかもつ小楠貨物があ。よく俺こんな「コミ作つたな。」

「コミかよ。」

「あいよ。落ちたコキはこれで全部。」

「バカ野郎。コンテナも落ちてどつかに吹つ飛んでる。探せ。」

「えつ。その状態じや何かダメなのか。」

「どういう状態か説明しよう。左側からコンテナがあり、あり、なし、なし、なしの順になつている。」

「この状態じや」

「になるだろが。」

「解読不能のところだけ裏声でした。」

「せめて、日本語しゃべれ。」

「日本語ですか何か。」

「ウソつけ。」

「ナヨロン先輩。また「雷鳥」行くんですか。」

「バー力。またって言う言い方は何だよ。国鉄って言うのはようは頭だ。どんな編成考るかで走らせるパターンって言うのは何百にもなる。「雷鳥」には「だんらん」をいれて、一番後ろに「ゆうトピア和倉」をくっつけて、「雷鳥」に引っ張らせる。」「

「そんな編成あるんですか。」

「あつただ。国鉄に正統性を求めるところはどうかしてるぜ。それがあからさまに出るのは客レとかディーゼルだな。キハ58にキハ10とかそういう方面を連結したとかっていう実績だつてあるんだ。・・・いや、くつつけたのはキハ40だったかな。」

「分かりました。ていうかそんなことどうでもいいです。」

12時42分。僕は持ってきた弁当を食べに一度管轄を離れた。弁当を食べ終わって戻ってきたのは13時03分ごろだった。

「昼食べきました。」

「へーい。・・・永島。ながしま 223系の2000番台8両。内回りに出

して・・・。つていつても、外回りどうするかなあ・・・。」

「永島さん。次外回りなんか走りますか。」

諫早がクラス展をきり上げてやつてきた。

「ああ、まだそれ決まってないんだけど・・・。内回りは223系の新快速が行くみたいだけど。」

「じゃあ、ちょうどいいですね。僕のこれお願ひします。」

そう言ってKATOの箱を差し出した。箱の背には「223系2000番台 1次車 4両セット」と書いてあるが、表には「223系6000番台4両セット(富原)」とシールで直してあった。

「ナヨロン先輩。諫早がこれ行つてほしいって。」

今この箱をナヨロン先輩にも差し出す。ナヨロン先輩も箱の背と表で表示が違うことを不思議に思ったかもしない。だが、中身を見ると納得したようだ。

「諫早。これよくやつたな。ダブパンつてことは富原にいる600番（223系）だよな。」

「はい。」

「これだつたら、もうワンセット繋げて、「丹波路快速」とか「直通快速」とかやつた方が面白い。ここまでできるんだし、これで終わらせるのはもつたいたいぜ。」

「名寄さんならうかつと思つて、もつワンセット持つてきます。」

「えらい。なんか他に持つてる車両とかつてある。」

「今はないですけど、家に223系のパンタを全部シングルにしたやつと同じ6000番台の網干にいるやつと211系の3000番台を無理やり5000番台化したやつならあります。」

「つーん。なるほど。でもそいつらは次だな。」

「ああ、あと名寄さん。もしカーブとかでこけたら「こけんじやねえよ。ボケ。」とかつて言つてください。僕が許します。」

「はいはい。でもこれこけないようになつてるだろ。明らかに重量感違つし。」

「ああ、はい。くつづける方はモーターぶち抜きましたから。」

その時にはもう編成を理解していらっしゃい。

「永島。新快速を1号車（クハ222形）からこの方向で入れてくから6000番は8号車（クモハ223形）むこうで入れてつて。」

ナヨロン先輩から箱を受け取つて言われたとおりに並べていく。レールに置いて行く順番は8号車からではなく1号車から。こうしないといれずらい。なぜかといふとこれを並べる線路の隣に建物が隣接しているからだ。

「ナガシイ。手伝あつか。」

「いや、大丈夫。それに、これ人のだし。」

「223系の・・・2000番台。なんか顔似てるよねえ。」

「いや、こいつは2000番台じゃなくて6000番台。モーター

車のパンタ2つだし、ちょっと分かりづらいけど乗務員室扉のところのラインの下にオレンジのラインが入ってる。」

「ホントだ。223系も大家族だからなあ。分かりづらいね。」

「でも、先輩の話聞いてると223系もそんなに親戚たくさんじゃないみたい。313系のほうがもっと親戚たくさんなんだって。」

「ふうん。」

「ねえ、ナガシイ。」

善知鳥先輩に呼ばれる。

「何。ナガシイ、鉄研でもナガシイって呼ばれてるの。よっぽど気に入つてんだね。このあだ名。」

「・・・なんですか。」

「そつちにさあ138系か981系の「あずにゃん」ない。E253の「あずにゃん」走んじゃないんだけど。」

(言つてることメチャクチャだし・・・)

「E253系なんていうやつありませんけど、それに138系とか981系つてどう間違えたらそうなるんですか。」

「こじで正しい答えを皆さんには知らせておこう。もちろん、そんなこと知つてるよという人もいるだろつ。まずE253系と間違えられたのはE257系。138系と間違えられたのは183系。981系と間違えられたのは189系である。」

「永島。^{ながしま}探してるのはこいつらだ。渡してやれ。」

さすがナヨロン先輩。善知鳥先輩の言いたいことはこの人にはしっかり伝わっているようだ。

「ナガシイ。バス。」

善知鳥先輩が手を差し出す。僕も手を伸ばしたが、あと少しで届かない。

「ナガシイ、手伸ばせ。「ゴムゴムの一、ピストル。」

「無茶言わないでください。ゴムゴムの実食べるわけじゃないんだから。」

すると外回りをしていた楠先輩がリレーしてくれた。

「アヤノン。邪魔すんなよ。」

「善知鳥先輩。今自分何歳ですか。」

「善知鳥茉衣19歳。永遠の少年・・・ああ、いやいや。永遠の少

女です。」

「・・・。」

「アーツ。EH200（ブルサン）の磷が困るー。」

何となくバルサンと同じ様な響きがする。

「・・・名寄先輩。内回りさつきからどこにいるか分かんないんですけど。」

運転業務についている箕島みしまが疑問をぶつけてきた。

「えつ。新快速しんかいそくどっか行つた。」

「ねえ、ナガシイ。223系あすこで横倒しになつてるけど。」

萌もえがそう教えてくれた。指差している場所は運転台から死角になるところ。行つてみると、223系は全車両が脱線してた。1号車（クハ222形）、2号車（モハ223形）、3号車（サハ223形）と6号車（サハ223形）、7号車（サハ223形）、8号車（クモハ223形）は完全に、4号車（サハ223形）、5号車（モハ223形）はフイーダーのふちに受け止められる状態で横倒しになつていた。

「手伝おつか。」

「手伝ってくれるのは家だけで十分。ここはいいよ。」

脱線の復旧作業として、まずは3号車と4号車、5号車と6号車の連結を解除。そのあと1号車から3号車と6号車から8号車はすぐ線路上に仮置きする。そして4号車と5号車も線路上に仮置き。車両を仮置きし終わつたら随時車輪をレールに乗せる。

「あつ、223系だ。」

ふと顔を上げると自分の前にいるのは萌もえではなく小学生だった。その小学生は今ここから見える範囲をざつと見渡して僕にこう聞いた。「ここにこうこうう部活もあるんですね。中学からでも入れるんですか。」

「ああ、今年は中学から3人入ったからな。」

「へえ。ここの頭いいほうがいいですか。」

「頭よくなくたつていいよ。僕みたいなバカでも入れたんだから。（んじゃあ。僕みたいなバカでも大丈夫なんだよな。よーし。）

「おいおい。僕みたいなバカっていうのはウソだろ。・・・それとも、鉄道バカとしてのバカか。それだったら裏付けるね。」

「アハハハ。」

5号車のモーターを線路上に置くと引っ張られる感覚を覚えた。車輪が明らかに動いている。

「箕島。コントローラー完全に止めてる。」

どうやらその声は箕島にはほどかなかつたらしい。まだ車輪が動いている。

「箕島つ。止めてっ。コントローラーの電源切って。」

ちょっと声を張り上げていうと、青木さんがそれに反応してくれた。

「箕島。コントローラーのノッチオフにして。」

その声を聞くと箕島はつかんでいる新幹線のようなコントローラーのアクセルをもとの位置に戻す。するところまで電気をとつていた223系の車輪も止まつた。止まつたことを確認して、改めて5号車を線路上に乗つける。左側の台車、右側の台車の順に線路に乗つけて、

「223系、行つていいよ。」

そう指示を出すと、またも青木さんが反応して223系を走らせてくれた。

「こういう意味では家でやつてるのより疲れるな。」

「いや、家でやつてる時のほうがもっと疲れる。あれやるつて言っても駿兄ちゃんと俺と萌ぐらいしかいないじゃん。3人しかいないから脱線しても気づきづらいうていうかな。逆にこの人数でやつてるから運転班としては大助かりつてことじやないかな。」

「ふうん。」

一呼吸間をあいて、さらに話が続く。

「今走つてゐる223系つてちよつと短くない。家で走らせてゐるのが

常時1・2両編成でしょ。あれ8両編成だよねえ。」

「常時1・2両なのはうちのレイアウトが全線複々線だから。新快速つてほとんどが1・2両編成で走つてゐるっぽいから。」

「いや、それは分かる。でも8両つていふこともあるのか。」

「あるんぢやないの。電車でGO!に収録される新快速全部8両編成だし。」

「2002年のデータだもんね。・・・外回り走つてゐる6000番台だけ。あれは何。」

「あれつて多分おおさか東線の「ひがしせん直通快速」か福知山線の「ふくちやません丹波路快速」だろ。どつちだか知らないけど。」

「「丹波路快速」は名前聞くだけでどこに行つてゐるのかなあってことは大体見当がつくけど、「直通快速」つてどうとどう結んでるわけ。」

「奈良と尼崎の間らしいけど。」

「奈良から尼崎までの直通ね・・・なんかわざとらしく名前の付け方ね。」

「わざとらしこうしてなんだよ。」

次の車両選定に戻つた。しかし、その頃にはもう決まつていたようだ、内回りにEF510牽引の貨物列車。外回りに「寝台特急トワイライトエクスプレス」がスタンバイしていた。

23列車 話し合つて・・・（後書き）

223系のことが多く出てきますが、自分自身223系のことが好きだからです。

個人的には223系1000番台がお気に入りですが・・・。

こんな話どうでもいいですね。

なお、これからも223系は大量に出てきます。

やっぱり好きなもの書いてる時が一番ノリノリですね。（笑）

24列車 暴走 富山ライトレール

EF510と「トワイライトエクスプレス」が走りだしてからは、次に何を走らせるかの議論。

「在来線にE3（イースリー）系の「つばさ」「しまか」と走らせて何とか時間稼ぎにして、次に旧国鉄いけばいいだろ。『ぎんりん』とか「ぎんりん」とか「ぎんりん」とか。」

「お前さつきから「とびうお」「ぎんりん」にこだわり過ぎ。少しはもっとほかのやつにしろよ。あのキハ58使って、多層建てでもやればいいじゃないか。」

「多層建ですか。やるのはいいですけど、相方が困り……。」

「そんなのいくらでもいるだろ。485系使って「つばさ」でいいじゃないか。」

「いくらなんでも、それはないでしょ。」

「あのう。内回りに「スーパーはくと」で外回りに「スーパーおき」か「はまかぜ」出せばいいじゃないですか。」

「ちょっと待て。今外回りに貨物列車出したんだからさあ、あれを徹底的にいじればいいじゃないか。」

青木さんが口をはさむ。

「えつ、EF510（レトサン）の後にEF210（モモカマ）出して、EF81（チカマ）の重連でED76（ナロカマ）の単機みたいなことするんですか。別に嫌とは言いませんけど、ずっとあれをまわしているつていうのはちょっと。」

「えつ、いいじゃないですか。面白いですし。」

「でもEF510（レトサン）から始まるつていうのはちょっとって思つんですよ。そういうことするならなおさら「3099レ」「3098レ」みたいなことするべきだと思います。」

「また面倒くさいこと思い付くな。」

「その後ナヨロン先輩から教わったことだが、「3098レ」と「3

「099レ」は日本一長い距離を走る貨物列車らしい。走行区間は福岡～札幌まで。途中日本海縦貫線という短絡路線を通つてもその走行距離は2000km以上になるといふ。

「ていうか、貨物だつたら他にもいじりようありますよねえ。機関車変えるだけじゃなくて貨車変えてどうにかするつていうのも。」

「確かに一つの手だけど、変えるの面倒くせえじゃん。」

「おひこり。鉄道マニアがそんなこと言つていいのかよ。」

「じゃあ、僕が変えるでやつていいですか。」

「ああ、それだつたらやつてもいいけど、何にする気だ。タキ。ワム。トラ。」

「タキ。」

「了解。並べる。つつてもその隣に困るんだよなあ。そうなると、

あの「トワイライト」もいじらなこと。」

「EF210（桃太郎）に牽引させて、東海道線つてこいつでし

ちゃえばいいじゃん。」

「それ言つたらほんどの列車そうなるじゃないですか。209系の隣にEH200（ブルサン）のタキ走らせて根岸線とか。その隣にE231系走らせて湘南新宿ラインとか。」

「なんこと言つてたらはじめんだろうが。」

「あのう。外に113系とか行けばいいんじゃないでしょうか。」

しばらく黙つていたが、ポンと手を叩いて、

「その手があつたか。」

そこ感心されても・・・。

その後もこんなギャグみたいな決め方をしながら、走らせる車両を決めてホームに並べる作業。こんなことをしている間にも時間はどんどん過ぎて14時30分になつた。

「さて、そろそろやるかなあ。」

「えつ、ナヨロン先輩あれ冗談じゃないんですか。」

「冗談なわけないだろ。やると言つたらやる。次の周回で、内回りキハ56（キハゴロ）と外回りキハ22（キハ二二）を停車させる。キハ56（キハゴロ）と外回りキハ22（キハ二二）を停車させる。」

やるぜ。」

そういうつて車両の入った箱を詮索。箱を三つ取りだして箱を開けた。中には小ぢんまりとした白い車両が入っている。色はそれぞれ違つて一つは赤、二つ目は緑、三つ目は紫だつた。そのうち一つ。赤と緑をいつもの手つきで線路の上に置いて気動車の到着を待つ。気動車が到着するとポイントを直線に変更。

「箕島。^{みしま} 運転変わつて。」

珍しくナヨロン先輩がコントローラーのつまみを握る。すると、一気につまみをまわした。停車していた車両は勢いよくホームを飛び出していった。

「あつ。ナヨロンのやつ、「ライトレール」走らせてやがる。」モジュールに比べてとてもちっちゃい車両を善知鳥先輩が発見する。「ナヨロン。それはあたしの専売特許よ。勝手に使うな。」

「うるさい。ときにはいいだろ。」

「おい、^{なよろ}名寄。^{なよろせん}新しい仲間。」

「おお。万葉線。」

内回りを止めて同じ線路上に青木さんから貰つた車両を置く。この車両は「ライトレール」とよく似ているが、少し違う。置き終わると再びつまみをマックスにした。すると、今度は外回りと駅の反対側に止めて紫の「ライトレール」を置いた。当然、こちも置き終わると暴走させた。

なぜか走らないけど、この「ライトレール」の暴走は子供たちには好評のようだが、部員には好評ではない。むこうの管轄の人�이出てきて、レールの上に手でトンネルを作つた。

「あつ、バカ。取るな。」

「ハクタカ。そっちの「ライトレール」取つて。」

「永島。^{ながしま} 「ライトレール」死んでも守れ。」

なんなんだろうか。この状況。

「ハクタカ取るな。」

「ヤダよ。人には散々編成違うとか言つといて自分はこんなことし

てるんだから。」

「いいだろ。間違つてないし。」

「そこ違うだろ。根本が間違つてますよ。」

ハクタ力先輩は走つてきた内回りの赤い「ライトレール」の速度に合わせて、トンネルを作つた右手を滑らせる。滑らせるのと同時に「ライトレール」を掴んで、レールの上から外し、自分達の周回へ持つていつた。

「ちくしょう。一つ持つてかれた。楠。^{くすのき}そつちに取られたの取り返して來い。」

「絢乃^{あやの}。取つたらお前の恥ずかしい話クラスにばらすぞ。」

「この。バカタ力。」

「ちょっとアヤノン邪魔。取れないじやん。」

「ちょっと、どこ触つてるんですか。」

「永島^{ながしま}。箕島^{みしま}。死んでも守れ。」

と言つた時にもう遅い。紫色の「ライトレール」は善知鳥先輩に取られてしまつた。

「サヤ、「ライトレール」取つたぞー。」

「オッシャー。」

「よーし。こっちもやるぞ。」

「家でやるときにはないすさまじさだね。」

萌^{もえ}が話しかけてきた。確かに。家でやつてこるのはこんなことはない。ただ普通に車両がゆつくりと走つてているだけである。もちろん、新幹線はゆつくり走つてないが。

「確かに。でも、楽しくていいよ。こつこつともあつて。」

「ハハ。・・・ナガシイが持つてきたやつ大活躍だったね。」

「ああ、ちょっと持つてきすぎたかなあって思つてたけど、そうでも無かつたよ。先輩なんかもっと持つてきてもらつた方が良かつたかもなあつて言つてたくらいだし。」

「駿兄ちゃんの223系も持つてきてたけど、あれどうするの。横^{よこ}倒しになつちゃつたし。」

「いいだろ。間違つてたけど、あれどうするの。横^{よこ}倒しになつちゃつたし。」

「あれも部活のやつ。顧問のなんだって。」

「へえ。顧問のやつねえ。って顧問の先生持ちすぎじゃない。どのくらい持つてるのよ。」

「数えてなかつたから分かんないけど、うちの父ちゃんくらい持つてるよ。」

「あつ、じゃあ結構持つてるんだね。」

「・・・。」

「今日部活の先輩といろいろ話してたけど何話してたの。」
「次にどれ出すか話し合つてた。」

「へえ。」

「まあ、それも話してたけど、電車の雑学とかもいろいろ話してた。」

「へえ。例えば。」

「『雷鳥』のパノラマグリーンとパノラマグリーンじゃないやつの見分け方とか。SLのこととか。話してた先輩俺の知らないことも知つてんだもん。ついてくのが精いっぱいだった。」

「ナガシイ、でもついていけなくなることがあるんだ。それなら私があの人と話したら全然じやん。」

すると、後ろから声をかけられた。

「トモ。よーす。」

「駿兄ちゃん。来たんだ。」

「あつ、南さんお久しぶりです。」

善知鳥先輩がいつのもテンションより冷えた口調で話しかけてくる。

「えつ、知り合いですか。」

「知り合いも何も、俺はここNOBなんだけど。」

「ウソ。」

「ウソつて、ナガシイ気付いてなかつたんだ。」

「ああ、今初めて知つた。」

このころには全員気付いた模様で3年生と青木さんが寄つて来て何かいろいろ話し始めた。

「ナガシイ。バカ。」

「ああ、そうだったのか。**暁フェ**スタに行つたときとかどつからか現れてくるから、なんでかなあつて思つてたんだけど・・・。」

「おいおい。いくらなんでも鈍すぎ。」

「ていうか。**駿兄**ちゃんくんの遅かつたな。」

「なんかいろいろやつてたんじやないの。そうでなきやおかしいつて。ふつうならここに直行する人なんだから。」

「・・・。それもそうだな。」

「ナガシイ。いつになつたら帰れるわけ。この後に片付けやるんでしょう。」

「ああ、18(6)時くらいだと思うよ。でも。この部活予定表通りにやらないからなあ。いつ終わるか分かんない。」

「それダメでしょ。」

「ハハ・・・・まあね。」

この時木ノ本は二人の様子を見ていた。二人とも笑顔を交えて話しているのだが、なぜかその顔がいつもと違うように見える。ただ話しているだけなのに、ただ話しているよう見えないのだ。（永島には坂口さんの存在が大きいんだ・・・。坂口さんも言つてたこと。お互いを理解してゐからあすこまでの自信になるんだ。でも、それを理解してゐなら、なんであのことを永島に言えないの。）その思いだけがつのつた。

15時。文化祭終了。そのあと部展、クラス展のグランプリ、優秀賞が発表される。クラス展の結果はグランプリ3年6組。優秀賞2年5組。部展のグランプリは吹奏楽部。優秀賞は生物部だった。「あー。去年は優秀賞だったけど今年は優秀賞すら取れないってホントゴミだな。吹奏楽部のばか野郎っ。」

「まったくだ。」

「サッカーボールが表抜いたんじゃないのか。」

「え。なんで。」

「チート使つてたのがばれたんじゃないのか。」

「あれのビニがチートよ。部員のやつと後輩のやつかき集めて一気に
にどつをつと投票しただけじゃん。」

「はたから見ればチートみたいに見えるつて」とか。

「まあ、そういうこと。」

善知鳥先輩とサヤ先輩は息を大きく吸って口に手を当てる、

「クソサツカーボールのばか野郎ー。」

「バカ。職員室に聞こえるだろ。」

「なんで。聞こえるように言つたにきまつてゐるじやんねえ。」

「そうやう。このくらいしないと意味がない。」

「意味がないの前に全員片付ける。」

青木さん^{おおき}が仕切つて、片付けさせるように促す。

「ところで、この箱4箱誰のだ。」

「あつ、それ永島の。」

「あ。すぐ片付けます。」

(萌はもう帰つたんだな。)

心のどこかでそれを思った。17時片付け完了。この後はアド先生
のおじりで一人一人にペットボトルが配られ、500ミリリットル
のジュース、お茶を全員で飲み干す。それを飲み干し終わると、
「よーし。野郎ども。次は臨地研修だー。」

サヤ先輩が気合い入れに叫んだ。

その声に続けて、先輩たちが、1年生の大半もそれにつられて返事を
をした。

その帰り、正門を出ると予想してなかつた光景を見た。

「萌。まだいたの。」

「いいじゃん。一緒に帰つちゃダメ。」

「ダメじゃないけど・・・。まだいるとは思つてなかつた。終わる
の分かんない部活が終わるのってふつうまつてるかなあつて。」

「まつちやダメとかつていうことはないんだし。ていうか、そんな
話どうでもいいし、帰ろ。」

「おひ。」

さつきから頭の中に響き続いているものがある。
た道のり。あれは固い愛の証か、固い絆の証か。

坂口から語られ

c
m
今回からの登場人物
南駿 みなみしゅん 誕生日 3月15日 血液型 O型 身長 176

24列車 暴走 富山ライトレール（後書き）

「うううのうてない」とは承知です。
作者が狂つててすみません。

なお、今回で文化祭のHピソードは終了です。これから1回別なレ^レ
をはさんで夏のイベント臨地研修の話になつていきます。現実と
大きく違つても読んでくれる人には感謝感激です。

まずは高1の終了まで根性で書き上げるといった以上自分の精神力
をもつて根性で完成させていきたいと思います。

25列車 難読質問

6月14日。文化祭の片づけ。モジュールを随時量に運んで、車両のほうは図書館準備室に入れた。その片付けが終了すると、2階昇降口のちょうど下にあるピロティに集合するよう言われた。

「よーし、諸君。」これからみんなを広報課と総務課と模型課に分けるからちょっと待つてね。」

前にナヨロン先輩が言っていた班決めである。だが、形式上その形をとるだけで、活動上関係ないらしい。

「えーと、まず醒ヶ井は総務課でいいだろ。後は、・・・。」

「少なくとも永島は模型課だな。」

「佐久間はなんかメカニック関係得意そудだし、広報課でいいだろ。」

「残りのミッシィとハルナンはどうするんだよ。」

「残りってそれだけじゃないだろ。中学生だつてそうだ。ああ、あと諫早も模型課だつたな。」

「なんか有能なやつが引き抜かれてるような気がするけど。」

「気のせいだつて。」

「じゃあ、箕島は総務課で、は広報課・・・。」

「木ノ本広報課つておかしいだろ。木ノ本もどつちかつて言つたら模型課じやないのか。」

「おう、ナヨロン。さつきから人引き抜きすぎ。」

「分かつたよ。じゃあ、あとはそつちで決めて。もう引き抜く当てもないから。」

「じゃあ、模型課はもう人回さなくていいね。」

「ちょっと待て。せめて3人。3人は模型課来てほしいんだけど。」

「引き抜く当てるじゃないか。」

「それじゃあ、ハルナンも模型課で、アサタンが総務課で、ソラタ

ンが広報課でいいね。」

「ああ、それでいいよ。」

会議が終わつたらしくサヤ先輩が「いらっしゃった」と向いた。するとそれぞれに「どうぞ」に行けと指示を出し完成まで持つて行つた。

「よし。そつちの一番左のやつが総務課。そうむか 真ん中が模型課。もけいか そして、いちばん右が広報課だ。とりあえず何班にいるつていうのは覚えといてちょ。」

そういうことだそうだ。

「で、これから部活のために全員に書いてほしいものがあるんだけど・・・。」

サヤ先輩はさつきから持つていた紙を全員に配つた。その紙にはこんなことが書いてあつた。例えば「ロングシートとクロスシートどちらが好きか」、「このJRに一言」など。他にも「川内」の読み方、48という数字でピンと来るものなど50個の質問が書かれていた。

「この質問に回答してくれ。出来たら、俺に渡して。これを俺たちの部員紹介のページにアップするから。」

「はーい。」

渡された問題に取り組む。内容は様々。最初は初步的物から始まり、あとになればなるほど少しづつ内容が難しくなつていつていいる感じもする。

「なあ、ながしま 永島ながしま。これなんて読むかわかるか。」

木ノ本きのもとが聞いてきた。シャープペンがさしている文字は「川内」。

「あつ、それ東北の都市と同じ読み方するよ。」

佐久間さくまが口を挟んできた。

「確かにそうだな。」

「東北の都市。何、盛岡もりおかとか仙台せんだいとか。」

「今思いつきり答え言つたよ。」

「えつ、ウソ。・・・。」

「答えは簡単なほうだな。」

「簡単なほうかあ・・・なるほど。そう読むのね。」

思いついたらしく、その答えを書いた。書き終わると、

「なんかこういうのって紛らわしいよね。ここに辺で言つたら新居町を「しんきょちょう」って読んじゃうつてところかなあ。」

「あれ駅の読み方「あらいちょう」じゃなくて新居町だからな。さらに紛らわしいぞ。」

「あれなんてまだまだ優しいほうだろうな。難読駅なんて日本中探せばいくらでも出でてくる。同じ九州新幹線の難読駅といえば「出るに水」って書いて出水とかつていうのもあるね。他に僕が知つてるのは・・・これかなあ。」

紙の白紙を使って「長万部」と書いた。

「なにこれ。「ちょうまんべ」とかつて読むのか。」

（この読み方つて絶対坂口さん知つてるよねえ。）

「いや。これふつうに読むつてこと考えちゃいけない。難読だから。佐久間分かる。」

「え。これの読み方なんてわかるわけねえよ。」

「醒ヶ井。箕島。これの読み方わかる。」

「知るかつ。」

「えーと、これつて何「まんべ」だつたつけ・・・ダメだ。「長」

の読み方がわかんねえ。」

醒ヶ井、箕島の順に回答を得た。

「何やつてんだ。」

後ろから善知鳥先輩が覗き込んでいた。

「これの読み方わかるかなあつてやってたんですよ。」

善知鳥先輩は「長万部」の文字を見るとすかさずナヨロン先輩を呼んだ。

「ナヨロン。これなんて読むかわかる。」

ナヨロン先輩にはすぐに分かつてしまつたみたいで鼻で笑つっていた。

「簡単じゃん。「長万部」だよ。「カシオペア」とかの停車駅だよ。」

「ナヨロンそういう方面からのこういうのは得意だからなあ。」

「よし、俺からも問題作つてやる。これなんて読むかわかるか。」

書いた漢字は2文字で「青木」。

「えつ、ナヨロン先輩。これバカにしてるんですか。

「全然。これぞ簡単すぎて難しいっていう問題だぜ。阪神には」「

書いてすつ」「く意外な読み方させてる。まず、この答えは封じでお

くか。全員」「あおき」って読むつて思つてるだろ？が、これは

「あおき」って読まない。

「はつ。これ「あおき」意外に読み方あるのか。」

「バカ。善知鳥は黙つてろ。」

読者の皆様にはこの答えを教えておこな。もひすく出でこます。分かつている人はもう言つまでもないでしょ？

「さあ、どうだ。」

「ダメです。「あおき」意外思いつきません。」

箕島がギブアップするのを待つていたかのように全員ギブアップ。

「読み方は簡単なんだけどなあ。」

そういうとナヨロン先輩は青の上に大の字を書いた。

「こいつは「おおき」って読むんだぜ。他にもこいつこいつのはどうだ。」

今度は「杉津」と書いた。

「これは「すきづ」。」

「違うんですよ。これつてもつと別な読み方でしょ。」

「ああ。」

「僕。これは分かります。「すいづ」ですよね。」

この問題には箕島が回答した。

「ああ、これ答えられちゃうと持ちネタがないなあ。俺が知つてゐる難読駄つて言つたらこれくらいかなあ。」

「ナヨロン。それ嘘だよねえ。」

「箕島は歴史関連が得意そうだ。それだったら「水城」とか出してもすぐ分かつちまうだろ。」

「・・・。」

「いや。水城はふつつか。それだつたら原田のほうがわかりづらいかなあ。」

「な」とどっちでもいいわ。ていうより、みんな書けた。」

「あ、はい。お願ひします。」

「みんな早つ。」

どうやら終わつてなかつたのは醒ヶ井だけだつたみたいである。

それが全員書き終わつたところでアド先生からまた新たな発表があつた。

「えーと、今日から部長が北斎院君から鷹倉君に変わります。部長としての仕事はまだ引き継がないようですが、新しい部長ですので、みなさん歓迎しましょう。」

みんなは拍手でそれに応対した。

「よつ。ハクタカ。よいよでしゃばつて教えるとでも思つてゐるのか。」

「思つてませんよ。むしろでしゃばつて教えたのは善知鳥先輩じゃないんですか。」

「つて違うか。でしゃばつて教えるのはアヤノンか。」

「えつ、何であたしになるんですか。」

「だつてしそうじやん。」

「絢乃は絶対にそういうことしません。」

「なんでハクタカがかばうんだよ。さすがにアヤノンす・・・。」

「それ以上何も言わないでください。」

「えつ、どうして。」

「いいから、何も言わないでください。」

数日後。岸川高校鉄道研究部のホームページを開いてみた。

(この「Z·EX」。ナガシイだよなあ。これも本当に好きだよねえ。)

そのページには結構面白い」とが書いてあつた。

25列車 難読質問（後書き）

全体的に文章が説明文であることを謝罪します。

作品上そつなつてしまつとこつといふがあるので、ご承ください。

関係のない話ですが、今自分が作っている原作は高1の11月頃の内容です。まだまだ原作も発表分も先が長いなあ・・・。

そんなのでも読んでくれる人には感謝。

読者のために根性で頑張ります。

・・・後書きがほとんど同じ内容ですみません。

26列車 まじまらない（前書き）

現実と大きく違う個所が多くあります。すみません。

26列車 あとまらない

正式な部員と認められた。そのような感覚に浸つていてもわざかの間。これから僕たちは本当にイベントに体を傾けていく時期になつた。その鉄道研究部一大イベントというのは毎年恒例臨地研修である。

「サヤ、今年どこ行こうか。」

善知鳥先輩がサヤ先輩にどこに行こうかと聞いた。

「そうだなあ・・・去年は東北だつたし、おととしさは四国だつたしなあ。アヤケン、ナヨロンはどこがいい。」

「九州でよくない・・・。」

ナヨロン先輩が提案する。

「おっ、ナヨロンやえてる。」

「うつさい。」

「九州かあ・・・うん、いいかも。」

「よーし、みんなで九州に行こう。」

「じゃあ、僕からそうアド先に言つとくよ。」

「サヤお願いね。」

「で、どうする。九州つて言つてもどこに行くんだよ。」

「行くつて・・・博多か小倉あたりだよなあ。」

「エー。」

「エーって・・・病むこと確定なんだから文句言わない。」

「だつて精神的に病ませるのはどうなんだよ。ハクタ力達はともかく1年生は耐えられないだろ。まああたしも耐えられないけど・・・。」

「そんなこと言つてたらどこにも行けないだろ。それにその心配はないよ。」

「どうして。」

「木ノ本は撮り鉄だからそんなこと考えなくていいだろ。永島は電

車が好きだから入ったんだから問題ない。他は……、ビルにでもなるからいいや。」

「ナヨロソってそういうことよく一発で見抜けるな。」

「見抜いてないよ。勘^{かん}なんだから。」

「そんなことはどうでもいいよ。」

「じゃあ、博多^{はかた}行くつてアド先に言つていいな。」

「まだ、言つてなかつたの。」

「善知鳥^{うとう}が嫌だつて言うからだろ。」

「はいはい、分かつたから早く電話してよ。」

今日の定例会はこれで終わつた。

（また遠いところまで行こうとするなあ。）

そう思つているのはアド先生だ。この頃は遠いところにしか行つてない。

「まあ、できるだけ抑えましょ。」

独り言を言つた。抑えるといつのは旅費。これができれば学校への申請は簡単である。

6月17日。今日は放課後に部活がある。今日からは夏の臨地研修についての話し合いだ。

「今年どこ行くんだろうな。」

僕から見える人全員にこの問い合わせをしてみた。

「できれば東北がいいな。」

「四国かな。」

「やっぱ北海道だろ。」

「どこでもいいよ。」

木ノ本、箕島、佐久間、醒ヶ井の順に回答があつた。言つてはいけ僕もできれば東北がいい。

「ああ、どこになるんだか気になるなあ。」

すると教室のドアが開いた。全員の顔がそつちを向く。

「先生じゃないんだから、みんなでこっち向くなよ。」

見ると楠先輩^{くすのき}だった。もちろん顔はあきれていた。

「絢乃先輩。去年は東北のどこに行つたんですか。」
荷物を置こうとしている楠先輩に木ノ本が聞いた。

「去年は確か・・・。」

「「ばんえつ物語号」に乗つてきたよ。」

今度は楠先輩の後ろで声がする。声の主はハクタカ先輩だった。

「ハクタカ先輩達つて結構いい所行つてますよね。」

「そうかもな。」

ハクタカ先輩はそう言つて去年の旅行の説明を始めた。

「去年は東京まで各駅で出て、夜新宿から出る「ムーンライトえちご」に乗つて新潟まで行つて、その後「ばんえつ」に乗つて、戻つてきたんだよなあ。」

「それより「ばんえつ物語号」ってどんな感じでした。」

木ノ本が興味ありげに聞く。

「それは・・・。」

「ダメだよ、そんなこと聞いても。だつてハクタカ「ばんえつ物語号」の中で爆睡してたもん。」

「ええ、なんで爆睡してたんですか。」

「「ムーンライトえちご」の中で徹夜してたんだつてば・・・。」

(よくやるなあ。)

「それでも、最初くらいは覚えてますよねえ。」

「それもないね。座つた瞬間に寝たから。」

(何やつてるんだか・・・。)

この話が終わるころには3年生も中学生も集合していた。全員が集合するとすぐに本題に入った。

「今年はみんなで博多の病院に行くぞー。」

「オー。」

テンションの上がる先輩達。なんで博多にまでいって病院に行かなればならないのか。

「あのなあ、普通に言えつて。」

「そりそり、いくら1年生が鉄研色に染まつたからって伝わらない

だろ。」

ナヨロン先輩とアヤケン先輩がツツコンでいたが、何か通じてきた。
「それって、今年の臨地研修は博多はかたに行くってことですよね。」

思つたことお口にしてみた。

「おお、さすがナガシイ。」

何となく分かりたくなかつた。でも、九州きゅうしゅうに行けるのはうれしい。

「よーし。んじゃあ工程言うぞー。」

またサヤ先輩たち恒例のあれが後にはまつてゐるのだろうか。

「まずハカグチに6時45分集合。7時06分に出るふつうで豊橋まで行つて、豊橋から7時49分発の特快米原行きに乗つて米原で乗り換え。米原から9時50分発の新快速で大阪まで行つて、大阪で昼休憩。昼ご飯食べたくないやつは食べなくていいぞ。それで12時00分発の新快速播州赤穂行きに乗つて途中の相生あいおいで降りる。相生からふつうに乗つて途中の糸崎で乗り換え。いと先から「シティラナ」とかつていう・・・」

「略すなよ。」

「いいじやん」「シティラナ」で、そいつに乗つて広島ひろしまで降りたら17時55分発の「レルスタ」で博多はかたに19時06分だ。」

「だから略すなつて。」

「もうどうでもいいわい。次行くぞ。2日目は自由研修で、全員で乗るやつはオリオンとかつていうバスの21時40分発のやつ。こいつに乗つて大阪おおさかが多分7時30分。三日目は大阪おおさかに着いたら自由で全員で押しかけるのは15時30分発の新快速。これで米原に着いたら米原まいばらで乗り換え16時59分発の特快とくかいに乗つて豊橋とよはしに18時59分。そのあとはふつうであーつて浜松はままつに戻つてくるつていう工程だぜ。」

「そんなんで通じだのかよ。」

「多分通じた。問題ない。」

「多分つて・・・。おい。」

今ここにその工程を聞かされた。

「そんでもって、2田田と3田田は自由行動があるから、その班を決めてくれ。」

何とも展開の早い部活である。

その後、善知鳥先輩の言つていた自由行動の班を決めた。班は北斎院、善知鳥班。名寄、箕島班。綾瀬、醒ヶ井班。鷹倉、楠班。佐久間、諫早班。そして、永島、木ノ本、空河、朝風班となつた。この班で行動し、いろんなところに行つてくる。班が決まるとはその中身を立てる。

「どこ行こうか。」

「そうだな。九州行けるんだし、いろんな所行きたいよな。」

「いろんなところって言つたつて駄だろ。俺駄以外そんなに行きたって思わないし。」

「それは私も同じ。城廻とかは箕島が喜びそうだけど、私たちはずういうがらじゃないしね。」

「向こう行くんだつたら九州特急とか見れるか。」

「納得だ。お前好きだもんな。ほれてるもののが違うと思つけど。」

「それ言つたら空河だつて同じだる。キハにほれてるじゃん。」

「・・・。」

「ほれてる、ほれてないつていう話じゃないだろ。今はどこに行くかだろ。全員どこに行きたいんだよ。」

「正直博多から離れたくないつていうのが本音ですね。」

「博多だとディーゼルが見れない。熊本とかそつちに言つて「ゆふいんの森」とか「くまがわ」とか見たいなあ。」

「私は「かもめ」と「つばめ」と「有明」と「ハウステンボス」と「みどり」の写真が撮れればいいなあ。」

回答は朝風、空河、木ノ本の順。

「そんな都合のいいプランなんてあるかよ。」

「さうだけど。つうか、まだ永島がどうしたいかって聞いてないよ。」

「

「俺・・・。俺は鳥栖とかに行つて寝台特急とか向こうに行く特急撮つてたいなあ。」

「全員なんか写真撮りたいつていうのは変わらないんだな。」

「そうだな。」

「でも、具体的にどこに行きたいかつていうのは出でませんよねえ。」

「それはもう出てるも同然じゃないのか。朝風は本音を言つと博多から離れたくない。空河はティーゼルカーが撮れればどこに行こうが関係ない。木ノ本は特急。俺は寝台特急と特急。それで、朝風が博多から離れたくないつていう理由は寝台特急の「富士」と「彗星」と「あさかぜ」、「出雲」、「瀬戸」意外完全網羅できるからだろ。」

「永島さんよく分かつてます。」

あたりを見回して時刻表を持つている人を探す。

「醒ヶ井。時刻表貸して。」

「前にあるだろ。それでいいじゃん。」

「お前のほうが近いんだからお前がそつち使えばいいじゃん。」

強引にも醒ヶ井が使つている時刻表をもらつて最初のほうにあるブルーのページをめくつた。これの前のほうには新幹線。真ん中に新幹線と特急の接続。後ろのほうには特急のダイヤ。一番後ろには寝台特急の時刻が記載されている。僕が開いたのはブルーのページの一番後ろ。つまり、寝台特急の時刻表が記載されているページだ。白の青の境目のページを開くと載つているのは「カシオペア」「北斗星」「はくつる」の時刻。次のページをめくると左のページから「出雲」「瀬戸」「北陸」。右のページに「あけぼの」「ゆうづる」「日本海」「トワイライトエクスプレス」の時刻が乗つている。さらにページをめぐると見開きに大きな時刻表が現れる。左ページは下り。右ページは上りの時刻。載つているのは「富士」「はやぶさ」「さくら」「みずほ」「あさかぜ」「あかつき」「彗星」「なは」。「これで分かるな。」

「今思つたけど、寝台特急つて結構いっぱい走つてるんだな。」「

「今でも定期列車が18往復36本。不定期が2往復4本設定されていますからね。」

「計40本か。多いなあ。」

「そんなでもありませんよ。過去には「明星」と「ゆうづる」がそれぞれ7往復14本設定されていた時代がありますから。」

「えつ。それだけで14往復28本。多すぎじゃない。」

「確かに多すぎですね。そのあと「明星」は4往復8本。「ゆうづる」は5往復10本に整理されますから。」

「それでも多いだろ。」

「そんな話今はどうでもいいだろ。それよりこいつが。いつか仕上げなきやいけないんだから。」

「そうだった。ごめん。」

「別にいいよ。木ノ本の場合そういうこと話してたほうが楽しいだろ。久しぶりなんだし。盛り上がりたいじやん。」

「盛り上がるのにはこれが終わつた後。そう決めました。わざと終わらせちゃお。」

「だな。」

今度は見れる寝台特急の整理だ。実際に行動ができるのは7時30分から8時以降。その時には方に入る寝台特急は物の見事にない。「あつ。寝台特急のそんなに空氣を読んではくれないみたいだな。」
「寝台特急のKY。」

「まあ、KYって言つても時刻表がこの通りですから。」

「そうですよ。どこかに行つてからまたどれるかもしれないじゃないですか。」

「そうだな。」

僕はしばらくその時刻表を見つめ続けていた。これは・・・。

「これつて3日目にまわしからえればいいんじゃないかな。」

「どういふことだよ。」

「3日目にまわすと東京発着の寝台特急は見れないにしても大阪発

着の寝台特急は見れるつてこと。」

「ああ、なるほど。」

「でもそれって大半を捨てるつてことですよねえ。」

「だつてそうしなきやダメだろ。いくらなんでも5時31分の「なは」はまず撮れない。」

「撮れないこともないんじゃないか。早起きすればいい話だし。」

「それはそうだけじね。」

「木ノ本さん。^{きのもと}電車に1~2時間乗つた後にまたホームに行ける田舎（いなか）あるんですか。」

「自信はないけど。ふつうに考えてできるつてことじやん。」

「やめとけつて。木ノ本まだ体が慣れてないだろ。歓迎旅行の時も20(8)時からホームにいてずっと寝てなかつたんだろ。電車の中で爆睡だつたじやねえか。」

「やつでないといひもあつた。これからずつとそれしてけば……。」

「いつか体壊すぞ。やめる。」

「……分かつたよ。今回はやんない」とする。」

「で、話し戻すけど、「わくら」や「はやぶさ」や「みずほ」まで待つてたら広い範囲行動できない。」

「「わくら」と「はやぶさ」と「みずほ」が博多^{はかた}に来るのつて何時だよ。」

「全部9時台。そん中じや「わくら」が一番早くて、「はやぶさ」が一番遅い。」

「でも9時ならまだいるんないけるよねえ。」

「……。」

「確かにやうですけど、もつひとつ現実つてものを考えたほうがいいんじゃないですか。大体「わくら」、「はやぶさ」、「みずほ」が時間通りに来るつていう保証はないじゃないですか。」

「それは安全神話の日本が何んとか……。」

「何ともならない時だつてあるつてこと。事故と天災にはどうぞ

うあがいても勝てない。

「フルト」

「そうですよ。もし寝台特急が事故を起こさなくとも貨物が事故を起こしたら同じことですよ。」

「フルト」

「そう。だから、今回は東京発着の寝台特急は切り捨てていいと思う。ここでも見れるんだから。だつたら見れない大阪発着のやつを見たほうがいいだろ。」

「・・・。」

「それもそうですね。普段見るやつ見たって機関車が変わってるだけだし。」

「フルト」

「でも、機関車変わってるんだつたらそつちも見たくない。こっちじゃ見れないんだしさあ。」

「確かに見れないけど・・・。」

「はまつ」

「きかんしゃ」

全員黙り込んだ。ここ浜松で見れる機関車はEF66をはじめとする直流専用の電気機関車。九州で見るのはED76などの交流電気機関車。 EF66やEF65には青を基調とした塗装。 ED76は赤をまとっている。それだけでも違つただが・・・。

「ダメだ。好きなもの同士集まりすぎてるから」「うごつとをまとまんねえ。」

結局今日は何も進まなかつた。

26列車　まともらない（後書き）

今回から臨地研修シリーズの話です。
ストーリー中で出てくるみたいに寝台特急がいっぱい走ってたらな
あ。新幹線より乗つて飽きません。

27列車 立案（前書き）

残酷な発言がござります。

27列車 立案

翌日。

「今日も2日目、3日目の打ち合わせかあ。なあ、木ノ本。^{きのもと}なんか考
えてきた。^{きのもと}」

話題を木ノ本に振つてみた。

「考えてみたんだけどさあ、昨日鳥栖に行くつていう話に最後なつ
てたじやん。だったら鳥栖まで行つてそこでしゃわつでもすればい
いと思つ。」

「しゃわつ。」

木ノ本の言葉にあつた「しゃわつ」と云ふ言葉が気になつた。まさ
か・・・。

「おい。まさか人殺すなんてしないよなあ。」

「するわけないじやん。^{ながしま}永島ならすぐに通じると思つたけど、通じ
なかつたかあ。」

「なんだよその言い方。まるで俺が鉄道バカみたいに聞こえるじや
ないか。」

「実質そつじやん。」

「まあ、否定しないけど。で、何それ。」

「車両撮影。^{しゃりょう}うせつえい 略して車撮。^{しゃさつ}」

「・・・・。紛らわしい略語作つたなあ。車両撮影。^{しゃりょう}うせつえい 略して車撮かあ。」

「

「そつ。すついだろ。」

「どこもすげくないいけどな。」

「それをスペツというなよ。」

「そんな話はビリでもいい。で、どんなの考えてきたの。俺はその

工程知りたい。」

「まず、8時12分の快速で鳥栖まで行く。後は車撮大会。^{しゃさつたいかい}戻つて
くる列車は鳥栖を15時23分に発車する快速。^{かいそく} その後は車撮大会。^{しゃさつたいかい} 戻つて

0時0

9分発の博多南線に乗つて博多南まで行つて総合車両所を見てみる。
それで帰りは18時04分の列車つていう感じなんだけど。

「・・・。」

「なんか反応してよ。」

「別に悪くないんじやない。それで通してみる。」

「通すのはいいけど、まずは朝風と空河の反応見てからだろ。」

「多分反対しないと思うけど。」

「いや、空河が反対しそうで怖いんだよ。空河つてディーゼル好き
だろ。私の計画の中ディーゼル出てこないから・・・。」

「鳥栖で「ゆふいんの森」も見れる。それがキハ71だかキハ72
だかは知らないけどな。」

「なんだ。なら問題ないじゃん。」

「だから、きっと大丈夫だよ。朝風が見たい寝台特急も見れるしな。」

「このことを早速空河たちに振つてみた。」

「なんか反対とか。こんなとこ行くなんて」「!!」じゃんとかつてい
うところない。」

「別にないです。「ゆふいん」見られるだけでも十分ですか?」

「ないです。木ノ本さんありがとうございます。」

「いやあ。それほどでも。」

「浮かれてんな。通らなきゃこれボツ。また1から作り直さなきゃ
いけないんだから。」

計画を手帳サイズのノートに書いてアド先生に提出してみた。する
と・・・、

「なんだよこれ。鳥栖まで行つて写真撮つて戻つてくるだけかよ。
ダメだししたのはアド先生ではなくサヤ先輩だつた。」

「えつ、ダメですか。」

木ノ本が聞き返す。

「ダメってわけじゃないんだけど、行動が小さいつていうのかなあ。」

俺たちは門司港のレトロうんたらとかつていうとこ今まで行こうと

思つてゐるんだよ。」

「永島。門司港つてど。」

「えつ。門司港つて・・・、」

鉄道知識が0に等しい木ノ本にはビリコの説明をしたりよこのか。
ちよつと考へて、

「山陽新幹線の小倉つて知つてる。」

「小倉。・・・。小倉。」

どうもわからないみたいである。他に通じる言い方は・・・、

「九州渡つてすぐ。」

「・・・。イメージわかないけど、何となくわかった。それの近く

なのか。」

「うん。」

「そつちの話は済んだか。」

するとサヤ先輩はさつきの説明を続けた。・・・。いや、違つ。

「俺たちそこに行くまで「クソニック」に乗ることになった。」

「「クソニック」つて・・・。サヤ先輩その呼び方やめましょう。」

「いいだろ。別に。「ハイパーに問題起こす」やつらに乗るよりは
ましだ。」

これには首をかしげた。僕が知つてゐる中で「ハイパー」がつく電
車や車両が見つからない。それがわからないようだと察したようで、
ナヨロン先輩が耳打ちしてくれた。

「783系。あれの愛称「ハイパーサルーン」。」

(なるほど・・・。)

「サヤ先輩。話が脱線してます。」

「えつ。あつ。話それでた。ごめんごめん。」

「ところで、この計画は変えたほうがいいってことですか。」

木ノ本はそう聞いていたが、僕にはもうこれでは通る気はしなかつ
た。

「もういいよ。また計画練りつぜ。」

「なつ、永島。」

「

木ノ本は僕を呼び止めようとした。しかし、さつさと席に座った僕を見ると僕たちのほうへもどってきた。

「聞こえてたと思うけど、この計画じゃあ通らなかつた。なんか他にいい案ある。って言つてもすぐには出ないよなあ。」

「・・・。」

「永島。」

考え込んでいるさなか誰かに呼ばれた。僕を読んだ人は佐久間だつた。振り向いてみれば僕のすぐ後ろにいる。

「何。」

「お前らどうに行くつてなつてる。」

「鳥栖に行こうっていう話になつてたけど、どうも通りそうになかつたから鳥栖に行くことはやめた。お前らはどう行くの。」

「「つばめ」に乗つて熊本まで行つてくる。」

「「つばめ」。」

班全員の声がそろつた。「つばめ」は博多と西鹿児島を結ぶ特急の名前。使われている車両は787系という車両で全体がシルバーに塗装されている。外見は何となくロボットを連想させそうな顔をしている。

「あ・・・あれに乗るのか。」

「ああ、それもここだけの話・・・で乗る。」

「おい。それはやつちゃダメだろ。」

「考へてることが幼稚というかなんといつか。見つかつたらどうすんのよ。」

「え。見つからなければどうとこいつことはない。」

「・・・。」

(いや、やういう問題じやなくて・・・。)

なお、今こいで話されていたことは絶対に真似しないでください。

犯罪です。

「熊本つて言つてたなあ。熊本行つて何するんだよ。」

「あすこつて路面電車走つてるじやん。それにでも乗つてこようか

なあと思つて。」

(熊本・・・)

「へえ。そなんだ。」

佐久間とも会話はここでお開き。自分たちの計画に戻つたが、何も進行しないのは変わりない。なら・・・。

「先に3日目の計画作つちまおうぜ。」

「そうだな。2日目迷つてつたつてしようがないもんな。」

「じゃあ、3日目どうするか・・・。」

全員頭を回転される。中に浮かんでくるのは昨日言った「あかつき」「彗星」「なは」をこの口に見る。

「まず、寝台特急を見るのは必須だろ。」

「そうだな・・・ん・・・。」

一つ気がかりなことが浮かんだ。もし「これが本当だったら・・・。

「バスが大阪に着くのって何時だつけ。」

「ゴミバスが大阪に着くのは7時30分ですよ。」

「・・・。」

「どうかしたのか。」

「まずい。俺たち寝台特急にも見放されたかも。このままいつたら

「あかつき」と「彗星」は見れない。」

「え。行つてる意味がちょっとよく分かんないんだけど。」

「おいおい。これくらい理解しようぜ。」

「木ノ本さんにもわかるように説明します。まず「彗星」の大阪到

着が7時16分。「あかつき」の大阪到着が7時24分。」

「あ。なるほど。そういうことか。・・・つて。えー。」

「死ねばいいですね。そのバス。」

「ほんとだよ。でも、バスのおかげで間に合つかもしれない。」

「なんで。」

「よく考えてみてくださいよ。鉄道は1分1秒でも遅れたらいけない。その代りにバスはそれに縛られない。どうしても高速道路の道路状況に左右されるからです。つまり、渋滞が続いていれば7時3

0分以降の到着になるということ。もし道路がスカスカですいすい通れる状態なら到着は7時30分より早くなる。」

「つまり、朝風^{あさかぜ}が言いたいのは道路がスカスカの状態であることを祈つとけってこと。」

「まあ、そんな感じです。僕が思うにバスは「ゴミ」ですから。バス好きの人「ごめんなさい。」

「よし。もし渋滞はまつたら「うない車」口ケランで破壊するか。」

まず木ノ本^{きのもと}がそれを言った。

「ダメですよ。口ケランで破壊したら残骸が残るじゃないですか。」

「何。残骸を残さないで車を吹き飛ばす方法もあるのか。」

「核爆弾に決まってるじゃないですか。いらない車はすべて核爆弾で破壊する。」

「それ、私たちまで被ばくするからやめような。」

「分かつた。残骸が残らなきやいいんだろ。」

「うん。まあ、そうだな。つて永島^{ながしま}も核爆弾で破壊するとかつとうこと思いついたのか。」

「いや。核爆弾だとどうしても俺たちが被ばくするじゃん。バスにクレーンをつけていらない車を放り投げる。今は車社会車社会とかつて言つてるけど、これからは鉄道社会になるんだぜ。地球上にたりすぎた車を一掃するにはもつてこいのイベントじゃないか。」

「それ余計時間かかります。世界の車一掃するなら、全部の車の床下にプラスチック爆弾^{ティーエヌティ}かTNTを下にくつつけて、ある段階で爆破する。こうすればエンジン死ぬ。燃料タンク死ぬ。基盤死ぬの3弾攻撃が可能になる。」

「車好きの人「ごめんなさい。」

「それやつたら全員鉄道利用に切り替わるな。」

「鉄道利用に切り替わってもどうせ新幹線^{しんかんせん}利用でしょ。」

「なんか不満なのか。朝風^{あさかぜ}。」

「不満に決まっています。そんなことしてもどうせ早い乗り物にしか流れないんですから。もつと旅を楽しむとかつていうこと考えない

んですかねえ。だから現代人は視野が狭いんですよ。この年で言つのもなんですけど、僕は昔を見直す必要があると思いますね。」

(「この年つて、まだ二〇一〇だな。言つことはすでにおっさん化してる。）

「さつき視野狭いつて言いましたけど、僕本当に現代人は視野狭いと思うんですよ。なんでそんなに早くいきたいって思つことだつてありますから。」

「早くいって何が樂しいってことだな。」

「そうです。今は楽しいなんてどうでもいいっていう人がたくさんいるから新幹線しんかんせんがもうかつて、それに並行してひつねりと生きている路線がどんどんさびしくなつてく。」

「でも、その対策は見つからなつてことだよなあ。」

「そつなんですよねえ。ビニジツやつたらまがつた心が折れるのか。その答えが見つからない。」

「そんな話どうでもいい。わつたと三田田上げつけまおうぜ。」
そのあと話し合つて三田田の計画を立てた。結果は車両撮影しゃりょうさつえいの王道となつた。

部活終了後。

(「はあ。今日はすっかり遅くなつちやつたなあ。結局三田田の私の案はボツ。他にどんな計画立てろつていうのよ。はあ。）

心の中で溜息したかしないかの時。誰かにぶつかつた。思いつき頭と頭が衝突した。

「痛つ。」

思わず声が出る。むでこをこすりながら、

「じめんなさ・・・。」

目を開けてみると、どこかで見たことのある顔だった。

「坂口さかぐちさん。」

相手も目を開けると、

「木ノ本きのせとさん。」

お互よつがいの名前を呼びあつた。

27列車 立案（後書き）

今回は本当に謝罪するレだと思います。
と言つておきながら、主人公たちがあんなことを言つているレのほう
がなんか楽しい気がします。

話は変わりますが、このレの前までの文字数を原稿用紙の400字
で割つてみました。その結果原稿用紙に空白なく文字を埋めても3
38枚相当になることが分かりました。いつの間に自分でこんな
に書いたんだろうつ・・・。

28列車 進路の密勅

頭をぶつけた彼女は坂口さかぐちだった。先日行われた文化祭でもう顔は知つてゐるが、こつして会うのは初めてだ。

「ごめんね。ちゃんと前見て歩いてなかつたから。」

坂口さかぐちがまず謝つた。

「いや。分かるよ。ここに来たら絶対あつち向いて歩くのがふつうだからなあ。」

ここは遠鉄百貨店と浜松駅前はままつのMAY ONEの間。メイワン遠鉄百貨店側から見て左手側に遠鉄バス浜松駅前はままつ。右手側には浜松駅の1番線が顔をのぞかせている。坂口も木ノ本もここを通る時は必ず浜松駅側を見たまま歩き、何か列車が来るというアナウンスが聞こえたら足を止めてくるまで待つ。それが4月からの日課になつたのだ。

「あつ、やつぱり木ノ本さんもやるんだ。」

「――」を通るときにタダで通るなんてことができるかよ。」

するとホームからアナウンスが聞こえてきた。しばらくそのアナウンスに耳を傾ける。その声はこついつている。

「間もなく、1番線を、貨物列車が、通過します。黄色い線の内側までお下がりください。」

「貨物があ。どうせEF210（桃太郎）だろうなあ。」

「そうとも限らないんじやない。EF66とかEF200が貨物列車引くことだつてあるし。それにEF65だつてゼロじゃないよね。」

（ほんと。前会つた時もそうだつたけど、坂口さかぐちさん進路間違えたんじゃないのか。このレベルだつたらふつつい岸川きしかわに来ていいレベル。今鉄研やつても十分通用する。）

「じゃあ訂正。高い確率でEF210（桃太郎）だ。」

1・2分その場で貨物列車の通過を待つ。すると豊橋側から甲高いホイッスルの音が聞こえ、前面が青で、パンタグラフの形がV字形

になつてゐる機関車を先頭に貨物列車が通過していった。

「EF210（桃太郎）。

「違うよ。EF200だよ。今のは、パンタグラフがV字形になつてたでしょ。EF210のシングルパンタはああいつ風になつてないよ。」

（パンタグラフだけで機関車の違いが分かるつてどういう人・・・。）

いつか自分もそなうなるんだと薄々感じながら、いま隣にいる同じ女子鉄を見つめる。

「どうかした。私の顔に何かついてる。」

「いや。そんなことないけど・・・。ていうか、どうか座つて話さない。ずっと立つてゐつたらこでしょ。」

「そうだね。どこ行こうか。」

「そこら辺のベンチでいいだろ。」

これは坂口のほうは嫌だつたらしい。

「だつてお腹すいたもん。それとも、家にじこちそうが待つてゐるの。」

「それない。ちょっと待つて家に電話する。」

坂口に断わつて家に電話し、夕食をどつかで食べていくといふ確約を取り付ける。その後坂口と一緒に近くのマックスに入った。

テーブルに座ると対岸に座ろうとしている坂口の姿が目に入る。

そして、文化祭で言つた言葉が再生された。

（私・・・将来は運転手になりたいと思つてるんだ・・・。）

その時彼女はこういつた。永島も将来は運転手になることを見据えているのだろう。そして彼女もそうなりたいと思つてゐる。こういう状況なら同じ岸川に通学するのがふつつのはず。なのに、なぜ彼女は岸川ではなく宗谷に通学しているのか。そのことがどうしても気になつた。

「なあ、何で永島と同じ岸川じゃなくて、宗谷に通つてゐるんだ。」

いつの間にかその口が勝手に開いていた。

「ナガシイがさ、私の夢をかなえるためには宗谷に行くのが一番だ

つて言わされたから。」

(理由はそれだけ……。)

「なんで、坂口さんが成りたいのは電車の運転手でしょ。今それに一番近いことができるのは岸川じゃない。なのに。なんで宗谷なんだよ。」

「……。」

坂口からの回答はなかつた。また言葉をつづけようつとすると、

「あのおや。木ノ本さんならいえることかもしれないけど、将来自分が電車の運転手になりたいって言える。」

「……そ……それは。」

ほんの少し前の自分が思い浮かぶ。少なくともその時の自分にはこんなことは言えなかつた。

「私には……ナガシイには口が裂けても言へるようなことじやない。ただ……ストレートに言えばいいだけなんだけど、どうしてもこれはなんか言つちやいけないような感じがする。」

「なんでだよ。」

(永島が見てたのは坂口さんの表面だけなんだ。だつたら早くその気持ちに気付かせてあげなきや。永島は……私が入部を決めたときこいついた。何に趣味持とうがそんなの関係ない。なら、何に成ろうがそんなの男女関係ない。そもそもこれる。)

「あなたの彼氏はこいつてたぞ。何に趣味持とうがそんなの男女関係ないって。同じことだろ。何に成ろうがそんなの関係ない。何ためらつてるわけ。本當になりたつて思つてることなら話すべきだろ。」

「……。」

また坂口からの回答はない。しばらく黙り続けて、

「本当のことだから、こつか話さなきやいけないとは思つてゐる。でも……ナガシイにはずっと嘘ついてきたことになる。普段そう見えなくてもナガシイ嘘とか嫌いなの。ずっとナガシイをだまし続けた、私を簡単に認めてくれると思つ。」

(あいつならそんなこと気にしないこと思つのよ。やつぱり古に付き合いだから。それならこいついう状況でどうこいつ答えが返つてくるかはわかるはず……なるほど。返つてくる答えが怖いから言えないとんだ。)

「怖いんだな。」

「うん……。」

坂口の声は一段と小さくなつた。

「分かるよ。」

同じような境遇にすつと立たされていた自分を語りたくなる。

「私もずっとそう思つてた。私は成つていいのかつて。周りの大人はさあ、みんなその考えに拍車をかける感じでそんなのになるなか、もっと女の子らしいことしなさいとかつて言つてくる。どんどん周りに道を崩されて、ついにはそんなのになつちゃいけないって思つてもきた。でも、ちゃんと見方もいるんだつてわかつた。私の母さんもそうだけど、ちゃんと自分が好きなように導いてくれる人もいる。今の私はあいつのおかげでいるようなもの。」

「……。」

坂口は黙つたままでいる。木ノ本がさうに続けようとするべく、

「もういいよ。」

坂口がその先の言葉を遮つた。

「ナガシイが言つたこと半分は本当だつた。閉じこもつてなれば私と同じつて。でも私も同じだつたんだなあ。ずっとその重圧に押しつぶされて言えなかつた。」

萌は自分に言い聞かせるように独り言を言つた。言い終わると瞬きをして、

「木ノ本さんのおかげで私も迷いが晴れたと思つ。ナガシイの言つことは当たつてゐる。これからはもう迷わない。自分が思つたように進む。」

「……。」

「でも……。思つたように進むつて言つても私はどこに進んでい

いのかわからない。浜松はままつにある国際観光こくさいかんこうとか大原おおはらとかに行つてもろくなものにはなれない。だから、木ノ本きのもとさんにナガシイの進路のことを詮索してもらいたいんだよねえ。」

「ずつこけそうになる回答だつた。

「なんで。すぐに永島ながしまに話すとかじやないの。」

「今話して何がどう変わるのよ。私がただその進路に行きたいつて言つても変わるのは3年後。だつたらそこまでにやること、知つておきたいことがあるの。」

(確かに。坂口さかぐちさんには鉄道関連の進路でどんなものがあるかなんてわからない。そのために永島ながしまの詮索・・・。)

「調べてほしいのはナガシイの進路のこと。進路がわかれば後は私が何とかする。もちろん、その時に言わなくちゃいけないことも話す。それに、もしそれまでの間に話すきっかけができたらその時いう。」

「でも永島ながしまの進路がわかつても、行きたいって思つてる学校がいくつもあつたらどうするの。」

「そこは、大丈夫。ナガシイは行く学校は必ず一つだけに絞る。そこ以外行く気ないから。」

「これも疑わしい情報だ。でも、永島ながしまが岸川きしかわを単願で受験したということは・・・。なら坂口さかぐちがこういうことも分かる。」

「だから、答えが出るのは少なくとも3年生の春。その時までに進路が決まってなかつたらその段階でそれは言つ。」

「でも、そこまでは永島ながしまには話さないってことだよなあ。」

「それはそうだけど・・・。でも、進路のことなんて今から考へてる人なんて私以外いないと思うし。」

(そういう問題じゃなくて・・・。)

「それに、私を本氣にしてくれたのは木ノ本きのもとさん。私、今までこんなに本氣でこの進路のことなんて考えたことなかつた。でも今は違う。夢を実現させるためならなんだつてする。でも、そこまで行く工程を知らなかつたら何にもならない。協力してほしいの。」

「・・・」

ため息が出た。心のどこかで、押されきつた感覚があるからだ。

「分かつた。同じ進路を志す仲間として協力する。」

「決まり。じゃあ、メアド交換しよう。」

坂口はポケットから携帯電話を取り出した。形は何かどこかで見たことがある。・・・。永島の携帯電話と同じなのだ。

「あれ、同じ携帯。」

「あつ、そななんだ。ナガシイの場合性能とかそういうので携帯選ばないからなあ。多分形だけで見ればこれかなあって思つたんだけど、マジで同じとは思わなかつた。」

「・・・。」

（坂口さんには永島の思考回路全部がコピーされてるのか。）

「て、そんなことどうでもいい。」

自分が言いだした言葉に歯止めをかけて、赤外線受信の機能を起動させる。

「ああ、あと。私のことは萌^{もへ}つて呼んでいいからね。」

自分も携帯^{けータイ}を出そうとしているときにそう言われた。

「木ノ本さんつて何て呼ばれたい。部活の中じやハルナンだつたよねえ。でもハルナンは嫌だよねえ・・・。じゃあ、榛名^{はるな}ちゃんでいい。」

「・・・。なんでもいいよ。つうか、いまその話関係ないでしょ。この後二人はアドレスを交換し、進路が確定するまで永島には秘密で計画を推し進めていくことを正式に決めたのだ。

翌日。宗谷学園では・・・、

「うーん。確か今日浜北に入れ替えた編成が1001で、上島^{かみじま}で入れ替えたやつが2003で、八幡^{はちまん}で入れ替えた編成が1007と1005で、乗ってきた編成が2004と2002。今日は1001と1005と2002が車庫に入つて、2003と1007と2004がふつうに走る・・・。」

今日はなぜか独り言を言つている。それが気になつて黒崎^{くろさき}が話しか

けた。

「今日はどうしたの。なんかさつきから1001がどうの囁つてゐるけど。」

「えっ。ああ。帰りに乗る電車何かなあつて思つて。」

（やつぱりそれなんだ。）

「帰るときに乗る電車なんてわかるの。」

「そんなの簡単だよ。たくさん乗つたらどうこうつ運用してゐるか一発で分かるし。」

（それが一發で分かるつて。相当イツ テルよなあ。）

「でも、遠江急行だけはわかんないなあ。あれ先頭の右側のところに小さく編成番号が書いてあるだけだから。あれさえわかれればどういう運用してゐるかわかるのに。」

「・・・。」

話には到底ついていけないと思いその場を離れた。

「15時42分に來るのが2003で、54分に來るのが1007。16時06分に來るのが2004。部活もやつてないからそこまで待つのはちょっとなあ。」

「・・・。」

席がちょっと離れている萌の友達。端岡に今のこと振つてみた。

「ねえ、夏紀。萌どうしちゃつたのよ。」

「何。何か変なことでも言つてるの。」

「変なことつて言えば、少し変かなあ。さつきから1001がどうのこうなとか一人で喋り捲つてるし。」

「・・・。」

「ねえ、早くどうにかしたほうが・・・。」

「いいよ。あのままで。」

端岡から返つてきたのはまずそれだつた。

「多分、何かに目覚めたんだと思うなあ。元気がないつてちょっと心配してたけど、あれだつたらすぐに立ち直るね。」

「・・・。なんだよそれ。萌が独り言多い時は元氣つていう一種の

（もえ）

バロメーターか。」

「そんな感じかなあ。」

「何に田覚めたんだろうなあ。」

黒崎くろさきが端岡はしおかに聞いた質問の回答は園田そのだから返ってきた。

「きっと電車の運転手だよ。」

「えつ。まさか。あれって男の子が成るもんだひ。ふつう女の子が就くような・・・。」

「確かに。女の子が就くとしたら新幹線の乗務員しんかんせんの乗務員くるとかだろうな。」

「でも、今ならそんなの関係ないんじやない。ていうかそこで差別とかしてたら絶対問題になる。それに私たちに偏見があるかもしねないじやん。」

「・・・。そうだな。」

「ああ、もういいや。2003(二〇〇三)で。」

「・・・。」

28列車 進路の密勅（後書き）

ちょっと強引過ぎたかなあ・・・。

でも、アマチュアの小説ですし、アマチュアみたいなまわし方つて
いつのもアリなんですよねえ・・・。

本編中で結構バカにしてることが多いですが、現実でも同じと
ことは全くありません。

29列車 工程 テスト

その日の放課後。^{きしかわ}岸川学園では・・・、

「今日は2日目の工程上げちゃうぞ。」

僕がみんなをまとめる。

「ところで、みんな何か考えてきた。」

「全然浮かびません。ディーゼルに乗ろうとするどどうしても。」

「大体形は考えてきたんですけど、自分が納得いくよには。」

「あつ。考えるの忘れてた。」

「まあ、木ノ本の場合無理ないよなあ。昨日考えてきたのがボツになつたわけだし。そんなにポンポン考えが量産できるような人じやないしね。」

「・・・」

何か今日は永島と話しづらい。^{ながしま}萌があそこまでしたい理由が自分の中では一つしか見つからないからだ。自分のほうははるかに彼女より短いのだが、そう思ったことがあるというのは事実だからだ。しかし、話さなくてはならない。鉄道の話に置いて口数が少ない自分は異常。心配かけまいと思つて口を開いた。

「そんなの誰でも同じだろ。あれ、相当自信あつたんだから。・・・。^{ながしま}そういう永島は何か考えてきたのか。」

「全然。」

(即行否定かよ。)

「でも、昨日佐久間が熊本^{くまもと}行くつて言つてたじやん。あれの行先だけパクつて行こうかなあと。」

「行こうかなあって。熊本にですか。」

「パクつてことはずつと各駅ですよねえ。」

「ああ。そんで、いちばん最後のほうは木ノ本^{きのもと}の案も少し入れた。で、これで本当に回れるのかわからんねえから、今から時刻表で調べるってわけ。」

「 いひ。ちゃんと調べてから来いよ。つうかちゃんと考えてきてる
じゃないか。」

「 まあまあ。そう怒らずに。じゃあ、醒ヶ井。^{さめがい} 時刻表貸して。」

「 だから。前にある時刻表取つてくれればいいじゃん。」

「 お前のほうが前の時刻表に近い。それに取りにいくの面倒だし。
(さすが。金持ち出身の人だな。)

「 いいよ。私が取つてくる。」

これをやり続けていてもらちが明かない。そう思つた木ノ本^{きのもと}が時刻表をとつてくる。その時刻表を渡されて、

「 えーと。鹿児島本線、鹿児島本線。えーと。あつた。」

見つけて開くのをやめたところ、開かれたのは鹿児島本線「上り」のページ。このページは「上り（八代 - 門司港）^{やつじょう} その3」となっている。前にページをめくつて、鹿児島本線「下り」のページを出

す。

「 えつと、まず。8時11分発の快速荒尾行きで、荒尾が9時26分。」

小倉方面からきていいる快速列車は大牟田^{おおむた} の一つした。荒尾^{あらお} という駅でその先に時刻の表示がない。これはここ荒尾^{あらお} が終点だという証。当然列車を乗り換える必要がある。荒尾をさした指を右に動かす。右側に行けばいくほど時刻は遅くなる。一本「特急つばめ」^{とっきゅう} を挟んで9時44分。普通列車八代行きがある。これに乗ると途中熊本には10時32分。この先八代まで行こうと思えば八代まで行ける。だが、あえてここでとめることにしよう。

「 熊本^{くまもと}まで来て10時32分かあ。この先どうするんだよ。」

「 熊本つて市電があるんだよ。」

「 しでん。」

木ノ本にはそれがわからなかつた。まだ元の知識量に戻つてない。

「 路面電車ですよ。木ノ本さんそんなことも分かんないんですか。」

「 空河^{そらのかわ}。後でシバカレたい。」

「 嫌です。」

「その話は置いといて、それ乗りつくして、帰りはどうしようかなあ。全部乗りつくすつて言つてもそんなにかからないよなあ。なら、

13時57分発の普通鳥栖行きに乗つて……」

出る言葉がなくなつた。終点鳥栖到着は16時05分。長いのだ。

「これ快速運転やつてくれませんかねえ。」

「やつちやくれないだらうな。」

「1この間だけでも「つばめ」とか「有明」とか使いましょ。」

「金かかるからやめよう。よし。そんでこれに乗つてつて、鳥栖が16時05分。これで言つて一番早く行ける列車が快速小倉行き。こいつに乗つていいくと博多に16時58分。これに一番早い博多南線は……。」

ページを白い部分の真ん中あたりから前よりの青いページに変える。東海道・山陽新幹線の下を探つていたが、博多南線の表示は「」にも見つからない。散々探して、いま開いているページは「東海道・山陽新幹線上り その7」。仕方がないので、ページを前に送つて青いページよりも前のページを開いた。ここにはいろんな情報が乗つていて。それはホテルや臨時列車の時刻など様々。しばらくめくつていくと東京首都圏の拡大された路線図が出てきた。もう1ページめぐると北海道がでかでかと載つているページ、次は東北地方、関東地方、中部地方、近畿地方という風に分かれている。これの九州地方が乗つているページを出して、博多南線をおつた。

(444ページ。)

ページ数を記憶して、そのページまでページをめくる。そのページには左上に小ぢんまりと博多南線が載つていた。

「これで一番早い博多南線が17時29分で、博多南着が17時39分。これで返つてくるときは……。19時04分のやつでは方が19時14分。完璧。」

とりあえずこんな感じで頭の中になつた案はこれでようやく実体化した。

あとはこれをアド先生に提出するだけ、

「はい。分かりました。」

この反応は通つたといつことと受け取つていいらしい。

「永島君。^{ながしま} 3日目はどうするつもりですか。」

「えつ。 3日目は大阪か新大阪に缶詰めのつもりですけど。」

「ナヨロンじやあるまいしょくやるひとするな。死ぬぞ。やめとけ、やめとけ。」

そういつたのはサヤ先輩だ。

「人を鉄道バカみたいに言うなつうの。」

「そう言つたつて何の説得力もないわ。どこからどつ見たつて鉄道バカじやないか。」

「・・・。」

「おいおい。二人ともやめる。」

アヤケン先輩が仲裁に入った。

「ナヨロンはどこからどつ見ても鉄道バカつていうの認めろよ。」

「本人否定してるとこりであつたりというな。」

「そして、サヤは鉄道好きの天然の際物好きつて認めろよ。」

「際物好きつてなんだよ。」

「・・・。」

「まあ、そんな話どうでもいいや。でも、このプランからすると、^{レディー}_{R e d D i e s e l}とか見ないんだな。」

「「レディー」。」

この言い方には疑問を持つた。まず何を言いたいのかが分からなかつた。

「あの、名寄先輩。^{なよろ}」

何か心当たりがあるらしく、空河が名寄に話しかけた。

「もしかして「キハ200」のことですか。」

「すつ・・・すごいなあ。通じるやつがいた・・・。」

さすがにこのことまでは予想していなかつたようだ。面喰つていた。

キハ200というのはJR九州のディーゼルカーである。この車両は働く線区^{せんく}とに色分けされており、赤と青と黄の3色がある。

今、ナヨロン先輩の言つたのは赤いキハ200の「じ。他の色は「Blue Diesel」「Yellow Diesel」とあだ名をつけているようだつた。

6月24日。佐久間の班が原案を出し、これで全部の班の自由行動の計画が出された。これでテスト前の部活は終了。次の部活はテストが終わってからになる。ここまでくれば一時は安心していいそうである。後はただ、その日が来るのを待つだけだと言つていた。

「7月上旬。そつそうテストだ。」

「なあ、宿毛。ここ教えてくんない。」

「数学? の教科書を持つて宿毛のところまで行く。」

「お前なあ。数学じゃなくて国語勉強しろよ。国語。」

「いいじやん。国語なんてどうにでもなりそつだし、それにこれわけわかんねえ。」

「分かんないとかつて言つておきながら、理解してる。お前に多いパターンじゃないか。」

「そ・・・それで教えてくれないとでもいうのか。」

「いや、そういうわけじゃないけど・・・。」

「じゃあ、教えて。」

「はいはい。」

（学年トップが縋り付いてる・・・。）

そう思いながら、宿毛とのやり取りを見た。

1時間後・・・、

「宿毛、今度はこれ教えて。」

「はつ。それ教えるもんかよ。覚えろよ。お前の短期記憶最強なんだから。」

「いいじやん。なんか問題出して。」

「問題があ。じゃあ、生殖細胞ができるときの分裂の名称。」

「減数分裂だろ。」

「正解。次。相同染色体どうじが平行に接着するようになった染色

体は。」

「えーと・・・。「一元がせんじょくたい価染色體。」

「正解。問題出すまでもないだろ。」

「いいからもつともつと。分かんないから。」

「ウソじやん。」

ずっと問題を出し合つて7分後。

「あ、覚えらんねえ。」

「ウソつけ。覚えてるだろ。永島。ながしま今回も生物100点取つたら殺すからな。」

「大丈夫。今回は取れないから。」

「嘘くさいんだよ。」

「ハハハ。」

「ハハハじやねえよ。まったく。」

また1時間後・・・同じことを繰り返して今日は終了。次の日も同じだった。そして数日たつと・・・

(ゲッ。)

「おい。俺に縋り付くからいつにいつになるんだよ。縋り付かなきやよかつたものを。」

耳元で宿毛すくもが悪魔みたいな声でささやいた。

「結構できてたと思つたらまたこの結果だもんなあ。なんで宿毛すくもが上じやないんだよ。」

「知るか。俺のほうはあれだけ勉強してきた結果がこれっていうほ
うに腹が立つ。」

「・・・。」

「まあいいや。次で抜けばいい。」

「だな。次で抜かれればいい。」

(一番上つていうのがよつほど氣にくわないみたいだな。)

その晩・・・、

「今回も学年トップつて宿毛君つていう子なのか。」

木ノ本きのもとがその話題を振つた。

「あつ。木ノ本まだ知らなかつたんだ。」

木ノ本の対岸に座つてゐる箕島が口を開いた。

「宿毛つていう人が学年トップつていうのは嘘なんだよ。本当の学

年トップは・・・。」

箕島は視線を永島のほうに向かへた。

「それ言つなつて。」

「マジ。学年トップつてこいつなのか。」

「そうだよ。」

疑問には佐久間が答えた。

（マジかよ。今までずっとバカつていう方面で同類つて思つてたのに。そもそもなんでそんなに頭いい人が岸川に來てるわけ。）

「まあ、ほかの高校狙う氣もなかつたし、行くの面倒くさかつたし。

「ここは面倒じやないんだ。」

「うん。ここはね。遊ぶために学校來てるし。」

「そりや目的が違うだろ。」

「まあ、いいじやん。人それぞれ目的が違うつていうのはふつうだし。」

（こいつの場合それがふつうつて言つてもふつうじやないようにな聞こえる。）

その日の放課後。ソフトボール部。

（ダメだ。なんかやる氣しない。でも、夏の大会も近いんだし、どうにかついて行かなきや。でも・・・。なんだろこの気持ち。今までそんなにきつくなかった練習がこんなにきつく感じるのは・・・。）

この頃木ノ本の表情がとてもつらやましく思えるのだ。

29列車 工程 テスト（後書き）

ようやくとこりまで来ました。

結構現実と違うとこりといふのは田をつぶりたくなるほどでした
かねえ・・・。

30列車 浜松→米原

8月8日。ついにその日がやつてきた。

(今日から行つてくるのかあ。)

それを思いながら萌もえにメールを打つた。

「今日から、博多はかたに行つてくるよ。」

文面はそれだけにした。

6時21分。浜松駅の改札前に到着する。集合時間は6時45分。まだたつぶりと時間がある。

「おーす。ながしま永島・・・。」

木ノ本ながしまが既きにそこにいた。

「木ノ本早さいな。」

「だつて4時に日が覚めたんだもん。」

「早さつ。」

「早さつて。しょうがないだろ。」

「・・・。」

「お前ら、早すぎだぞ。」

横から声がした。ナヨロン先輩だ。

「ナヨロン先輩。おはようござります。」

「つうか、永島氣付かなかつたのか。同じ列車に乗つてたのに。」

「あつ、そだつたんですねか。」

「張り切つてるなあ1年生諸君。」

今度は善知鳥先輩の声だ。

「そう言つ善知鳥も張り切つてるなあ。」

「だつて博多(HKT)いけんだよ。そりやあワクワクするつて。」

「まあ、新幹線しんかんせんではいけないけどな。」

「ああ、そこだけ嫌いやだな。」

「・・・。」

6時40分までの間にサヤ先輩と佐久間さくま以外は全員そろつた。

「サヤのやつ何してんだろう。」

「いつものことだろ。サヤつて時間通りに来た例ないじゃん。」

アヤケン先輩と善知鳥先輩がまだ来ないサヤ先輩に文句を言つていた。その会話を聞いている傍らでナヨロン先輩がその姿を探した。

「あつ、来た、来た。おーい、サヤこっちだぞ。」

そう呼ぶとサヤ先輩が走ってきた。

「ナヨロン。俺そこまでバカじやないぞ・・・。」

集合場所まで來るとそう言つていた。

6時51分。佐久間が6分遅刻してきた。だが、これで全員集合する。全員の集合が確認できるとアド先生が全員に「青春18切符」を渡した。

「18切符」を渡されるといさんでホームに向かつた。よく聞くことだが、「18切符」には年齢制限があるみたいなことを思つている人が多いらしいがそんなことはない。それを補足しよう。ここから7時06分発。普通岐阜行きに乗車する。ホームに上った時間は6時55分。まだその列車は4番線にいない。

「永島。」

ホームに上がると佐久間が聞いてきた。

「何。」

何のことだらうと思つた。

「列車まだ。」

「・・・。」

何を言うのかと思えば・・・。

「まだに決まってるだろ。乗る電車が出るの7時06分だろ。まだ

11分あるし。」

醒ヶ井のツツコミが入った。

7時05分。4番線に列車が入線してきた。東京方面に顔を向けていると、黄色っぽいヘッドライトの車両がこっちに入ってきた。

「311系だ。」

入つて来る列車を知つてゐる僕はただつぶやいたつもりだった。だ

が、そうとう声が大きかったらしい。皆からはじうじたといつよくな顔で見られてしまつたが、そんなことは関係ない。

「へえ。311系つていうんだ。211系かと思ったよ。」

これには驚いた。撮り鉄の木ノ本なら分かつていると思つたからだ。

「えつ。木ノ本じゃないんだ。」

「私、こういう奴あんまり知らないんだ。313系は分かるんだけどね。」

と言つていた。

311系が4番線にブレーキ音を立てて止まつた。停まって1秒くらい経つとドアが開く。その開いたドアから降車する客を待つて車内に乗り込んだ。車内は半分くらいの混みだつた。311系の転換クロスシートはほぼすべて埋まつており、僕達は仕方がなく、ドア付近に固まつた。

「4番線ドアが閉まります。」注意ください。」

「東海道線、下り、普通列車岐阜行きです。ドアが閉まります。ご注意ください。」

ピンポン、ピンポン。発車前のやり取りが聞こえてくる。ドアが閉まると311系はカックンと揺れて浜松駅を発車した。ここから終点博多までは12時間の工程である。

7時38分。まずは豊橋までコマを進めてきた。ここ豊橋では特別快速米原行きに乗り換える。そのために移動をしなければならない。そのためドアの前にスタンバイした。

7時39分。豊橋に到着。311系が入線したホームは7番線。ここからダッシュで隣の5番線に行く。

ピンポン、ピンポン。ドアが開いた。ドアが開き切るのを見計らつて飛び出した。

7番線を見ると始まつたばかりのマラソンのように入でいっぱいだつた。

(サヤ先輩達は。)

考えながら足を動かす。何秒たつただろうか。ハクタ力先輩の姿を

とらえた。その後ろ姿をおつて階段を駆け上がる。階段も人でいっぱいだ。走つて上るのは少しきついくらいはいるだろうか。ハクタ力先輩の姿を見失わないように走つてその後を追つた。

階段を上るとハクタ力先輩の姿が左に消えた。特別快速の発車するホームは5番線。5番線は7番線の北側にある。僕も階段を上りきると左にかじをきつた。そのころにはハクタ力先輩は5・6番線に通じる階段を降りようとしていた。その階段へ僕も急ぐ。こつちの階段はほんの少し空いていた。人の間をかいくぐり、階段を駆かけ足で降りた。階段の中腹。踊り場まで来ると5番線に停まつている特別快速が姿を現した。その時、ハクタ力先輩がそこに吸い込まれるように入つていった。

5番線に停まつていたのは313系という通勤電車だった。この車両はJR東海の通勤電車でその顔と言つても過言でないほどの車両が在籍している。今のつた車両は5000番台といつ区分で、車両と車両の間に車体間ダンパを装備している。そつそう、さつき降りた311系はこの313系が登場する前の特別快速に充当されたいた車両である。そのため、この一つは内装が非常によく似ている。車内に乗り込むと開いている席を急いで探した。もう40%（パーセント）くらいの席が埋まつている。乗り込んだドアから一番近い席に腰を下ろした。

「永島さん。隣いいですか。」

空河に声をかけられた。ずっと僕の後ろをおつっていたのだろう。僕は「窓側はいい」と言って空河に譲つた。

7時49分。313系のドアが閉まり、軽快な音とともに動き出した。列車は車体をよじつて上り線から下り線へと入つて行つた。

この時に途中停車駅の案内があつた。
蒲郡、岡崎、安城と停車していく。安城まで来ると立つている客が僕達の前の視界を遮つた。このこうになると、何となく席を立つたい気分になつた。

「んつ、ナガシイビうした。」

「いや、何となくたつていたくなつただけで……。」

「座つとけつて。こつから長いぞ。」

「サヤ先輩の言うとおりだ。まだ1時間くらいしかたつていない。」

「いえ、サヤ先輩達も座つといた方がいいですよ。」

「いいよ。後輩に言われて座る先輩がどこに……いた。」
サヤ先輩の顔が引きつっていた。見てみるといつの間にか善知鳥先輩が僕の座つていたところに座つっていた。

「いいじゃん。立つてゐるの疲れたんだから。」

「いや、そうじゃないだろ。」

「いえ、いいです。僕は次ので座りますから。」

「永島、そう思つとかないほうがいいぞ。」

僕から見ると左側にいたナヨロン先輩がそう忠告した。

「えつ、なんで。」

「関西の新快速つて結構需要あるみたいだから、座れないかもよ。」
「223系なら座れなくてもいいって。」

（何、すべては車両。）

「ふうん。永島つて223系好きなんだな。」

「はい。僕が一番好きな車両ですから。」

「じゃあ、一つ聞いていいか。」

「なんですか。」

「223系なら「開空快速」か「新快速」か。どっちがいい。」

「断然223系 - 1000番台です。」

その後ナヨロン先輩とはこんな話になつた。

8時37分。名古屋に到着する。名古屋では客の入れ替えがあり、僕は自分の席に戻つた。善知鳥先輩はとつと開いた他の席に移つていつた。

木曽川あたりに差し掛かつたころだつただろうか。隣をグレーとオレンジのラインが目立つ車両が隣を通つた。

（「しなの」かなあ。でも、なんでここに……。）
頭の中に考えを巡らせていた。

9時09分。
大垣に到着。ここで後ろにくつついていた313系
を切り離して、さらにその先を目指した。この列車が終点米原に到
着したのは9時48分だった。そして、この先にコマを進めるため
には2分後に発車する新快速姫路行きに乗車しなければならなかっ
た。

30列車 浜松→米原（後書き）

今回は結構説明文が多くなつてすみません。後これまでより作風が固いと思われますが、読んでくれる人には感謝。

3-1列車 裏切りと「トワイライト」と死亡

9時48分。^{まいばら}米原に到着^{かま}。2番線に入線すると反対側3番線にはすでにシルバーの車体が構えていた。構えていたといつてもドアが開いているわけではなかった。

(発車時刻でもないのに、なんでドアが閉まっているのだろうか。)と思いつながら、313系から降りた。隣に行くと、なるほどと納得できた。隣にいる223系に乗り込む人は一様にドアの横にあるボタンを押して乗車していった。ここでは半自動でドア開閉を行つてゐるらしい。

9時49分。僕の班が全員いることを確認した。

9時50分。ティントウーン、ティントウーン。開いたままだつたドアが一斉に閉まつた。ドアが閉ると甲高い息抜きのような音がした。ブレーキが解除される音だ。この音が頭の遠くで聞こえるようになると、床下のモーター音を発し始めた。音階^{おんかい}が少し変わろうとしているころには既に米原のホームを後にしていた。
傍らに「^{エックス}300X」「^{ワイン}WIN350」「^{スター}STAR21」が見えてくるころ、大阪までの途中停車駅^{えき}が告げられた。この案内の途中に新快速は右にかじを切り、新幹線の高架橋をくぐつて、次駅彦根へと急いでいた。

「ナヨロン先輩。さつきのこと聞いとけばよかつたと思いました。足の裏が少し痛かった。

「だから言つただろ。新快速は結構需要があるつて。大阪までこままだつて思つといた方がいいぞ。」

ナヨロン先輩にはそう怒られた。

この先、この新快速に揺られること83分。11時13分に大阪駅に滑り込んだ。この列車にはそんなに長い間乗つていたという感覚^{かんかく}がなかつた。むしろ、新快速の方が新幹線よりも速いのではないかと錯覚^{さうかく}したくらいだった。

ホームに降り立つと衝撃的な事実が目に飛び込んできた。

(ウツ・・・ウソだろ・・・。)

後ろに連結されていたのは僕の好きな223系。1000番台。
(そんな・・・1両後ろだつたら、こいつに乗っていたのか・・・
。)

何も言ひことができなかつた。

11時15分。1000番台の後姿を見送つて、全員が集合して
いるところに行つた。

「聞け諸君。^{しょくくん} 12時発の新幹線に乗るからな。みんなここに集合し
ろよ。」

善知鳥先輩が右手を上げてみんなに教えている。

(新幹線・・・。新快速じやなくて・・・。)

「それでは、皆さんお昼にしてください。ええ、ここには11時5
5分ごろに集合してください。」

アド先生の説明を受けて解散した。

「なあ、善知鳥。今お前新快速じやなくて、新幹線つて言つてただ
ろ。」

「まあいいんじゃないか。俺達には間違えられても通じるし、どん
なバカでもここから乗る列車は新幹線じやないってわかるから。」

耳の遠くで聞こえている。

「永島、「トワイライトエクスプレス」見に行かないか。」

誰かにそう話しかけられる。

「永島」

木ノ本が僕を覗き込んだ。その時になつて今話しかけてきたのが木
ノ本だと分かつた。

「なつ・・・何。」

「何じゃないよ。「トワイライト」見に行かないかってこと。」

「ああ、「トワイライト」かあ。うん、見に行こう。」

僕はすぐに賛成した。

11時30分ごろだつただろうか。大阪駅の10番線に「寝台特
^{きゆう}」

「おおさか

しあいとう

急トワイライトエクスプレス」が入線してきた。編成はEF81-113号機を先頭に10両の24系寝台客車が続く。この列車も寝台特急と呼ばれているため、ブルートレインの仲間である。しかし、その車体はブルーではなく深緑で、ブルートレインと呼ばれた時の面影は車内で寝ることができる以外残っていない。

「永島。これ乗りたいって思わない。」

「ああ・・・。」

（できれば萌と一緒に・・・。）

いつか乗りたいと思いながら、先頭のEF81を携帯に収めた。

「木ノ本達も来てたのか。」

その声が「トワイライトエクスプレス」の方からした。ナヨロン先輩とアヤケン先輩だった。

「はい。」

「トワイライトエクスプレス」。いつか乗りたいよなあ。

「やつぱり乗るんだつたら、一番後ろですか。」

「そうだな。乗るんだつたら一番後ろだな。」

一番後ろの車両はスイートルームと言つて「トワイライトエクスプレス」に一つしかない部屋の一つがある。

「まあ、その前に名寄は彼女ができるかどうかだけどなあ。」

「うつさい。」

「木ノ本、俺たちは行こうか。」

「あつ、うん。ナヨロン先輩達も早く戻つてきてくださいね。もう集合まで5分くらいしかありませんよ。」

木ノ本^{きのもと}がそう言つているのが聞こえた。

4番線に足を運んでいると向こうから走つてくる人影があつた。

サヤ先輩と善知鳥先輩だった。

「あつ、ナガシイ・・・」「トワイライト」今停まつてゐる・・・。

「はい、停まつてますよ。」

「そう、ありがと。行くぞ。」

「サヤ待^まつてよ。」

そんな後姿を見送った。

「サヤ先輩達って何してたんだろう。」

「さあ。お昼でも食べに行こうとして、それで失敗したみたいな感じだよなあ。」

そう話しながら、4番線に通じる階段を上った。

12時00分。大阪を発つた。ここからはまた223系新快速に
お世話になる。この新快速は播州赤穂行き。途中で乗り換えをしな
くても相生まで行くことができる。

この列車に乗り込んで見ると、座れる席が全くなかった。僕たちはアド先生の誘導で空いている「くわづかな席に座った。僕が席に掛けるときにはドアが閉まり大阪を発車していた。この新快速に乗つて30分くらいがたつた。兵庫を通過したくらいだつただろうか。ふとした拍子に意識が飛んでしまつた。

目が覚めた。今走っているところがどこなのか。それが気になつた。外に目を向けてみる。当然のことだが、僕の知つている建物は一つもなかつた。次に、車内に目をやつた。僕の位置から見て左斜め後ろ。佐久間、諫早、空河、醒ヶ井が固まつて座つっていた。だが、全員寝てしまつてゐる。

(他の人はどこにいるんだろう。)

と思って車内を見回す前に次の停車駅が目に入つた。
(かつ・・・加古川つ。)

「ご乗車ありがとうございました。加古川一、加古川です。・・・。

」

(イカン。神戸発車してから寝ちゃつた。)

そう寝てしまつた自分を悔やんだ。

僕の座つている2号車の座席には夏の太陽がギラギラと入つてき
ている。まだ瞼が重い。こういう状況だとまたいつ寝てしまつが分
からない。そのため、ドア付近の椅子の背もたれに取り付けてある、
補助椅子に掛けようかと思つた時、加古川に到着した。

加古川では何人の客が降りていつた。そのうちの一人が荷物を

忘れて取りに来ていたが、取りに来た直後にドアが閉まってしまった
という災難に遭っていた。

加古川を発車すると僕は補助椅子の方に移った。

補助椅子を前に引き倒して座る。

「なんじゃこりや。」

つい声が出てしまった。この補助椅子には何か空洞の様なものを感じた。座るとそこにクッショ�이かないかのように沈みこんだ。そして、そこには金網の様なものしかないという感覚しか生まれなかつた。

13時01分。姫路に到着。ここから新快速は堂々（どうじゅう）の12両編成から8両編成になる。僕達の乗っている基本編成がそのまま播州赤穂まで行き、おいていかれる付属編成は新快速か普通として大阪方面に折り返していくのである。13時06分。新快速播州赤穂行きが姫路を発車した。

途中の相生に着いたのは13時24分だった。降りて見ると何とも小さな駅である。とても新幹線の停車駅とは思えないくらい小さかった。相生のホームに降り立つとまた乗り換える。13時30分発。普通三原行きに身を任せて途中の糸崎まで揺られる。車両は1

13系だった。

「ダイエットじゃあ。」

停まっていた113系を見てナヨロン先輩が言っていた。

「ダイエットって。」

「だってこの車両は延命手術を受けてダイエットに成功したんだよ。」

「あのナヨロン先輩。それダイエットじゃなくてリコーアルって

言つんじゃないんですか。」

「体质を改善したら、全部ダイエットしたんだよ。」

読者の皆様にとつてはこんなことどうでもいいだろう。しかし、僕達にはどうでもいい問題ではない。これから2時間以上普通に揺られるのである。いくら電車好きといつても2時間以上普通に乗つて

いるといふのは抵抗がある。これが新快速とかだったら話は変わるものだが・・・。

13時30分。相生を発車する。この列車で前述したとおり2時間以上揺られるのだ。

何分だつただろうか。岡山に着いた。

(まだ岡山かよ。)
心の中でそれを嘆いた。いくらなんでも長過ぎる。これなら、サヤ先輩が言つていた博多まで行つて、病院に行くといふ意味が分かった気がした。

さらに1時間がたつた。今いる駅は大門。まだ1時間以上乗車しないなければならない。ふと周りを見回してみた。ほとんどの人が眠りに就いていた。

(できることなら、俺も眠りたい・・・)

そこから41分が経過した。ようやくと乗り換え駅、糸崎に到着する。

(やつとここまで来たのかあ。)

降りると同時にため息をついた。ここからは少しは楽になるのだろうか。16時14分発の「快速シティーライナー」に期待することにした。

だが、その期待もすぐに打ち砕かれてしまった。「快速シティーライナー」に充当されている車両はさつきまで乗つっていた113系。好きでも嫌いでもないが、また同じ車両というのには抵抗がある。

16時14分。「快速シティーライナー」糸崎発車。

そこから何分経つただろうか。瀬野まで来た。ふと外に目をやると見たことのないオレンジ色の電気機関車が止まっていた。
「なんだ。これ。」

誰かに問い合わせたわけではないが、ナヨロン先輩が反応してくれた。「EF67。瀬野用の後押機関車だよ。」「セノハチ」って聞いたことないか。それがここのことだよ。」「セノハチ。」

首をかしげた。

「ああ、知らないんだ。永島なら知つてゐると思つたんだけどなあ。
そうか。永島でも知らないことがあるのか。」

自分に言い聞かせるように言った。

「山陽本線を敷設した山陽鉄道が、ここだけは経済性を優先しまし
よつて作っちゃつたんだよ。そしたら、22.6%（パーセント）
の急勾配になっちゃつてね。この勾配は山陽本線を走つての貨物列
車は上ることができない。だからああいうのが走るのを手伝つてくれてるつてこと。」

そう教えてくれた。

この列車が途中の広島に着いたのは17時28分であつた。

3-1列車 裏切りと「トワイライト」と死亡（後書き）

まだまだ。この先は飛ばせたからいいですけど・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0514x/>

MAINE TRAFFIC

2011年10月31日17時03分発行